

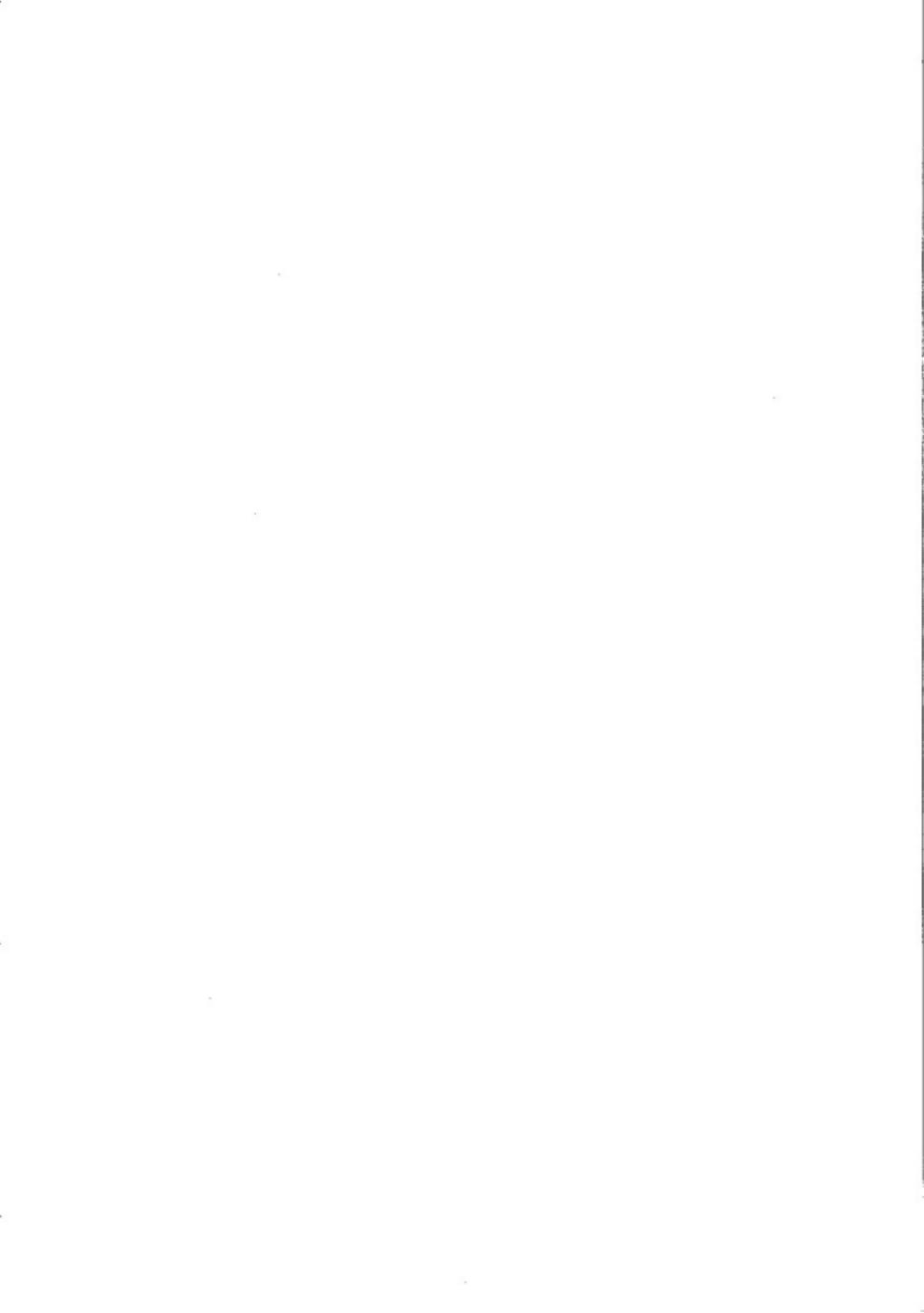
# 久宝寺遺跡

財團法人 八尾市文化財調査研究会報告83

- I 久宝寺遺跡（第43次調査）
- II 久宝寺遺跡（第48次調査）
- III 久宝寺遺跡（第49次調査）
- IV 久宝寺遺跡（第53次調査）
- V 久宝寺遺跡（第54次調査）
- VI 久宝寺遺跡（第56次調査）
- VII 久宝寺遺跡（第57次調査）
- VIII 久宝寺遺跡（第62次調査）

2005年

財團法人 八尾市文化財調査研究会



(財)八尾市文化財調査研究会報告 83 正誤表

頁	行	誤	正
52	29	⑦5G6/1 緑灰色粘土質シルト	⑧5G6/1 緑灰色粘土質シルト
68	23	T.P. +7.7m	T.P. +7.6m
85	10	註記 註1	註記
79	5	久宝寺遺跡は、久宝寺遺跡は、	久宝寺遺跡は、
81	34	マーブル状	ブロック状

# 久宝寺遺跡

財團法人 八尾市文化財調査研究会報告83

- I 久宝寺遺跡（第43次調査）
- II 久宝寺遺跡（第48次調査）
- III 久宝寺遺跡（第49次調査）
- IV 久宝寺遺跡（第53次調査）
- V 久宝寺遺跡（第54次調査）
- VI 久宝寺遺跡（第56次調査）
- VII 久宝寺遺跡（第57次調査）
- VIII 久宝寺遺跡（第62次調査）

2005年

財團法人 八尾市文化財調査研究会

## はしがき

久宝寺遺跡は、大阪府八尾市西部一帯の東西1.6km、南北1.7kmに広がる縄文時代後期～近世の複合遺跡であります。

久宝寺遺跡の遺跡範囲の南部には、24.6haにおよぶ「旧国鉄竜華操車場」が遺跡を横断するかたちで占地していました。当操車場は昭和13年に造られ、戦前・戦後を通じ、近畿圏の経済・物流を支える一大拠点として、その役割を果たしてきましたが、昭和61年の国鉄民営化に先立つ昭和59年に廃止され、46年間の歴史に幕を閉じることとなりました。

当操車場跡地については、昭和61年7月に八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が発表され、それに伴う遺構確認調査が、昭和63年と平成8年に八尾市教育委員会、平成7年に（財）大阪府文化財調査研究センター（現 大阪府文化財センター）により実施されています。

これらの遺構確認調査を経て、平成9年度以降については、「大阪竜華都市拠点地区」と名称され、再開発の内容が具体化したことにより、道路部分を中心とした基盤整備ならびに主要建物を対象とした発掘調査が、当調査研究会及び（財）大阪府文化財センターにより継続して実施されています。これらの一連の発掘調査では、縄文時代晩期～近代に至る膨大な遺構・遺物が検出され、考古学的な資料の蓄積をみました。

特に、古墳時代初頭～前期にかけての居住域・生産域ならびに完全な形の割竹形木棺が検出された「久宝寺1号墳」をはじめ、80基以上の墳墓で構成される墓域の存在は、当該期に「湾津」的な役割を果たした久宝寺遺跡の隆盛を可視的に示すものと言えます。

今回、平成14～16年度に「大阪竜華都市拠点地区」内で実施しました久宝寺遺跡の8箇所の内業整理業務が完了しましたので、報告書として刊行する運びとなりました。

本書が、地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため、広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して、ご協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に、心から厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会  
理事長 岩崎健二

## 序

1. 本書は財団法人八尾市文化財調査研究会が平成14~16年度に久宝寺遺跡内で実施した発掘調査の報告書を収録したもので、内業整理および本書作成の業務は各現地調査終了後に着手し、平成17年1月をもって終了した。
1. 本書に収録した報告は、下記のとおりである。
1. 本書に収録した各調査報告の文責は以下の通りである。I~III坪田真一、VI・V成海佳子、VI原田昌則、VII樋口 薫、VIII荒川和哉。全体の構成・編集は原田が行った。
1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図（昭和61年測量・平成6年修正・平成8年7月縮纂）、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』（平成13年度版）を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.（東京湾標準潮位）である。
1. 本書で用いた方位は、国土座標第VI系【日本測地系】の座標北である。
1. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局 監修・財団法人日本色彩研究所 色票監修に準拠した。
1. 遺構は下記の略号で示した。

井戸 - SE 土坑 - SK 溝 - SD ピット・小穴 - SP 落ち込み - SO  
土器集積 - SW 自然河川 - NR 不明遺構 - SX

1. 遺構図面の縮尺には、平面全図1/100・1/200・1/400、断面全図1/40・1/50がある。部分図面の縮尺には1/20・1/40がある。
1. 遺物図面の縮尺は、土器類1/4、石器類2/3、金属類1/1・1/2に統一した。断面については、弥生土器・土師器・黑色土器・瓦器・金属類は白、須恵器・陶磁器は黒、屋瓦・石器・木製品・土製品は斜線を用いた。
1. 調査に際しては、写真・実測図等の記録とともに、カラースライドを作成している。広く活用されることを希望する。

## 目 次

### はしがき

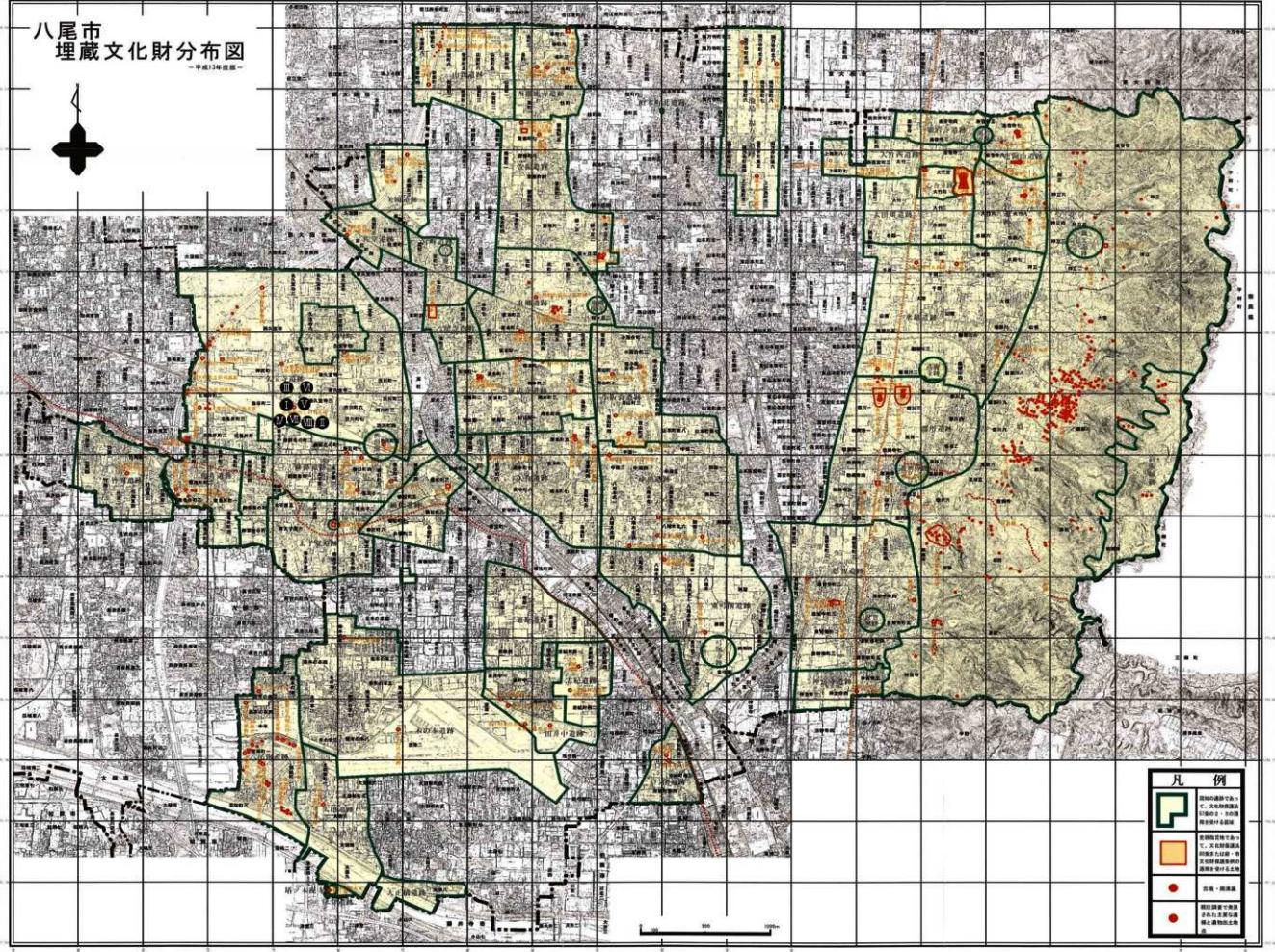
### 序

### 八尾市埋蔵文化財分布図

I 久宝寺遺跡第43次調査 (K H 2002-43) .....	1
II 久宝寺遺跡第48次調査 (K H 2002-48) .....	19
III 久宝寺遺跡第49次調査 (K H 2003-49) .....	33
IV 久宝寺遺跡第53次調査 (K H 2003-53) .....	45
V 久宝寺遺跡第54次調査 (K H 2003-54) .....	49
VI 久宝寺遺跡第56次調査 (K H 2004-56) .....	65
VII 久宝寺遺跡第57次調査 (K H 2004-57) .....	73
VIII 久宝寺遺跡第62次調査 (K H 2004-62) .....	79

八尾市  
埋蔵文化財分布図

一平成13年版圖一



I 久宝寺遺跡第43次調査 (K H 2002-43)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大字渋川地内（平成16年2月23日実施の町名地番改正に伴い現住所では能華町1丁目）で実施したJR久宝寺駅南側駅前広場南北横断デッキ下部工事に伴う久宝寺遺跡第43次調査（K H2002-43）の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教牛文第175号 平成14年8月21日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一・金親満夫（現 宮崎県立西都原考古博物館）が担当した。
1. 現地調査は、平成14年10月8日に着手し、同年11月8日に終了した。調査面積は約477m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査には、伊藤静江・岩沢玲子・加藤邦枝・川村一吉・竹田貴子・川島宣子・中村百合・村田知子・若林久美子の参加を得た。
1. 内業整理には上記の他、山内千恵子が参加した。
1. 本書掲載の写真撮影は坪田・金親・垣内洋平（遺物）が、執筆及び編集は坪田が行った。
1. 基準点測量は株式会社ウエスコに委託した。

## 本文目次

1.はじめに.....	1
2.調査概要.....	3
1) 調査の方法と経過.....	3
2) 基本層序.....	4
3) 検出遺構と出土遺物.....	5
3.まとめ.....	18

## 挿図目次

第1図 調査地周辺図.....	2
第2図 地区割図.....	3
第3図 調査区設定図.....	4
第4図 土層模式図.....	4
第5図 3区第1-1面平面図.....	5
第6図 明治時代の道路網復元図.....	6
第7図 3区第1-2面平面図.....	6
第8図 第2面平面図.....	7

第9図	第1・2面遺構出土遺物	8
第10図	第3面平面図	10
第11図	SK301・302平面・断面図	11
第12図	SK304平面・断面図	11
第13図	SD301断面図	11
第14図	第3面遺構出土遺物	12
第15図	第4面平面図	13
第16図	SD401平面・断面図	14
第17図	SD401出土遺物	14
第18図	SP401~404平面・断面図	15
第19図	NR401出土遺物	15
第20図	堰401平面・断面図	16
第21図	噴砂断面図	17

## 表 目 次

第1表	周辺の調査地一覧表	2
第2表	第2面溝（SD201~234）法量表	9
第3表	第3面溝（SD301~309）法量表	12

## 図 版 目 次

図版一	3区 第1~1面、1区 第2面、3区 第1~2面、2区 第2面、3区 道路状遺構102西側面、3区 第2面
図版二	1区 第3面、2区 第3面、SK304、2区 第4面、SD401、SD401
図版三	堰401、同上
図版四	堰401細部、堰401細部、堰401細部、堰401植物屑2細部、1区南壁噴砂、2区南壁噴砂
図版五	水田201、道路状遺構201、SD309、SD401、NR401出土遺物

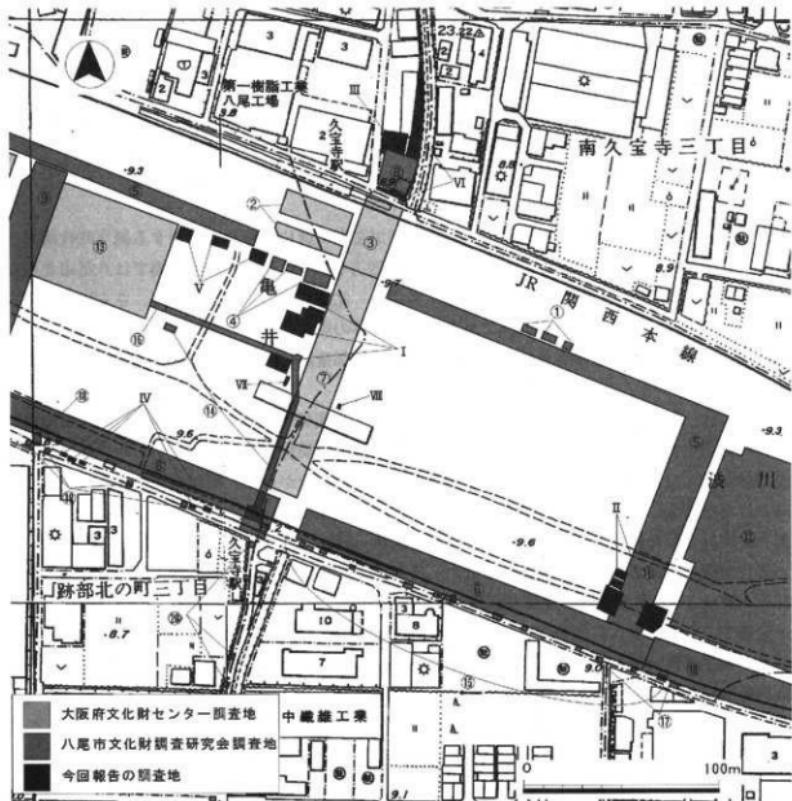
# I 久宝寺遺跡第43次調査 (KH2002-43)

## 1. はじめに

久宝寺遺跡は、古大和川の主流であった古長瀬川左岸の低位沖積地に立地する縄文時代晩期～近世の複合遺跡である。遺跡の推定範囲は約1.8km四方を測り、現在の行政区画では八尾市北西部の北久宝寺・久宝寺・西久宝寺・南久宝寺・神武町・北亀井・渋川町・龍華町・さらに東大阪市南西部の大蓮東・大蓮南がその範囲にあたる。当遺跡の周辺には、北東に佐堂遺跡、東に宮町遺跡・八尾寺内町遺跡・成法寺遺跡、南に亀井遺跡・跡部遺跡、西に加美遺跡（大阪市）が隣接している。

当遺跡は、1935年（昭和10年）、八尾市久宝寺5丁目で実施された道路工事中に、丸木舟の残片と共に弥生土器や土師器、須恵器が出土したことが発見の契機となった。しかしその後は発掘調査等の実施もなく、長らく考古学的な資料の蓄積は見られなかった。昭和40年代後半になり、遺跡の西部を南北に縱断する近畿自動車道の計画に伴い、1973～1974年（昭和48年～49年）に試掘調査が実施された結果、弥生時代～中世に至る遺構・遺物が重層的に広範囲にわたって検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。そしてこれを受けて、昭和55～61年に（財）大阪文化財センター（現、財團法人大阪府文化財センター。以下、センター。）によって近畿自動車道建設予定地での発掘調査（久宝寺北（その1～3）・久宝寺南（その1～3））が実施された。調査の結果、弥生時代～中世に至る遺構・遺物が多量に検出されている。なかでも、古墳時代初頭の準構造船の発見は特筆される。この調査以降も遺跡内で断続的に発掘調査が行われており、八尾市北亀井町3丁目で行われた第9次調査（KH91-9）では、古墳時代前期（布留式期古相）の2棟の住居内から重圓文鏡と素文鏡が出土したほか、近接する地点からは方墳2基と墳丘長35mを測る前方後方墳1基が検出され、前方後方墳からは、複合口縁壺形と直口壺形の2種類の壺形埴輪が検出されている。また八尾市神武町で行われた第18次調査（KH94-18）では、朝鮮半島の南部に淵源を持つ炉形土器・軟質両耳壺が出土しており、隣接する大阪市の加美遺跡で検出された加美1号方形周溝墓出土の朝鮮半島三国時代初頭の陶質土器とともに、渡米系集団の集落が古墳時代初頭に存在したことが明らかになった。この様に、久宝寺遺跡では、特に古墳時代初頭～前期を中心として、広範囲にわたって数多くの集落が形成されたことが知られている。

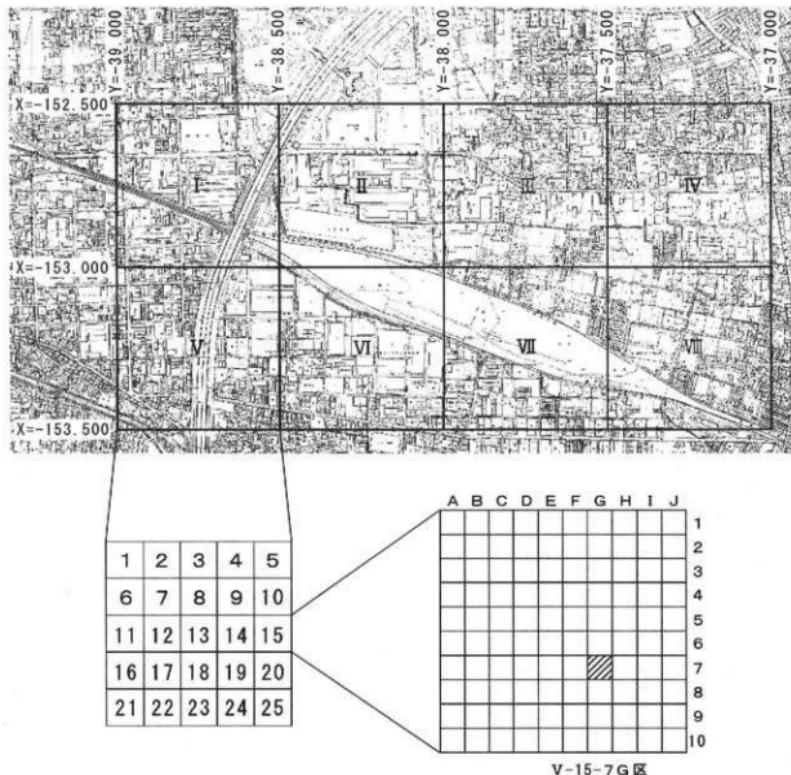
今回の調査地の位置する竜華操車場跡地は久宝寺遺跡南部にあたり、面積約20万m<sup>2</sup>を測る広大な土地である。この再開発に伴っては昭和63年以降、八尾市教育委員会、センター、当調査研究会によって継続的に発掘調査が実施されている。特に平成9年度以降は八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地地区画整理事業に伴う基盤整備に関連した発掘調査が随所で実施してきた。これらの調査の結果、縄文時代では晩期末の土器埋納土坑、弥生時代後期の方形周溝墓、古墳時代前期～後期の居住域や墓域、飛鳥時代の地震跡、奈良～平安時代の居住域を構成する掘立柱建物・井戸・土坑、中世～近世では水田・鳥畑・鍛溝といった生産域が見つかっている。なかでも⑬では墳丘が良好に遺存する『久宝寺1号墳』が検出され、主体部の割竹形木棺は国内で唯一の完存例として注目された。この『久宝寺1号墳』をはじめ、西半部で検出された古墳時代前期の約70基から成る墳墓群は、古墳出現期の様相を示す重要な資料といえる。



第1図 調査地周辺図 (S = 1/2500)

表1 周辺の調査地一覧表

番号	略 号	調査主体	調査地	調査原因	調査期間	文 献
①	KH90-4	研究会	大字亀井・渋川	駅舎改築	19900402→19900612	1994 (財)八尾市文化財調査研究会報告41
②	95- 8 - 9	センター	大字亀井	駅舎改築	19950523→19951220	1996 (財)大阪府文化財調査研究センター報告書第6集
③	96- 1 - 97	センター	大字渋川	道路	19960201→19980331	1998 (財)大阪府文化財調査研究センター報告書第26集
④	KH96-20	研究会	大字渋川	自由通路	19960921→19961114	2000 (財)八尾市文化財調査研究会報告66
⑤	KH97-23	研究会	大字亀井・渋川	道路	19971023→19980630	1998 平成9年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告
⑥	KH98-24	研究会	大字亀井・渋川	道路	19980210→19990220	2000 (財)八尾市文化財調査研究会報告69
⑦	98- 1 - 2	センター	大字渋川	道路	19980316→19990114	2001 (財)大阪府文化財調査研究センター報告書第60集
⑧	KH99-26	研究会	神武町	道路	19990323→19990820	2002 (財)八尾市文化財調査研究会報告70
⑨	KH99-28	研究会	大字亀井	道路	19990901→20000310	2004 (財)八尾市文化財調査研究会報告77
⑩	KH99-29	研究会	大字渋川	道路	19990901→20000113	2003 (財)八尾市文化財調査研究会報告74
⑪	KH99-30	研究会	大字亀井・渋川	道路	20000120→20000317	2000 平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告
⑫	KH2000-33	研究会	大字渋川	病院	20000509→20010228	2001 平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告
⑬	多目的広場	センター	大字亀井	多目的広場	20010227→20020322	2003 (財)大阪府文化財センター調査報告書第103集
⑭	KH2002-39	研究会	大字亀井	雨水貯留施設	20020122→20020930	2003 平成14年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告
⑮	KH2002-45	研究会	跡部北の町	共用桶槽	20021129→20030310	2003 (財)八尾市文化財調査研究会報告75
⑯	KH2003-51	研究会	大字亀井	雨水貯留施設	20030610→20030730	2004 平成15年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告
⑰	AT2002-33	研究会	跡部北の町・喜日町	公共下水道	20020516→20020609	2003 (財)八尾市文化財調査研究会報告75
⑱	AT2002-34	研究会	跡部北の町	公共下水道	20020602→20020911	2003 同上
⑲	AT2002-35	研究会	跡部北の町	公共下水道	20021209→20030314	2003 同上
⑳	AT2003-36	研究会	跡部北の町	公共下水道	20031107→20033115	2004 平成15年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告
I	KH2002-43	研究会	大字亀井	横断ダッキ	20020107→20021125	今回報告 本巻I
II	KH2002-48	研究会	大字渋川	横断ダッキ	20030310→20030331	今回報告 本巻II
III	KH2003-49	研究会	神武町	道路	20030611→20030826	今回報告 本巻III
IV	KH2003-53	研究会	跡部北の町・大字亀井	共用桶槽	20031003→20031009	今回報告 本巻IV
V	KH2004-54	研究会	大字渋川	横断ダッキ	20031126→20031216	今回報告 本巻V
VI	KH2004-56	研究会	神武町	道路	20040701→20040907	今回報告 本巻VI
VII	KH2004-57	研究会	電源町 2丁目	横断ダッキ	20040707→20040709	今回報告 本巻VII
VIII	KH2004-62	研究会	電源町 3丁目	横断ダッキ	20050129→20050125	今回報告 本巻VIII



第2図 地区割図

今回の調査地は竜華操車場のほぼ中央に位置している。周囲では当調査研究会による④・⑩、センターによる②・③・⑦等が近接している。主な調査成果としては、古墳時代中期頃の大規模な堰が数基検出されており、特に②・③で検出された北流する河川に設けられた堰は幅45mを超える規模を誇る。そしてこれらの堰を埋没させた洪水砂の上では、古墳時代中期～中世の集落構造が検出されている。⑦南部では、古墳時代後期の「七ツ門古墳」の検出が特筆され、平野部においては数少ない横穴式石室を有する古墳として注目される。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

調査区は南北に連なる3箇所で、北から1～3区とし、1区から調査を開始した。

掘削についてはまず現地表面（約T.P.+9.2m）から1.4~1.8mを機械により掘削した。そしてT.P.+7.2~6.6mまでを人力掘削により調査を実施した。

地区割については、竜華操車場跡地内において継続する調査に対応するために、平成9年度に当調査研究会が設定したものを使用した。これは、竜華操車場跡地全域を含む東西2km、南北1kmの地域について、国土座標第VI系を基準としたもので、500m四方の大区画-100m四方の中区画-10m四方の小区画からなる表記である。これによると今回の調査地は、中区画のVII-7区に包括されることになる。

遺構名は面ごとに北から通し番号を付け、遺構略号+面+二桁番号とした。

## 2) 基本層序

### 0層：操車場造成に伴う盛土層。

以下の層については近世の耕作による作土や島畑盛土、道路盛土等、何らかの改変を受けた部分が大半を占めている。

### 1層：旧耕土。島畑上位

や島畑・道路間に見られる。

### 2層：道路状遺構101盛土。

### 3層：道路状遺構101盛土。

### 4層：水田202-203作土。

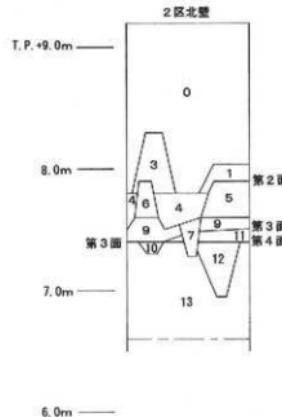
### 5層：島畑201盛土。

### 6層：道路状遺構201盛土。

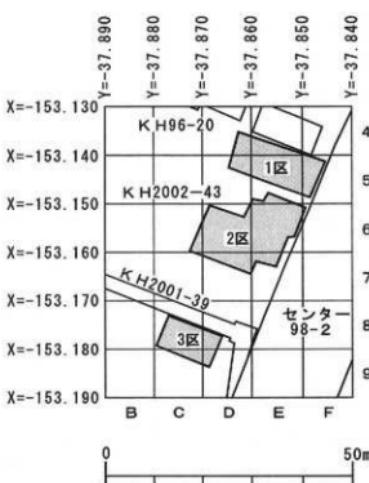
### 7層：SD228。

### 8層：SK202。

### 9層：10YR6/1褐色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土(斑鐵、マンガン斑)。



第4図 土層模式図



第3図 調査区設定図

2面の島畑や道路状遺構のベース層である。島畑下部の他、第2面水田下位にわずかに遺存する。搅拌が著しい土壌化層で、作土の可能性が高い。

10層：SD309。

11層：2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～中粒砂混シルト（マンガン斑）。第3・4面のベース層である。搅拌が著しい土壌化層で、層相は9層に類似しており分層は困難である。

12層：SD401。

13層：NR401②。7.5Y6/2灰オリーブ色シルト質粘土～極細粒砂互層。3区南壁の一部で確認した。14層を切り込むもので、複雑な堆積を成している。上部は搅拌され土壌化する。遺物は出土していない。当層以下は水成層で、第4面のベース層である。

14層：NR401①。5Y6/2灰オリーブ色粘土～極粗粒砂互層。上部は搅拌され土壌化する。堰401機能時に堆積した水成層である。古墳時代中期頃に比定される土器が出土した。

### 3) 検出遺構と出土遺物

調査では、盛上部分及び旧耕土・床上を機械掘削により除去し、以下第4面までの調査を実施した。第1面では操車場造成直前の道路を検出した。第2面では古代～現代にわたる島畑・水田・溝といった生産関連の遺構と道路状遺構を検出した。第3面は平安時代頃の遺構面と考えられ、溝・土坑・ピットを検出した。第4面は古墳時代中期の遺構面で、溝・堰を検出した。また1・2区では地震による噴砂が多く認められた。

#### 〈第1面〉

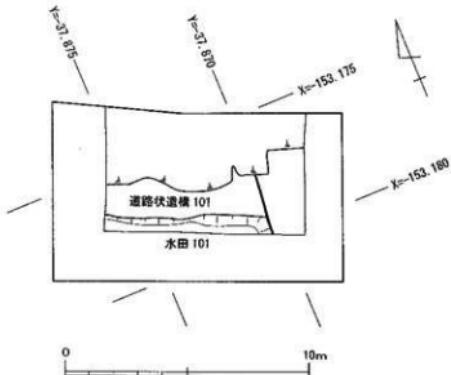
3区で第1-1・2面を検出した。上面の標高はT.P.+8.3～8.0mを測る。検出遺構は第1-1面が水田1筆（水田101）、道路状遺構1条（道路状遺構101）、第1-2面が溝2条（SD101・102）、道路状遺構1条（道路状遺構102）である。

#### 水田101

Ⅷ-7-8C区で検出した。規模は東西6.5m以上・南北0.8m以上を測る。道路状遺構101南側にあたり、東は道路状遺構102で区画される。作土は5B5/1青灰色極細粒砂混シルト質粘土である。グライ化した層相から水田としたが詳細は不明である。作土から近世陶器鉢（1）が出土している。1は口径20.0cmを測り、口縁部上面・外面、体部内面にオリーブ灰色の釉が掛かる。赤褐色系の胎上で、唐津系と考えられる。

#### 道路状遺構101

Ⅷ-7-8C区で検出した。規模は長さ6.5m以上、幅2.0m以上を測る。東



第5図 3区第1-1面平面図

西方向に伸び道路状遺構102に直角にとりつく状況であることから第1面上層遺構として捉えた。道路状遺構としたが、北側が擾乱されており性格や規模等は不明である。盛土は2.5Y5/2暗灰黄色～10YR6/3にぶい黄橙色の細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトを基調とする5層から成るが、道路状遺構102のような強固な構造ではない。また南側が水田と考えられることから島畑の可能性もある。

#### 道路状遺構102

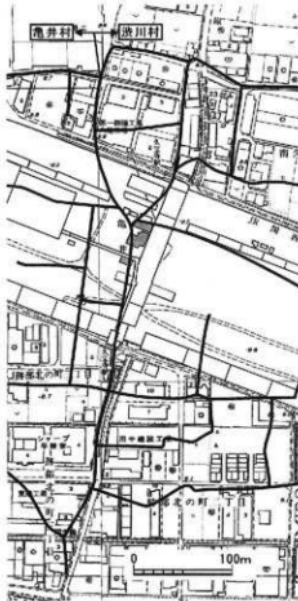
VII-7-8・9 C・D区、3区東部から2区西部にかけて南北方向に伸びるもので、2区では断面でのみ確認した。上幅約4.0mを測る。位置は第2面道路状遺構201を踏襲しており、これを拡幅・かさ上げして構築している。上部は層厚数センチを測る10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトが、いわゆる版築工法により固く叩き締められており、また礫敷きや、板を敷いている部分もある。3区では西側面を横板と杭により補強している。当遺構は、明治時代の地籍図によると、久宝寺村～竜華村を南北に結び、また西の亀井村と東の渋川村の村界となる道路である。<sup>註1</sup> 1区西側で北西・北東に分岐し、北東はセンター95-8・9トレンチ、97-1トレンチで確認されている道路状遺構に繋がる。

#### SD101

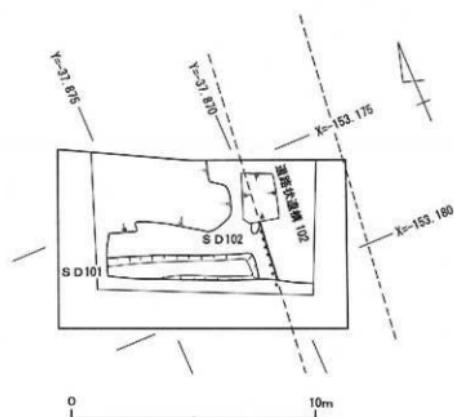
VII-7-8 C区で道路状遺構101の盛土を除去した面で検出した。東西方向の溝で、検出長6.0m、幅約1.0m、深さ約20cmを測る。2.5Y7/3浅黄色粘土ブロックを多く含む細砂～中疊という特異な埋土で、一気に埋められた様相である。道路状遺構102に伴う排水のための暗渠と考えている。近世陶磁器片が出土している。

#### SD102

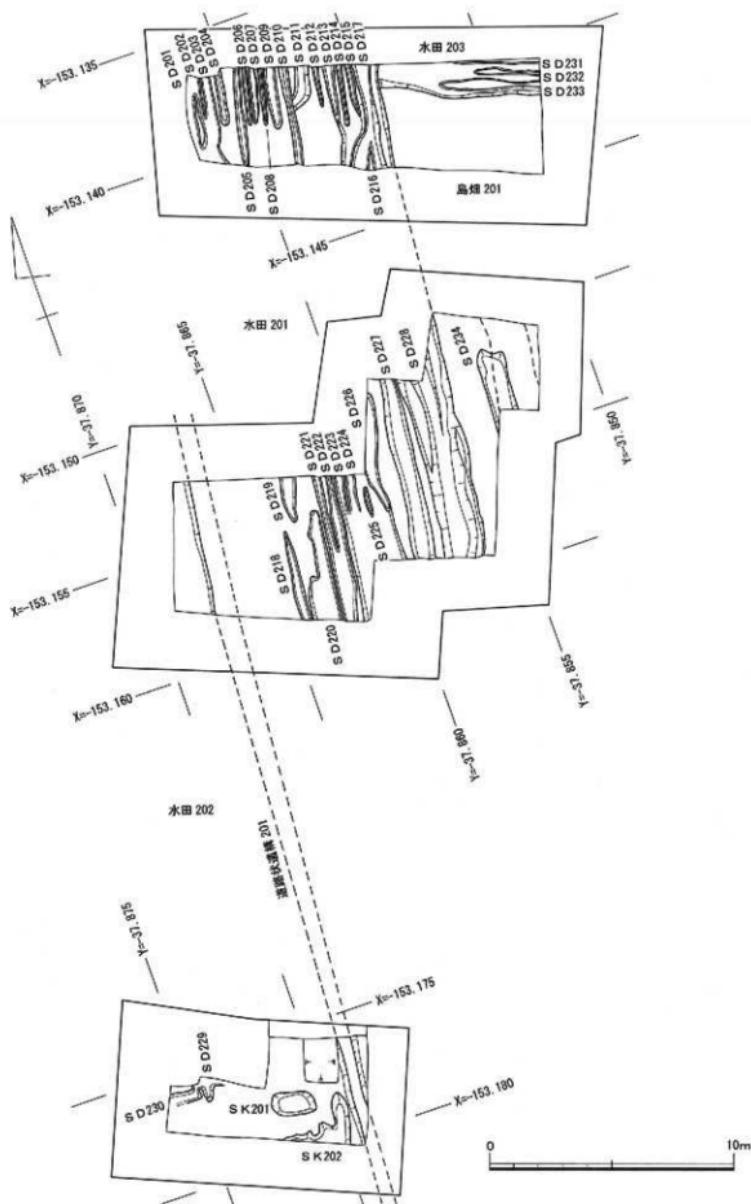
道路状遺構102の西側に沿うもので、側溝の可能性がある。規模は検出長0.45m、幅0.3m、深さ10cmを測る。埋土は2.5GY5/1オリーブ灰色粗砂～細疊少混粘土質シルト（グライ化・斑鉄）である。



第6図 明治時代の道路網復元図



第7図 3区第1-2面平面図



第8図 第2面平面図

## 〈第2面〉

1～3区で検出した。上面の標高はT.P.+7.8～7.3mを測る。水田3筆（水田201～203）、島畠1基（島畠201）、溝34条（SD201～234）、土坑2基（SK201・202）、道路状遺構1条（道路状遺構201）を検出した。溝・土坑はいずれも水田、島畠内で検出したもので、耕作に伴うものであろう。溝の法量等は表2にまとめた。

### 水田201

VII-7-4～7D-E区で検出した。1・2区で検出した島畠201と道路状遺構201の間に広がる水田である。規模は東西幅約10.5m・南北42m以上を測る。作土は10G4/1暗緑灰色中粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト（グライ化、斑鉄）である。作土からは平安時代頃までの土師器、須恵器や、瓦器、瓦、近世陶磁器片、煙管の火皿部が出土している。瓦器皿（2）・中国製白磁碗（3）を同化した。2は口径8.8cmを測る。口縁部内面に一重の圓線状暗文、見込みは一重の圓線状暗文内に平行線状暗文を施す。12世紀末頃に比定される。3は11世紀後半～12世紀前半以降に比定される。作土下面では南北方向の溝28条（SD201～228）を検出した。いずれも耕作に伴う溝で、埋土は作土と同様である。SD228から時期不明の土師器、須恵器、伊万里焼片が出土している。

### 水田202

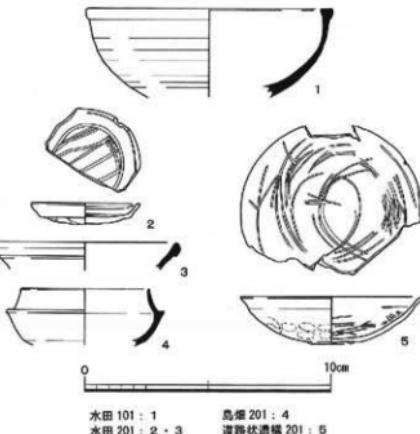
VII-7-6～9C-D区、道路状遺構201の西側に広がる水田である。規模は東西7.5m以上・南北28m以上を測る。作土はグライ化が著しく、上部が10G5/1暗緑色細粒砂～細粒砂混シルト質粘土、下部が5GY5/1オリーブ灰色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトである。作土下面で土坑2基（SK201・202）、南北方向の溝1条（SD229）、東西方向の溝1条（SD230）を検出した。いずれも耕作に伴う遺構で、埋土は作土と同様である。

### 水田203

VII-7-4～5E-F区で検出した島畠201北側の水田である。規模は東西6.5m以上・南北1.5m以上を測る。作土は10Y6/1灰色極細粒砂～極粗粒砂少混シルトである。作土下面で東西方向の溝3条（SD231～233）を検出した。耕作に伴う遺構で、埋土は作土と同様である。

### 島畠201

VII-7-4～6E-F区で、1～2区に跨って検出した島畠で、ほぼ方位に沿って構築されており、1区検出部分が北西角にあたる。規模は南北20m以上、東西6.5m以上を測る。盛土はおおまかに見て10YR6/2灰黄褐色～5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～粗粒砂混粘土質シルトである。盛土中には古墳時代中期以降の土器の細片が多く含まれる。4は6世紀初頭頃に比定される須恵器杯身である。2区では上面で溝1条



第9図 第1～2面遺構出土遺物

(SD234) を検出した。耕作に伴う溝で、埋土は10Y5/1灰色極細粒砂～粗粒砂多混シルトである。

#### SK201・202

3区の水田202作土下面で検出した土坑である。耕作に伴う溝であろう。埋土は10BG5/1青灰色細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土（極細粒砂ブロック含む、グライ化）である。SK201は1.8×0.9mの長方形に近い平面形で、断面逆台形を呈し、深さ約9cmを測る。SK202は2.9×2.1mの不定形を成し、断面逆台形を呈し、深さ約15cmを測る。SK202から土師器、須恵器、唐津焼片が出土している。

第2表 第2面溝（SD201～234）法量表

遺構名	地区	検出長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	遺構名	地区	検出長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)
SD201	W-7-4・5 D	3.5	40～	10	SD218	W-7-6 D	3.8	45	6
SD202	+	3.5	25	5	SD219	+	1.9	60	8
SD203	+	3.7	40	7	SD220	+	4.7	120	7
SD204	W-7-4 D	2.3	30	10	SD221	+	6.1	33	5
SD205	W-7-4・5 D・E	4.1	36	7	SD222	+	6.0	45	7
SD206	W-7-4 E	2.4	18	9	SD223	W-7-6・7 D	6.1	40	8
SD207	+	2.4	30	11	SD224	W-7-6 D	1.6	37	10
SD208	+	2.4	20	10	SD225	+	1.2	20	5
SD209	+	2.6	46	11	SD226	W-7-6 D・E	4.9	50	5
SD210	W-7-4・5 E	4.2	35	11	SD227	W-7-6 E	7.6	90	14
SD211	W-7-4 E	2.0	60	5	SD228	+	10.1	190	32
SD212	+	1.7	16	5	SD229	W-7-8 C	1.1	45	3
SD213	W-7-4・5 E	2.5	34	5	SD230	+	1.4	45	3
SD214	+	2.5	18	5	SD231	W-7-4・5 E・F	6.6	38	10
SD215	+	2.3	25	5	SD232	+	6.5	40	10
SD216	W-7-5 E	1.5	68	18	SD233	+	6.5	38	10
SD217	W-7-4・5 E	4.5	60	12	SD234	W-7-6 E	3.4	105	10

#### 道路状遺構201

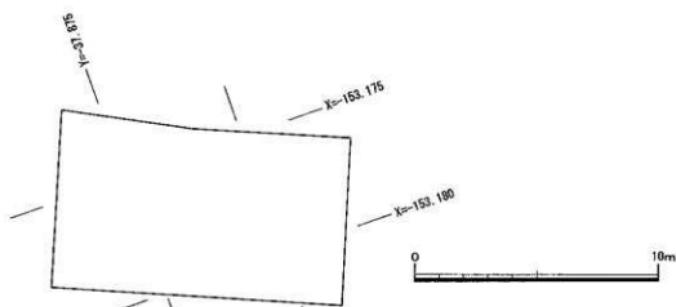
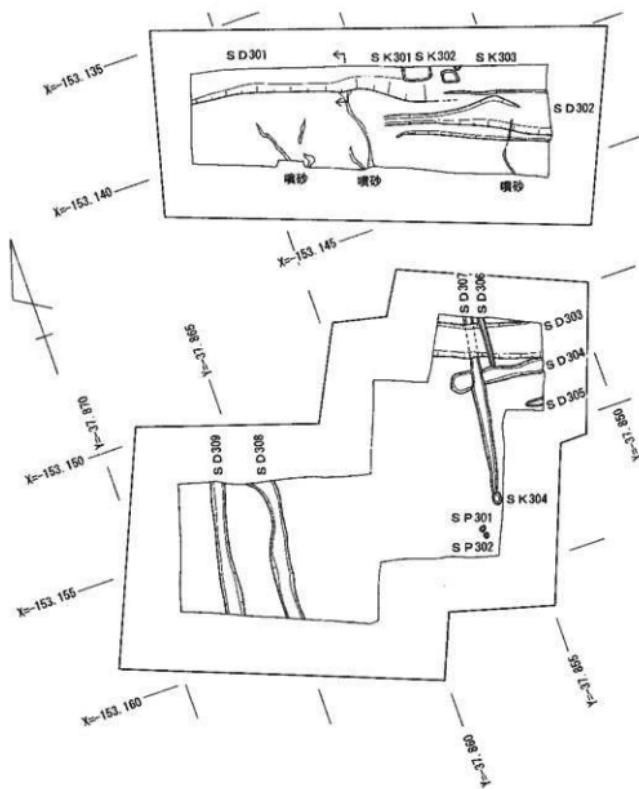
道路状遺構101の前身と捉えられる道路状遺構であり、上幅約1.0m・高さ約0.4mを測る。方向は座標北から東に約5度振っている。盛土は4層から成り、おおまかに見て10YR 5/2灰黄褐色～2.5Y 6/1黄灰色の極細粒砂～粗粒砂多混シルトである。盛土中から古墳時代中期頃の土師器、須恵器や、瓦器、備前焼窯、瓦片が出土している。和泉型瓦器碗（5）を図化した。内面にのみ圓線状暗文を施し、高台は粘土紐状で全周しないもので、13世紀前半に比定される。後世にまでよく踏襲される道路状遺構で、初現は鎌倉時代に遡るとされている。

#### 〈第3面〉

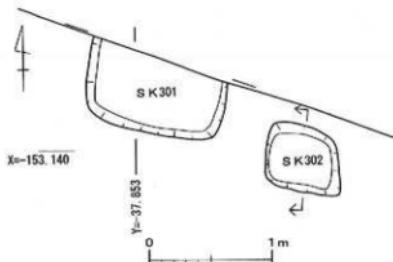
1・2区で検出した。概ね第2面の島畠盛土・水田作土を除去した段階で捉えた遺構面で、古代～近世の耕作面にあたる。第2面水田による削平が著しく、遺構は主に島畠下部にのみ遺存している。土坑4基（SK301～304）、溝9条（SD301～309）、ピット2個（SP301・302）を検出した。

#### SK301

1区北部、W-7-4 E区で検出した。平面方形を呈すると思われ、検出部分で東西約1.1m・南北約0.6mを測る。断面方形を呈し、埋土は2.5Y5/1黄灰色中粒砂～粗粒砂多混シルト（ブロック状、マンガン斑少量、鉄分多量）である。丸瓦片が出土している。



第10図 第3面平面図



第11図 SK301・302平面・断面図

**SK302**

SK301東側、Ⅶ-7-4・5E区で検出した平面隅丸方形の土坑である。規模は東西約0.6m・南北約0.5mを測る。断面台形に近く、埋土は2.5Y6/2黄灰色極細粒砂混シルト（ブロック状、マンガン斑少量、鉄分多量）である。

**SK303**

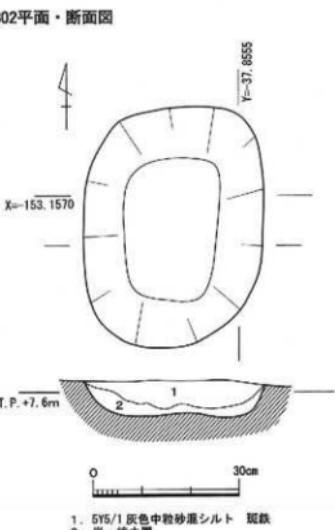
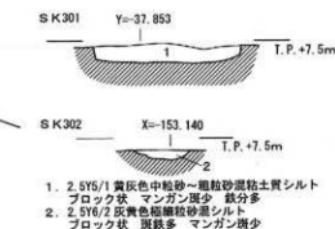
SK302東側、Ⅶ-7-4E区で検出した。検出部分の平面形は直径約30cmの円形であるが、上部を削平してしまっているため本来の形状等は不明である。北壁では東西76cm・深さ約12cmの規模が確認できる。埋土はSK302と同様である。

**SK304**

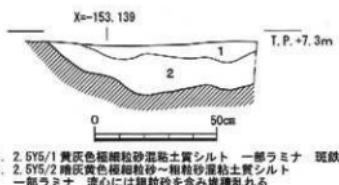
2区南東部、Ⅶ-7-6E区で検出した。平面形は南北48cm・東西37cmの隅丸方形を呈する。断面皿状で深さ約8cmを測り、埋土は上層が5Y5/1灰色中粒砂混シルト（斑鐵）、下層が炭・焼土層である。いわゆる焼土坑で、底面は火熱により特に北側が焼け縮まっている。時期不明の土師器の細片が数点出土している。

**SD301~309**

東西方向のSD301~304と南北方向のSD305~309がある。切り合い関係や層位から新旧の判るものは、SD301→302、SD304・305→307→303→306である。出土遺物等か

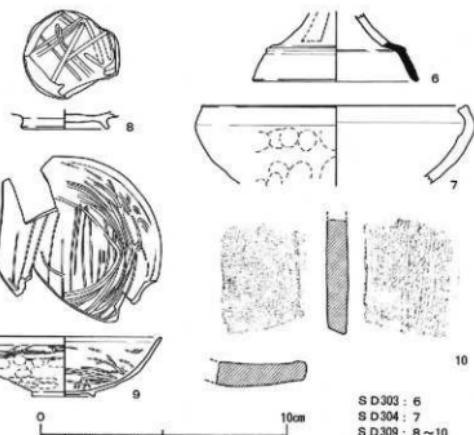


第12図 SK304平面・断面図



第13図 SD301断面図

らSD303・304・309が平安時代末頃に比定できる。SD304は埋土中に炭を多く含んでいる。詳細は第3表にまとめた。遺物はSD303-須恵器台付き壺(6)、SD304-土師器鉢(7)、SD309-瓦器梶(8・9)・平瓦(10)を図化した。6は3方向におそらく長方形のスカシを有するもので、外面に灰が掛かる。6世紀後半に比定されよう。7は奈良時代頃に比定される。9は暗文や器形からみて12世紀後半に、8は高台の様相から12世紀初頭頃に位置付けられる。10は淡褐色を呈するもので、二次焼成を受けていると思われる。



第14図 第3面遺構出土遺物

第3表 第3面溝(SD301~309)法量表

遺構名	地区	検出長(m)	幅(cm)	深さ(cm)	出土遺物
SD301	Ⅷ-7-4・5 D・E	10.0	140	25	土師器・須恵器
SD302	Ⅷ-7-4・5 E・F	6.8	180	27	土師器・須恵器
SD303	Ⅷ-7-5・6 E	4.4	140	20	土師器・須恵器(～平安)・石材
SD304	Ⅷ-7-6 E	3.8	70	22	土師器・須恵器(～平安)
SD305	°	0.75	32	9	土師器・須恵器(～平安)
SD306	Ⅷ-7-5・6 E	2.1	23	12	
SD307	°	7.3	54	9	土師器・須恵器(～奈良)
SD308	Ⅷ-7-6 D	5.8	76	10	
SD309	°	5.4	56	18	土師器・須恵器(～平安)・瓦器・平瓦
					8~10

#### SP301・302

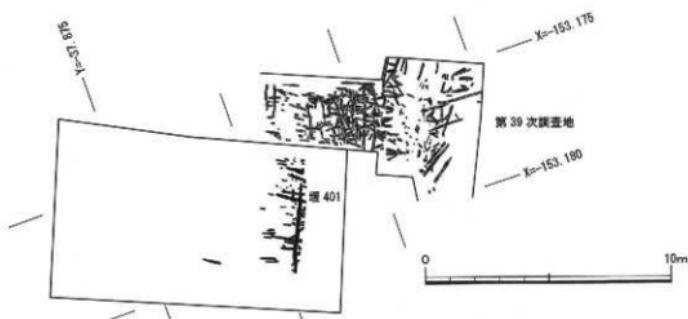
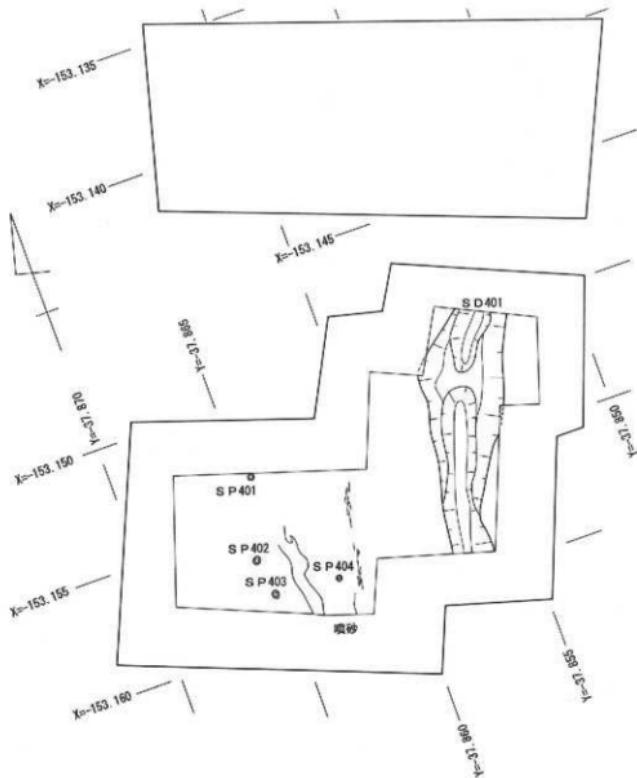
2区SK304の南西部で検出され、南北に並んでいる。平面形はほぼ円形を呈し、規模はSP301が直径約26cm・深さ約8cm、SP302が直径約23cm・深さ約9cmを測る。埋土は両方共10YR6/1褐色細粒砂ブロック混粘土質シルト(マンガン斑・下部鉄分)である。

#### 第4面

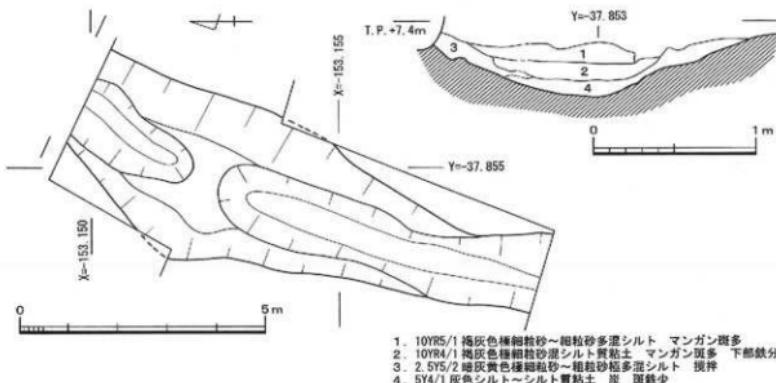
水成層である13層、あるいは14層上面にあたり、T.P.+7.3~7.4mを測る。溝1条(SD401)、ピット4個(SP401~404)、自然河川1条(NR401)、堰1基(堰401)を検出した。

#### SD401

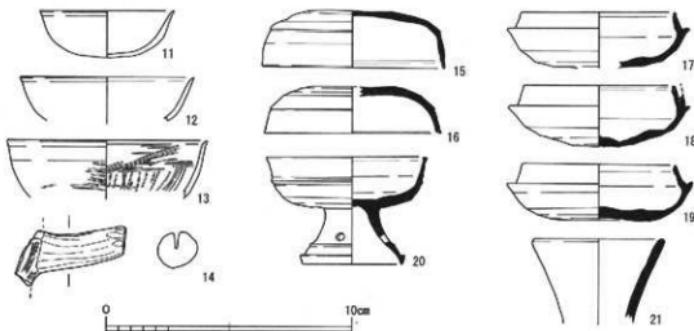
2区東端、Ⅷ-7-5・6 E区で検出したやや北東-南西方向の溝で、幅1.4~3.5m・深さ0.4~0.5mを測る。掘方は二段掘り状を呈する部分がある。埋土は4層から成り、最下層は攪拌されたような複雑な層相を呈する。北側の1区では続きが検出されなかったことから、北側は東に屈曲して行くものと考えられる。遺物は土師器杯(11~13)・甌(14)・須恵器杯蓋(15・16)・杯身(17~19)・無蓋高杯(20)・壺(21)を図化した。11はほぼ完形に復元され、口径10.8cm・器高



第15図 第4面平面図

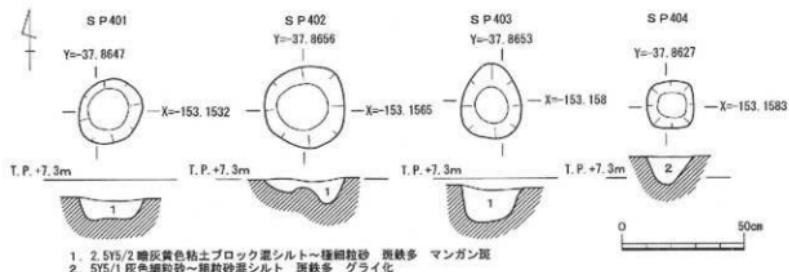


第16図 SD401平面・断面図



第17図 SD401出土遺物

3.9cmを測る。11・12は摩滅のため調整は不明である。13は内面に二段の放射状暗文を施す。14は体部外面に縱方向の平行タタキが認められる。把手は円柱状で、上面に切り込みを有する。また先端部下面に半裁竹管文風の痕跡が見られるが、成形時に把手を支えたつっかい棒の痕跡と思われる。15はほぼ完形で、口径14.8cm・器高4.7cmを測る。口縁内外面の一部に灰が掛かる。15・16は胎土中に1～3mmの砂粒を多く含む。18・19はほぼ完形で、口径・器高・受け部径は、それぞれ12.5cm・5.0cm・14.8cm、12.8cm・4.7cm・15.2cmを測る。18は底部内面中央に同心円タタキを施している。17・19はいずれも底部外面に灰が掛かる。20は2/3程度の残存で、口径13.0cm・器高8.8cm・脚底径8.5cmを測る。21は外面に灰が掛かる。時期は、14・15・20は5世紀後半～6世紀初頭、11～13・21は飛鳥時代に比定される。これらのうち完形やそれに近い15・18～20は北半部の肩部～底部から出土している。



第18図 SP401~404平面・断面図

**SP401~404**

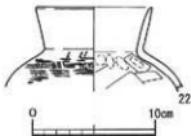
2区西部、Ⅶ-7-6D区で検出した。平面形はSP404が隅丸方形の他は円形・偏円形を呈する。法量(長辺×短辺×深さ)はSP401- $26 \times 26 \times 9$ cm、SP402- $34 \times 32 \times 10$ cm、SP403- $31 \times 25 \times 15$ cm、SP404- $20 \times 19 \times 12$ cmを測る。埋土はSP401~403が<sup>2.5</sup>YS/2暗灰黄色粘土ブロック混シルト～極細粒砂(斑鉄多・マンガン斑)、SP404が<sup>5</sup>YS/1灰色細粒砂～粗粒砂混シルト(斑鉄多・グライ化)である。

**NR401**

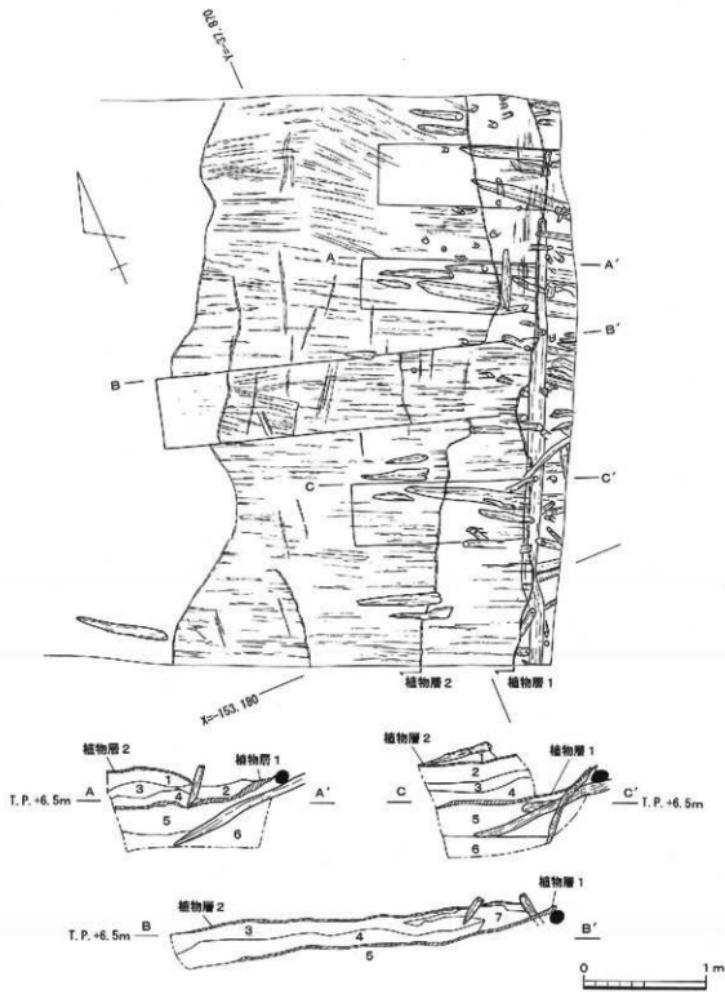
調査地全域で第4面のベースとなる水成層をNR401とした。NR401①は堰401の東側に肩を有すると考えられる。規模等は不明である。埋土は粘土～粗粒砂の互層状を成し、第39次調査地等、当地周辺ではほぼ水平な安定した堆積が確認されている。NR401②は3区で南北方向の東肩を検出したもので、NR401①を削平する。第39次調査「1-NR201」にあたり、幅約43m・深さ4m以上の規模が確認されている。1・2区で第4面のベースとなる水成層が、NR401①・②のどちらの堆積によるものかは明らかでない。

**堰401**

3区東部、Ⅶ-7-8・9C・D区で検出した。NR401①中に北東～南西方向に設置された木組みの堰である。長さ4.7mにわたって検出され、北側の第39次調査で検出された「2-堰301」の続きで、総延長は9m以上となる。東側は調査区外に至るために全容は不明である。基本的な構造は、西下がりに並べられた太く長い斜め杭と、斜め杭の間にほぼ垂直に打たれたやや細目の縱杭の交点に長い横木を渡すというものである。木材はすべて自然木であった。木組み内部に粘土・石等の充填は無く、内部の堆積層は外側(西側)と一連の水成層である。斜め杭は先端を尖らせており、設置間隔は15～30cmを測る。斜め杭は打ち込まれておらず、構築時の川底に置かれたもので、センター「96-1-堰2」の二股木にあたるのが斜め杭である。横木は1本のみの確認で、長さ3.7m以上を測る。そしてこの堰が横木のあたりまで埋まった段階で、堆積土上に樹皮や細い茎(葦か?)を敷き詰め(植物層1)、短い縱杭を打っている。さらに植物層1の上に約30cmの水成層が堆積した後、同様の作業が再度行なわれてい



第19図 NR401出土遺物



1. 10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂～粗粒粒砂互層
2. 7.5GY7/1 明緑灰色シルト互層 上部鉄分・細かい植物遺体をラミナ状に極多量含む
3. 5GY5/1 オリーブ灰色シルト～粘土互層
4. 2.5Y6/3にぶい黄色細粒砂～中粒砂互層
5. 7.5GY4/1 緑緑灰色粘土～シルト互層 細かい植物遺体をラミナ状に極多量含む
6. 2.5Y7/1 灰白色極細粒砂～シルト互層
7. SY6/2 灰オリーブ色極細粒砂～粗粒砂の複雜な層

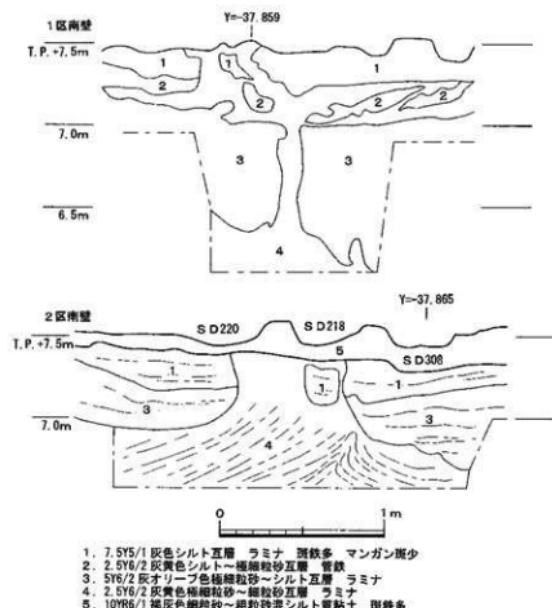
第20図 堤401平面・断面図

る(植物層2)。堰の構築時期は明らかでない。手がかりとなる出土遺物は土器師壺1点(22)のみである。木組み内部に堆積した砂層からの出土で、体部は外面縦・横方向の平行タタキ、内面ヘラケズリである。5世紀後半頃のものか。

この堰は西側の河川に対する施設である。機能についてであるが、斜め杭の設置角度が緩やかであることや、堰内部・外部の水成層(NR401)の穏やかな堆積状況、植物層の残りが良好であることからみて、水流の方向を変えるような設備ではなく、護岸設備的な施設と捉える方が良いと思われる。水平面に対する斜め杭の設置角度をみると25~27°を測る。センター調査地の堰と比較すると、「95-9-堰2」<sup>注2</sup>は13~20°、「96-1-堰2」<sup>注3</sup>は24~26°で、堰401と近い数値となることから、これらと同じ機能が考えられる。一方「96-1-堰1」<sup>注4</sup>は30~50°と角度が急であり、水流を止め、流れを変える機能が考えられよう。植物層2上に堆積する水成層が穏やかな堆積状況であることから、設置後しばらくは大規模な洪水に見舞われることは無かったのであろう。NR401②はNR401①を抉るように削平しているが、当調査区においては植物層を削平しているものの、堰本体には被害は及んでいない。抉られた部分からは堰部材と考えられる杭が1本出土しており、上流に破壊された堰が存在したものと思われる。

#### 〈噴砂〉

1・2区第3・4面で多く認められた。第2面水田作土や島畑盛土によって削平されるものが多いが、第3面のベースとなる11層に削平されるものも見られる。時期的には前者が近世以前、後者が平安時代頃以前に比定される。平面的には砂脈は概ね南北方向に走るもので、幅は数cmのものから最大約60cmの大規模なものがある。断面では最大約1.2mの砂の吹き上がりが確認できる。南約90mの第24次調査4調査区においても大規模な噴砂が確認されており、天武十三年(648)の白鳳の南海地震との対応を想定しているが、本例も同様の可能性が高い。<sup>注5</sup>



第21図 噴砂断面図

### 3.まとめ

今回の調査では古墳時代中期～近代の遺構・遺物を検出した。

第4面では北部の調査地と同様に、壠（壠401）を検出した。時期等は明確ではないが、河川堆積上から古墳時代中期に比定される土師器が出土しており、周辺調査地で検出されている壠と同様、この頃に設営されたものであろう。第3面では上坑・溝・ピットがある。出土遺物から平安時代後期頃の遺構面である。噴砂についてはその規模からみて大規模な地震によるものと想定され、天武13年（684）の白鳳南海地震や、慶長9年（1605）の慶長南海地震が候補として挙げられる。第2面では道路状遺構201の他、水田・鳥畑からなる近世の生産域が判明した。道路状遺構201の初現は鎌倉時代とされており、今回の調査でも盛土中より当該期の土器が出土している。道路状遺構201は規模を拡大して操車場造成直前まで機能し、亀井村・渋川村の村界にあたる道路として第1面道路状遺構101となっている。

#### 註記

- 註1 西村 歩 1985「堺県渋川郡亀井村の地誌図」「八尾市文化財紀要Ⅰ」八尾市教育委員会
- 註2 後藤信義・本田奈都子 1996「八尾市亀井所在 久宝寺遺跡・竜華地区（その1）発掘調査報告書 -JR 久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う-」（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第6集』財團法人大阪府文化財調査研究センター
- 註3 後藤信義・鳥崎久恵・長田芳子 1998「八尾市渋川所在 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書Ⅱ 一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査 -（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書第26集』財團法人大阪府文化財調査研究センター
- 註4 小山田宏一 2001「第2章 4 渡米人と治水技術」「開館記念特別展 古代の土木技術 大阪府立狭山池博物館図録3」大阪府立狭山池博物館  
小山田氏は「95-9-壠2」について、木組み内部が空で、流れをせき止めることはできず、「水の流れを弱め川岸をまもる水制であると思う」と評価している。
- 註5 原田昌則・他 2001「財團法人八尾市文化財調査研究会報告69 久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書-大阪竜華都市拠点地区竜華東西線3工区の掘削工事に伴う-」財團法人八尾市文化財調査研究会

# 図 版



3区第1-1面（西から）



1区第2面（西から）



3区第1-2面（西から）



2区第2面（南から）



3区道路状造構102西側面（南西から）



3区第2面（東から）



1区第3面（西から）



2区第3面（南から）



SK304（南から）



2区第4面（南から）



SD401（南から）



SD401（南から）



図版三 壁401 (西から)



同上 (北から)



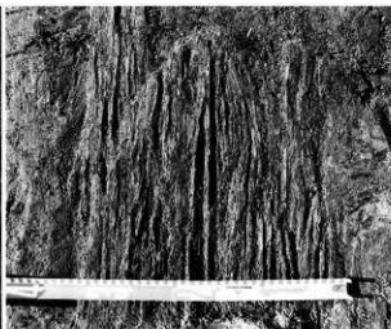
壙401細部（南から）



壙401細部（南から）



壙401細部（西から）



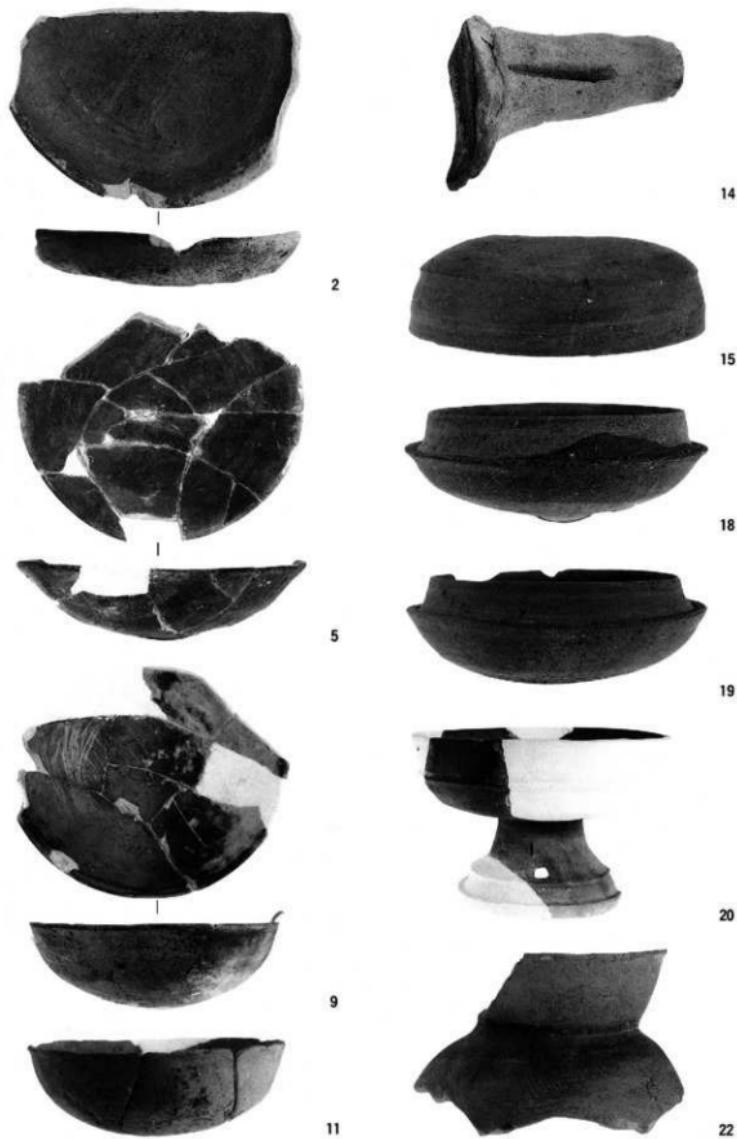
壙401植物層 2 細部



1区南壁噴砂



2区南壁噴砂



水田201 (2)、道路状造構201 (5)、SD309 (9)、SD401 (11・14・15・18・～20)、NR401 (22)

II 久宝寺遺跡第48次調査（K H 2002-48）

## 例 言

1. 本書は、大阪府八尾市大字渋川地内（平成16年2月23日実施の町名地番改正に伴い現住所では龍華町1丁目）で実施した久宝寺南駅前線横断アッキド部工事に伴う久宝寺遺跡第48次調査（KH2002-48）の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第337号 平成14年12月25日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成15年3月10日に着手し、同年4月7日に終了した。調査面積は約55.3m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査には、伊藤静江・岩沢玲子・垣内洋平・加藤邦枝・川村一吉・竹田貴子・田島宣子・中村百合・永井律子・村田知子・吉川一栄・若林久美子の参加を得た。
1. 内業整理には上記の他、山内千恵子が参加した。
1. 本書掲載の写真撮影は坪田・垣内（遺物）が、執筆及び編集は坪田が行った。

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	19
2.調査概要.....	20
1)調査方法.....	20
2)基本層序.....	20
3)検出遺構と出土遺物.....	21
3.まとめ.....	32

## 挿図目次

第1図 調査地位置図.....	19
第2図 土層模式図.....	20
第3図 1～3区平面図.....	22
第4図 4区平面図.....	23
第5図 畦畔状遺構横断面図 .....	24
第6図 S E301平面・断面図 .....	26
第7図 S E301出土遺物 .....	27
第8図 4区第3面平面図.....	28
第9図 S E302平面・断面図 .....	29
第10図 S E302出土遺物 .....	30
第11図 S D301出土遺物 .....	31
第12図 4区第3面土坑・溝断面図 .....	31

## 表目次

第1表 第3面溝一覧表.....	31
------------------	----

## 図版目次

図版一 1～3区 第1面、畦畔状遺構101・201北壁、1～3区 第2面、4区 第1面、  
4区 第2面、SK201

図版二 S E201、S E202、2・3区 第3面、S E301、S E301、S E301曲物

図版三 3区 第3面、S E302、S E302土器出土状況、S E302、S E302完掘、S E302底部

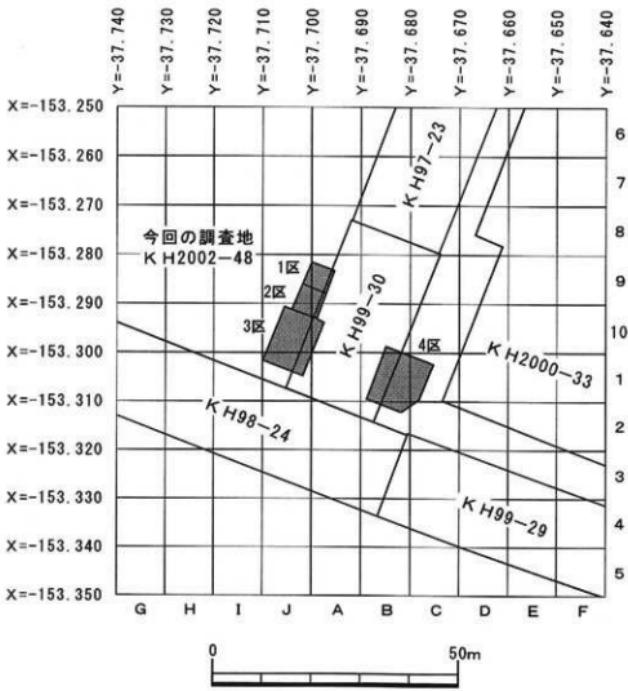
図版四 S E301、S E302、7層出土遺物

## II 久宝寺遺跡第48次調査 (K H 2002-48)

### 1. はじめに

久宝寺遺跡は、古大和川の主流であった古長瀬川左岸の低位沖積地にあたる縄文時代晚期～近世の複合遺跡である。今回の調査地である竜華操車場跡地内においては、昭和63年以降、(財)大阪府文化財調査研究センター(現、財団法人大阪府文化財センター。以下センター)、八尾市教育委員会、当調査研究会によって継続的に調査が実施されている。それらの調査の結果、弥生時代後期の方形周溝墓、古墳時代前期～中期の居住域や墓域、古墳時代後期の横穴式石室を有する古墳、飛鳥時代の地震跡、奈良～平安時代の居住域を構成する掘立柱建物・井戸・土坑、中世～近世では水田・島畑・鋤溝といった生産域が見つかっている。

今回の調査地はこの竜華操車場内のやや東部に位置しており、周囲では当研究会が第23次(K H 97-23)・第24次(K H 27-24)・第29次(K H 99-29)・第30次(K H 99-30)・第33次(K H 2000-33)調査を実施している。



第1図 調査地位置図

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法

調査区は4箇所で、南北に連なる1～3区と、その東約14mの4区である。1～3区は近接しているため、上面では調査区は連続している。

掘削についてはまず現地表面（約T.P.+8.8m）から約0.7mを機械により掘削した。そしてT.P.+7.2mまでを人力掘削により調査を実施した。また3・4区では機械掘削による下層調査を実施した。

地区割については、平成9年度に当調査研究会が設定したものを使用した（本書IのP3参照）。これによると今回の調査地は、中区画のⅧ-13・14・18・19区に包括される。

遺構名は面ごとに1区から通し番号を付け、遺構略号+面+二桁番号とした。

なお本調査地は第30次調査地の東・西にあたり、一部重複する位置関係にある。

### 2) 基本層序

3区南壁、4区東壁により基本層序を設定した。

・ 3区

0層：操車場造成に伴う盛土層及び旧耕土。

1層：水田101作土。

2層：島畑101盛土。

3層：水田201作土。

4層：島畑201盛土。

5層：10YR5/1褐色細粒砂混粘土質シルト（鉄分・マンガン斑多）。第2面の島畑や駐畔状遺構のベース層である。島畑下部の他、第2面水田下位にわずかに遺存する。搅拌が著しい土壤化層である。

6層：10YR5/1褐色細粒砂混シルト（マンガン斑多）。第3面のベース層で、以下は水成層である。

7層：10YR6/2灰黄褐色細礫～中礫混

粗粒砂～粗粒砂の互層。

8層：7.5GY5/1緑灰色極細粒砂～シ

ルト質粘土の互層（植物遺体多）。

・ 4区

0層：操車場造成に伴う盛土層及び旧

耕土。

1層：水田103作土。

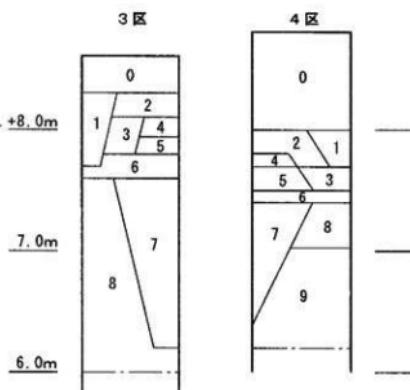
2層：島畑102盛土。

3層：水田203作土。

4層：島畑202盛土。

5層：10YR5/1褐色シルト質粘土

（鉄分・マンガン斑少）。第3面



第2図 土層模式図

のベース層で、島畑下部の他、第2面水田下位にわずかに遺存する。

6層：2.5Y6/2灰黄色シルト質粘土（鉄分少・マンガン斑多）。第3面のベース層で、上部の搅拌が著しい土壤化層である。以下は水成層である。

7層：7.5Y4/1灰色極細粒砂～粘土の互層（植物遺体多）。

8層：5Y6/2灰オリーブ色シルト～粘土の互層（鉄分）。

9層：10YR6/1褐灰色シルト～粗粒砂の互層（上部細礫多混）。

### 3) 検出遺構と出土遺物

調査では、盛土部分及び旧耕土・床土を機械掘削により除去し、以下第3面までの調査を実施した。第1面では近世～近代、第2面では中世～近世の水田・島畑・井戸・畦畔状遺構といった生産関連の遺構を検出した。第3面では古墳時代中期～平安時代頃の遺構を同一面で捉え、井戸・土坑・溝を検出した。また第3面以下は水成層が続いているが、3区においてはこの砂層内で液状化現象が随所で認められた。

#### 〈第1面〉

上面の標高はT.P.+7.9～8.3mを測る。検出遺構は水田3筆（水田101～103）、島畑2基（島畑101・102）、畦畔状遺構1条（畦畔状遺構101）、溝13条（S D 101～113）である。溝は水田内・島畑上面で検出したもので、耕作に伴うものであろう。各溝の法量等の詳細については割愛した。

#### 水田101

1～3区で検出したもので、第2面水田201を踏襲している。島畑101と畦畔状遺構101の間の南北に細長い範囲にあたり、規模は東西1.3～3.0m以上・南北19.3m以上を測る。作土は2.5GY5/1オリーブ灰色中粒砂～中礫混シルトでグライ化が著しい。作土から弥生土器、土師器、須恵器、瓦器、瓦類、中国製白磁、近世陶磁器片が出土しているが、固化しえるものは無かった。

#### 水田102

1～3区で検出したもので、第2面水田202を踏襲している。畦畔状遺構101の東側にあたり、規模は南北14.7m以上を測る。作土は10YR6/2灰黄褐色粗粒砂～極粗粒砂混シルトでグライ化が著しい。土師器、須恵器、瓦類、中国製青磁、近世陶磁器片が出土している。

#### 水田103

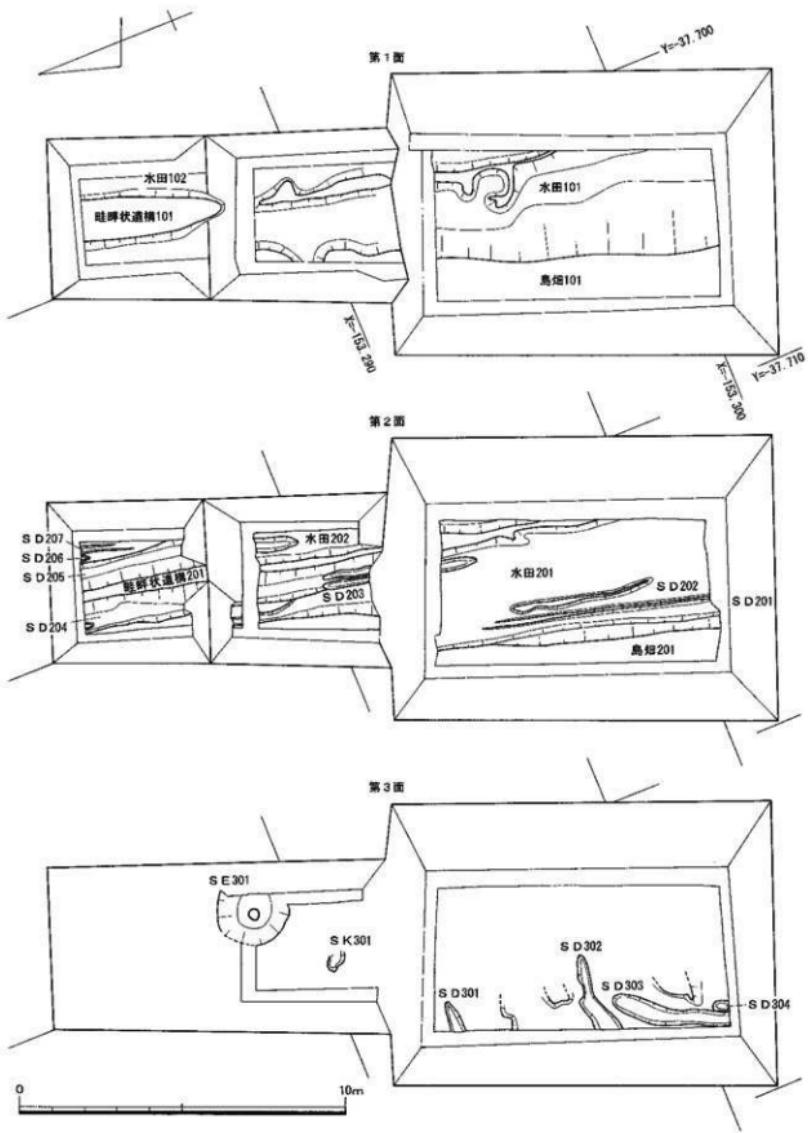
4区島畑102の南側に広がる。規模は東西6.6m以上・南北5.9m以上を測る。作土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色細粒砂～中粒砂混粘土質シルトである。作土下面では耕作に伴い形成されたと考えられる東西方向の溝9条（S D 102～110）、南北方向の溝3条（S D 111～113）を検出した。土師器、須恵器、瓦器片が出土している。

#### 島畑101

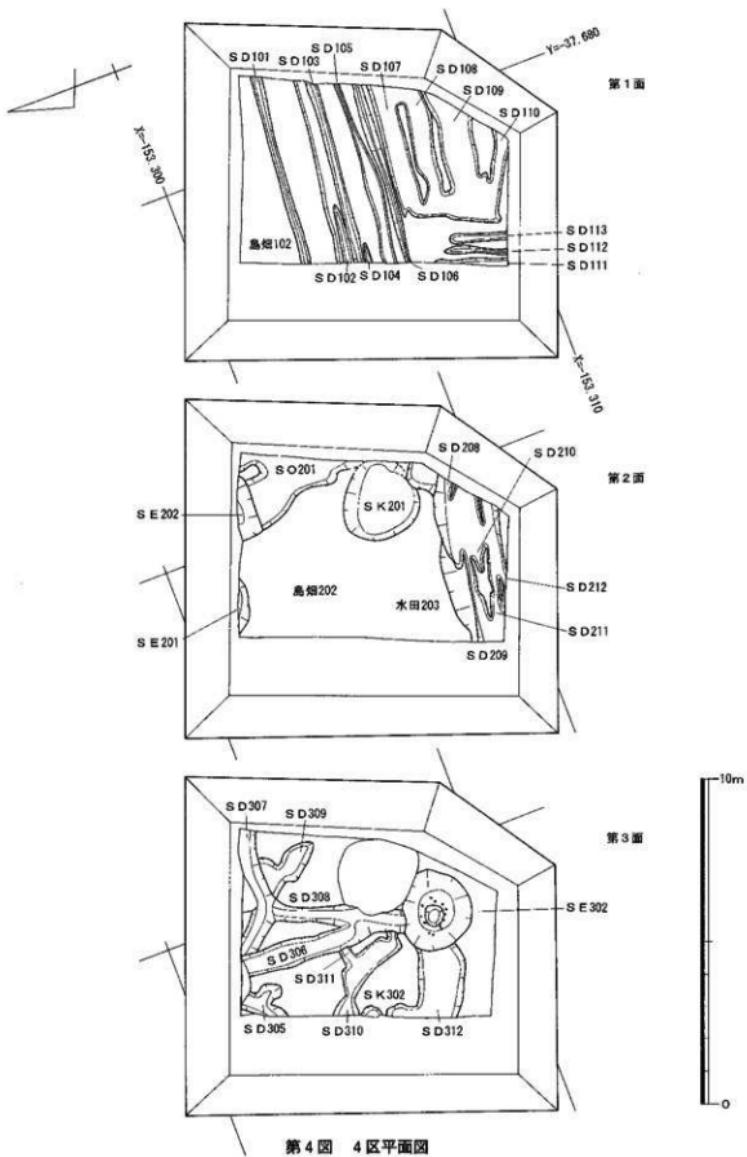
2・3区西部で検出した島畑で、規模は東西1.5m以上・南北14.2m以上を測る。第2面島畑201を拡張している。盛土は上部を機械掘削で除去したが、断面観察では最大厚0.6mが確認でき、上面の標高は約T.P.+8.5mを測る。盛土は3層に分層が可能であり、層相は固く締まった黄褐色系（10YR5/2～6/3）の細粒砂～粗粒砂混シルト質粘土である。盛土から土師器、須恵器、瓦類、近世陶磁器片が出土している。

#### 島畑102

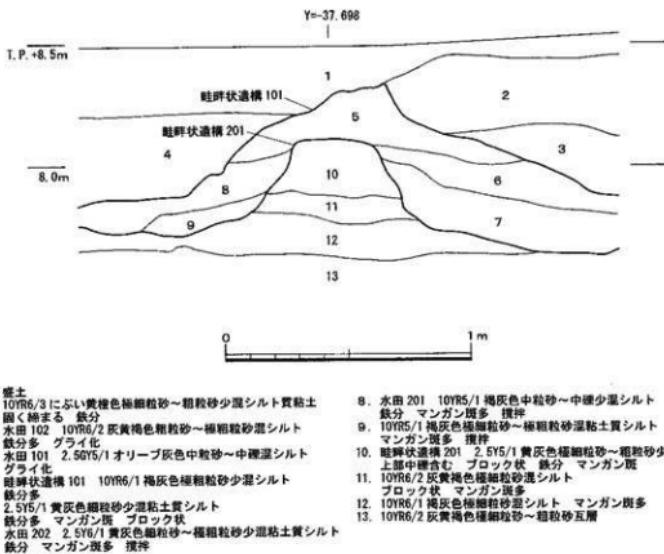
4区北部を占める島畑である。規模は東西6.1m以上・南北2.9m以上を測る。盛土は5Y5/1灰色



第3図 1～3区平面図



第4図 4区平面図



第5図 埋葬状構造断面図（1区北壁）

細粒砂～中粒砂混シルト質粘土である。上面で南辺に平行する溝1条（S D101）を検出した。盛土から土師器、須恵器、瓦器、瓦類、近世陶磁器片が出土している。

#### 埋葬状構造101

1～3区で検出した南北方向に直線的に伸びる埋葬状構造である。規模は検出長約14.7m・最大上幅約1.3m・最大下幅約1.7mを測り、水田面との比高差約0.2mを測る。第2面の埋葬状構造201上に10YR6/1暗灰色粗粒砂少混シルトを盛土して形成されている。盛土から土師器、須恵器、瓦類、近世陶磁器片が出土している。

#### 〈第2面〉

上面の標高はT.P.+7.7～8.1mを測る。水田3筆（水田201～203）、島畠2基（島畠201・202）、埋葬状構造1条（埋葬状構造201）、井戸2基（S E201・202）、土坑1基（S K201）、溝12条（S D201～212）、落ち込み1基（S O201）といった主に生産関連の構造を検出した。溝は水田内・島畠上面で検出したもので、第1面検出の溝群と同様、耕作に伴うものであろう。各溝の法量等の詳細については割愛した。

#### 水田201

1・2区で検出した島畠201と埋葬状構造201の間に広がる水田である。規模は東西約3.6m・南北19.3m以上を測る。作土は10YR5/1 暗灰色中粒砂～中礫少混シルトである。作土下面で埋葬状構造201に平行する溝4条（S D201～204）を検出した。いずれも耕作に伴う溝である。作土から土師器、須恵器、瓦類、近世陶磁器片が出土しているが、固化しえるものは無かった。

**水田202**

畦畔状遺構201の東側に広がる水田である。規模は東西1.5m以上・南北14.1m以上を測る。作土は10YR6/1褐色細粒砂混粘土質シルトである。作土下面で畦畔状遺構201に平行する溝3条(S D 205~207)を検出した。いずれも耕作に伴う遺構である。作土から近世の土師器壺鉢が出土している。

**水田203**

4区で検出した島畠202南側の水田である。規模は東西6.5m以上・南北1.5m以上を測る。作土下面で東西方向の溝5条(S D 208~212)を検出した。須恵器、近世陶磁器片が出土している。

**島畠201**

3区で検出した島畠で、規模は南北8.8m以上・東西1.0m以上を測る。盛土は2.5Y6/1黄灰色細粒砂～極粗粒砂混粘土質シルトである。盛土から土師器、須恵器、瓦器片が出土している。

**島畠202**

4区で検出した島畠で、規模は東西6.0m以上・南北6.5m以上を測る。盛土は10YR5/1褐色細粒砂～細粒砂混シルト質粘土である。上面でS E 201・202、S K 201、S O 201を検出した。土師器、須恵器、瓦器片が出土している。

**畦畔状遺構201**

1～3区で検出した南北方向に直線的に伸びる畦畔状遺構で、方向は座標北から東に約14度振っている。規模は検出長約15.9m・最大上幅約0.5m・最大下幅約1.5mを測り、水田面との比高差約0.3mを測る。盛土はブロック状を呈する砂混じりシルト2層から成り、層厚は約0.3mを測る。また上部には強化のためと思われる中疊や、土師器、須恵器、瓦器片、江戸時代前期頃の陶磁器片等を多く包含している。

**S E 201**

4区北壁際で南側の一部を検出した。検出部分からみて掘方平面が円形の井戸と考えられるが、詳細は不明である。規模は直径2.1m以上・深さ0.9m以上を測る。埋土は3層が確認でき、上から7.5YR5/1褐色細粒砂～粗粒砂少混シルト質粘土(ブロック状)、10YR5/2灰黄褐色極細粒砂混シルト質粘土、5GY4/1暗オリーブ灰色粘土～シルト(ブロック状)である。埋土から土師器、須恵器片が出土している。

**S E 202**

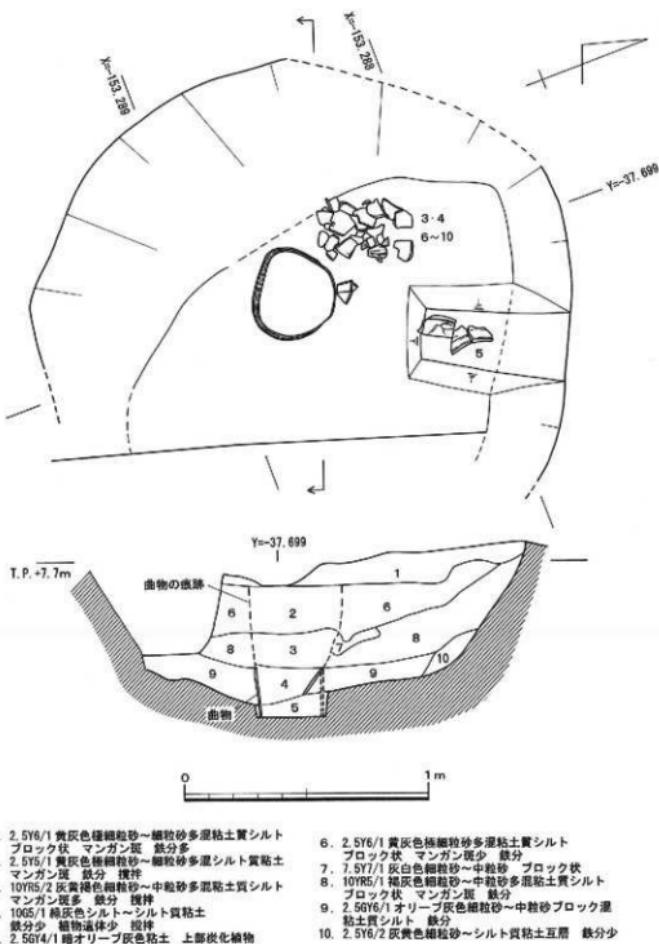
S E 201の東約1.0mに位置し、南側の一部を検出した。検出部分からみて掘方平面が方形の井戸と考えられるが、詳細は不明である。規模は一辺約1.9m・深さ0.8m以上を測る。埋土は3層が確認でき、上から10YR6/2灰黄褐色粗粒砂～細粒少混粘土質シルト(ブロック状)、10YR5/1褐色極細粒砂～中粒砂混シルト質粘土、N5/0灰色粘土ブロック混極細粒砂～シルトである。遺物は出土していない。

**S K 201**

4区島畠202南辺近くに位置する平面偏円形の土坑である。規模は直径約2.4m・深さ約0.5mを測る。断面逆台形を呈し、底部はほぼ平らである。埋土は2.5Y6/1黄灰色シルト混極細粒砂～中粒砂で、ベース層のシルトブロックを多く含んでいる。水溜め状の遺構と考えているが、埋土の状況から掘削直後に埋め戻された可能性がある。埋土から土師器、須恵器片が出土している。

S 0201

S K 201北側に位置する平面不定形な落ち込みである。東西2.5m以上・南北4.0m以上を測る。埋土は2.5Y5/1黄灰色中粒砂-極粗粒砂混シルト質粘土(ブロック状)である。島畠202上面の耕作痕と考えられる。S E 202を切っている。須恵器片が出土している。



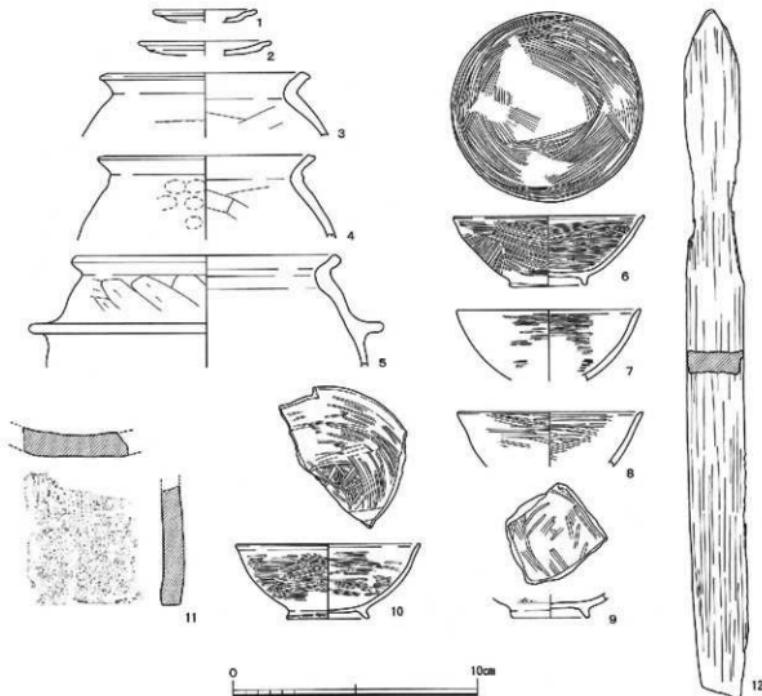
第6図 SE301平面・断面図

## 〈第3面〉

上面の標高はT.P.+7.5~7.7mを測る。2~4区で井戸2基（S E 301・302）、土坑2基（S K 301・302）、溝12条（S D 301~312）を検出した。遺構の時期は古墳時代中期~平安時代に比定される。

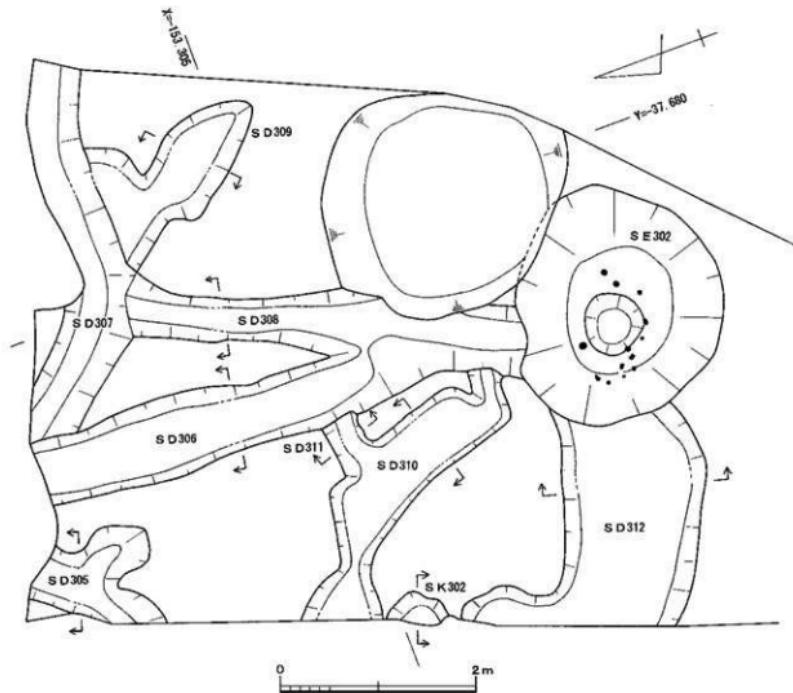
## S E 301

2区で検出した曲物井戸である。掘方は平面円形を呈し、規模は直径約2.2m・深さ約0.6mを測る。断面逆台形を呈する掘方の底中央を約10cm掘り窪めて、直径約35cmの曲物を設置している。曲物は遺存状態が悪く、最下段の底から高さ約20cmを検出したのみである。断面に見られる痕跡からは高さ53cmが確認できるが、段数等は不明である。掘方埋土は4層から成るブロック状の細粒砂～中粒砂混粘土質シルト、曲物内埋土は4層から成る極細粒砂～中粒砂混粘土質シルト～粘土である。遺物は曲物内から土師器、須恵器、平瓦片が、掘方から土師器、須恵器、黒色土器B類、瓦器、平瓦、木製品が出土している。掘方出土の1~12を図化した。土師器皿（1・2）は「て」の字状口縁皿で、1は灰褐色、2は淡灰黄色を呈する。土師器壺（3・4）は外面が全面焼ける。

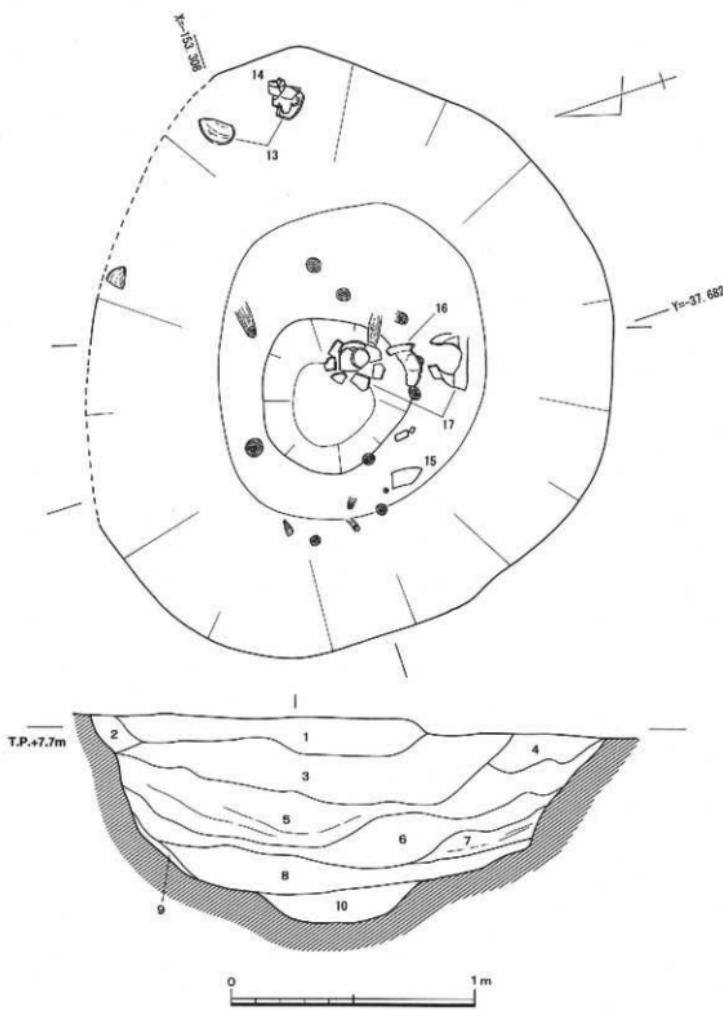


第7図 SE301出土遺物

土師器羽釜(5)は3mmまでの砂粒を多量に含む胎土である。口縁部内外面がやや焼ける。6~9は黒色土器B類楕である。6は完形近くに復元され、口径15.5cm・器高約5.8cm・高台径6.4cm・高台高0.8cmを測る。外面は四分割ヘラミガキ、内面は長い単位の横方向ヘラミガキを密に施す。見込みは不明瞭であるが、乱方向のヘラミガキであろう。口縁端部内面に沈線を有するようであるが、ヘラミガキによりほぼ消滅し内傾する面となっている。7は内外面横方向の細いヘラミガキで、口縁部内面に浅い沈線を有する。8・9は胎土・色調等の特徴から同一個体の可能性がある。復元口径15.2cm・高台径6.4cm・高台高0.8cmを測る。内外面横方向ヘラミガキである。10は瓦器楕で、復元口径15.3cm・器高6.2cm・復元高台径6.8cm・高台高0.7cmを測る。内外面密なヘラミガキであるが、外面の分割状況は不明である。11は平瓦で、凹面横方向ナデ、凸面縦目タタキ後ナデである。12の木製品は形状から卒塔婆の可能性がある。幅約4.7cm・厚さ約1.8cmの板材から成り、残存長57.0cmを測り、下端は欠損している。先端は両側を削って尖らせ、端から約10cm~約22cm間の両側を抉っている。曲物の西側で、先端を下にして底に突き刺し、立った状態で出土した。これら掘方出土の土器類からみて、井戸構築の時期は11世紀後半に比定される。

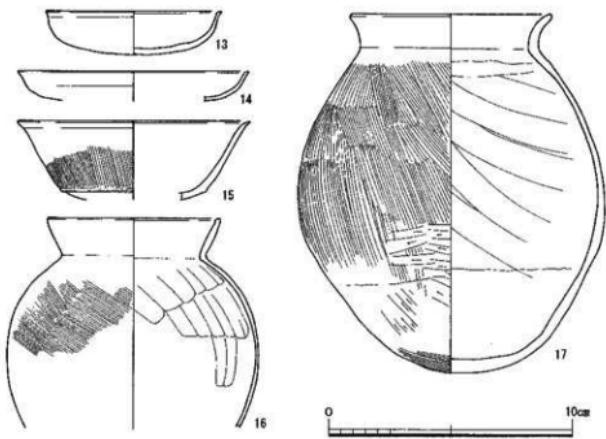


第8図 4区第3面平面図



- |                                     |   |
|-------------------------------------|---|
| 1. 2.5Y5/1 黄灰色中粒砂～粗粒粒砂少混粘土 鉄分 マンガン斑 | 6. 5Y4/1 灰色シルト質粘土 鉄分                          |
| 2. 7.5YR6/1 棕灰色粘土混中粒砂～粗粒砂           | 7. 2.5Y6/2 灰黄色シルト～粘土互層 鉄分                     |
| 3. 10YR5/1 棕灰色中粒砂～中疊混シルト質粘土 鉄分      | 8. 7.5Y4/1 灰色シルト質粘土                           |
| 4. 7.5YR5/1 棕灰色シルト質粘土 鉄分 マンガン斑      | 9. 5Y6/2 灰オリーブ色シルト                            |
| 5. 2.5Y6/2 灰黄色粘土質シルト～シルト 下部ラミナ      | 10. 10BG3/1 細青灰色中粒砂～粗粒粒砂多混粘土質シルト<br>上部粗粒砂～細粒泥 |

第9図 S E 302平面・断面図



第10図 SE302出土遺物

#### S E 302

4区で検出した井戸で、掘方はほぼ平面円形を呈し、規模は直径2.2~2.4m・深さ約0.85mを測る。断面逆台形を呈し埋土は10層から成る。概ね上層：中粒砂～中疊混シルト質粘土、中層：シルト～粘土（一部互層状）、下層：中粒砂～極粗粒砂多混粘土質シルトである。井戸枠は認められないが、底部の中央、直径約1mの範囲に直径5cm程度の杭を打ち巡らせており、この内側に枠が設置されていたのかもしれない。遺物は13~17を図化した。13は土師器杯で、ほぼ完形に復元され、口径14.3cm・器高3.6cmを測る。口縁部に灯芯痕が1箇所認められる。淡褐色を呈し、摩滅のため調整不明である。14は土師器皿で、復元口径19.0cmを測る。明褐色を呈し、摩滅のため調整不明である。15は土師器高杯で、復元口径19.0cmを測る。口縁部外面タテハケ調整である。16は布留式壺の系譜上に位置付けられる土師器壺で、外面ハケ、内面ナデあるいはヘラケズリである。17は土師器壺で、口径16.6cm・器高29.3cm・体部径26.4cmを測る。体部外面タテハケの後、下半にヘラケズリを加える。底部付近出土の15、上層出土の16・17は5世紀末期に比定され、遺構の埋没時期と捉えられよう。東部肩付近から出土した13・14は飛鳥時代に比定されるものであるが、当遺構を切り込む別の遺構に伴う可能性が高い。

#### S K 301

2区で検出した平面不定形な土坑で、規模は65cm以上×45cm以上、深さ約6cmを測る。断面皿状を呈し、埋土は10YR 5/1褐灰色粘土質シルト（鉄分・マンガン斑点）である。時期不明の須恵器片が1点出土している。

#### S K 302

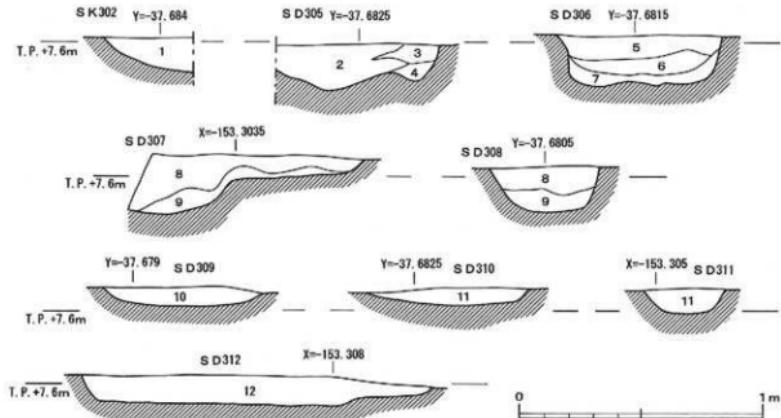
4区で検出した土坑で、西側は削平されており、検出部分の規模は東西0.35m以上・南北0.65m以上を測る。断面椀形を呈し、埋土は2.5Y 6/1黄灰色粘土質シルト（鉄分）である。時期不明の土師器・須恵器片が1点ずつ出土している。

## S D 301~312

3・4区で検出した。3区ではS D 301・302が東西方向、S D 303・304が北東-南西方向に平行している。4区ではS D 305~312が複雑に交錯する状況である。出土遺物は少量であり、S D 301-6世紀前半の須恵器杯身(18)、S D 305・306-土師器・須恵器片、S D 310・312-須恵器片が出土しているのみである。詳細は表1にまとめた。



第11図 SD301出土遺物



1. 2.5Y6/1 黄灰色粘土質シルト 鉄分
2. 10YR5/1 暗灰色シルト ブロック混シルト質粘土 鉄分
3. 2.5Y6/3 にぶい黄色粘土質シルト 鉄分
4. 2.5Y6/2 反覆色シルト質粘土 鉄分
5. 10YR6/1 暗灰色細粒砂泥シルト質粘土 鉄分  
上部マンガン斑
6. 10YR6/2 反覆色粘土 マンガン斑
7. 2.5Y5/1 黄灰色シルト混シルト質粘土 鉄分
8. 10YR5/1 暗灰色シルト質粘土 鉄分 マンガン斑少
9. 2.5Y6/2 暗灰色粘土質シルト
10. 2.5Y6/1 黄灰色粘土質シルト 鉄分
11. 2.5Y6/1 暗灰色シルト質粘土 鉄分
12. 10YR6/1 暗灰色シルト混シルト質粘土

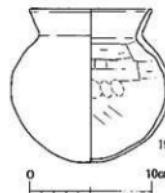
第12図 4区第3面坑・溝断面図

第1表 第3面溝一覧表

連番名	検出長 (m)	幅 (cm)	深さ (cm)	断面 形状	埋土
S D 301	1.05	40	14	逆台形	10YR5/2灰黄褐色細粒砂泥シルト質粘土 (ブロック状、鉄分)
S D 302	2.6	35~73	7	皿状	10YR5/2灰黄褐色シルト (炭、マンガン斑多)
S D 303	3.65	65	15	皿状	2.5Y5/2灰オリーブ色細粒砂泥粘土質シルト (攪拌、マンガン斑多)
S D 304	0.5	33	14	皿状	。
S D 305	1.45	60	19	逆台形	10YR5/1褐灰色シルト ブロック混シルト質粘土 (鉄分) 2.5Y6/3にぶい黄色粘土質シルト (鉄分)
S D 306	4.1	60~85	20	逆台形	10YR6/1褐灰色極粗粒砂少混シルト質粘土 (鉄分、上部マンガン斑) 10YR6/2灰黄褐色粘土 (マンガン斑) 2.5Y6/1褐灰色シルト質粘土 (鉄分)
S D 307	3.95	55	25	逆台形	10YR5/1褐灰色シルト質粘土 (鉄分、マンガン斑少) 2.5Y6/2灰黄色粘土質シルト
S D 308	3.95	42~70	19	逆台形	。
S D 309	2.05	70	8	皿状	2.5Y6/1褐灰色粘土質シルト (鉄分)
S D 310	3.2	68	8	皿状	2.5Y6/1褐灰色シルト質粘土 (鉄分)
S D 311	0.55	36	10	逆台形	。
S D 312	2.15	145	13	逆台形	10YR6/1褐灰色シルト混シルト質粘土

### 〈3区7層出土遺物〉

小型の土師器壺(19)を図化した。約2/3残存で、復元口径10.0cm、器高12.7cmを測る。調整は口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面ヘラケズリである。体部下半外面が煤ける。時期は5世紀代頃が考えられる。水成層である7層出土であるが、あまり摩滅はしていないことから、遠くから運ばれてきたものではない。



第13図 3区7層出土遺物

### 3.まとめ

今回の調査では周辺の調査地と同様、古墳時代中期～近代の遺構・遺物を検出した。出土遺物はコンテナ4箱を数える。

第3面では古墳時代中期～平安時代の井戸・溝等を検出した。後世の耕作による削平が著しいものの遺構の密度は高い。古墳時代中期の井戸S E 302は底に杭を巡らせる特異な例である。平安時代の曲物井戸S E 301は、掘方から終末段階の黒色土器椀と古相の瓦器碗が出土している。黒色土器から瓦器への転換期における共伴例として貴重な資料といえよう。第1・2面は中世以降の耕作面で、水田・島畑・畦畔状遺構を検出した。畦畔状遺構101・201については南の第24次調査においても続いている。明治時代の地籍図に照らし合わせると、浜川村大字「七ツ門」と「野木」の字界である南北道路に相当する。

### 参考文献

- 森 龍 1995 「III-2. 黒色土器」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編  
尾上 実・森島康雄・近江俊秀 1995 「III-6. 瓦器碗」「概説 中世の土器・陶磁器」中世土器研究会編  
京嶋 覚 1993 「第2節 古墳時代後半期の土器の変遷」「長原・瓜破遺跡発掘調査報告V」財団法人大阪市文化財協会  
原田昌則 2001 「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書－大阪竪築都市拠点地区竪築東西線3丁区の掘削工事に伴う  
－ (財)八尾市文化財調査研究会報告69」財団法人八尾市文化財調査研究会

# 図 版



1~3区第1面（北から）



畔畦状造構101・201北壁



1~3区第2面（北から）



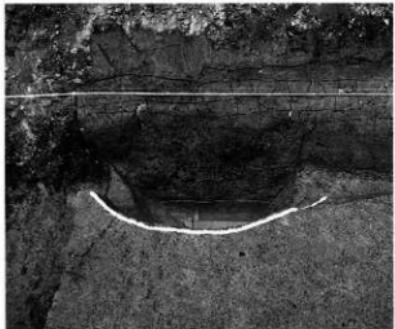
4区第1面（北から）



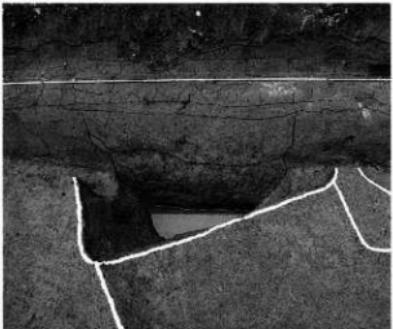
4区第2面（北から）



SK201（西から）



SE201 (南から)



SE202 (南から)



2・3区第3面 (北から)



SE301 (北から)



SE301 (東から)



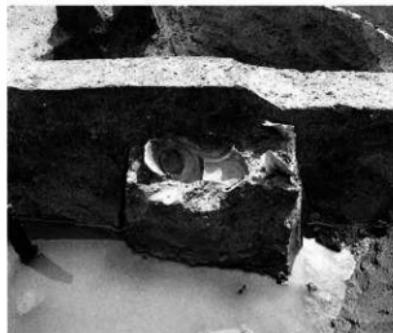
SE301曲物 (東から)



3区第3面（北から）



SE302（西から）



SE302土器出土状況（西から）



SE302（西から）

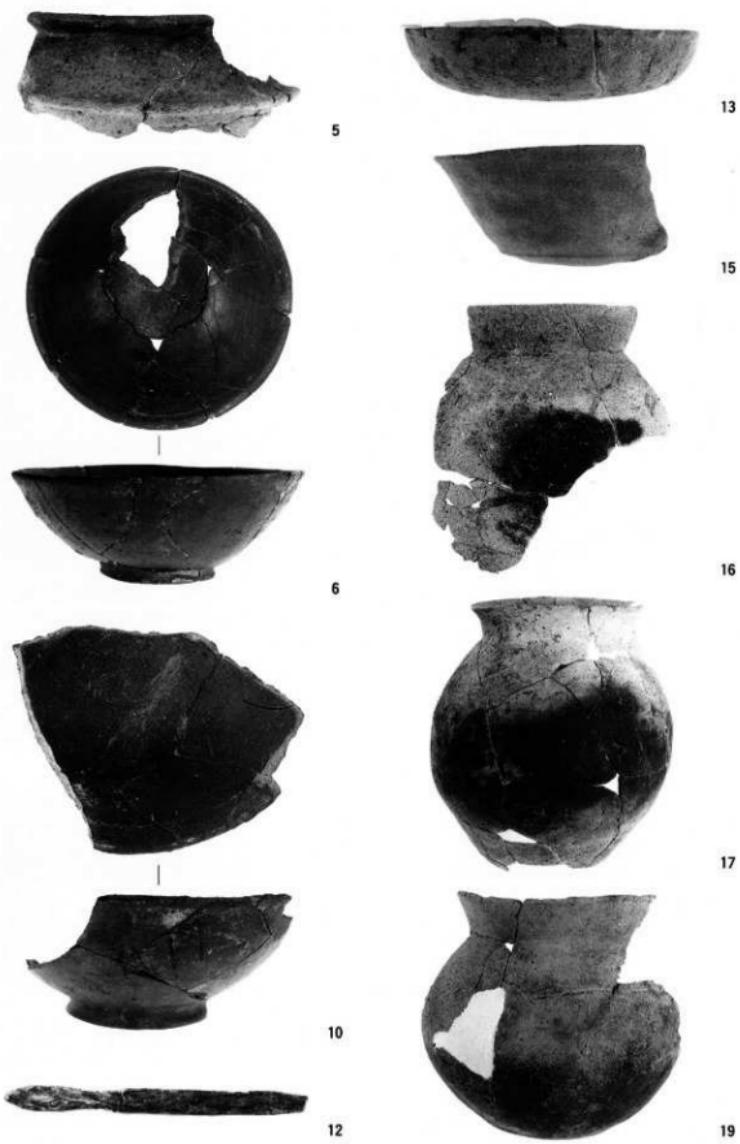


SE302完掘（南から）



SE302底部（西から）

図版  
四



SE301 (5・6・10・12)、SE302 (13・15~17)、7層 (19) 出土遺物

III 久宝寺遺跡第49次調査 (K H 2003-49)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市神武町93-1 及び93-4 の各一部で実施した久宝寺線整備工事に伴う久宝寺遺跡第49次調査（K H 2003-49）の発掘調査報告書である。
1. 本調査は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第77号 平成15年5月30日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 調査は当調査研究会 高萩千秋・坪田真一が担当した。
1. 現地調査は、平成15年6月11日に着手し、同年8月26日に終了した。調査面積は約120m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査には、伊藤静江・垣内洋平・川村一吉・竹田貴子・田島宣子・永井律子・若林久美子の参加を得た。
1. 内業整理には上記の他、山内千恵子が参加した。
1. 本書掲載の写真撮影は坪田・垣内（遺物）が、執筆及び編集は坪田が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	33
2.調査概要.....	34
1) 調査方法.....	34
2) 基本層序.....	34
3) 検出遺構と出土遺物.....	35
3.まとめ.....	43

## 挿図目次

第1図 調査地位置図	33
第2図 土層模式図	35
第3図 第1・2面平面図	37
第4図 第3・4面平面図	38
第5図 第3面遺構平面・断面図	39
第6図 S D210、S K305出土遺物	40
第7図 S D301断面図	41
第8図 S D301出土遺物	41
第9図 S D302、S P302出土遺物	42
第10図 S D401断面図	42
第11図 8層出土遺物	43

## 表目次

第1表 第2面溝一覧表	36
-------------	----

## 図版目次

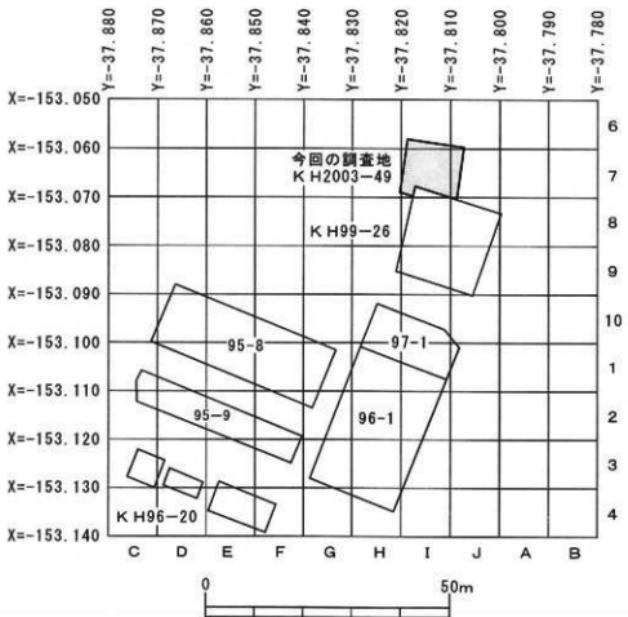
図版一 第1面、第2面、第3面、S D301、S D301北壁、調査風景	
図版二 S D401、S D401北壁、北壁8層、北壁10~14層、北壁10~21層、北壁21~24層	
図版三 S D210、S K305、S D301、S P302出土遺物	

### III 久宝寺遺跡第49次調査 (K H 2003-49)

#### 1. はじめに

久宝寺遺跡は、古大和川の主流であった古長瀬川左岸の低位沖積地にあたる縄文時代晩期～近世の複合遺跡である。今回の調査地南側に広がる竜華操車場跡地内においては、昭和63年以降、(財)大阪府文化財調査研究センター(現、財團法人大阪府文化財センター。以下センター)、八尾市教育委員会、当調査研究会によって継続的に調査が実施されている。近辺では当研究会による第20次調査(K H 96-20)・第39次調査(K H 2001-39)・第43次調査(K H 2002-43)、センターによる95-8・9、96-1、97-1、98-1・2トレンチ、多目的広場調査地等がある。なかでも95-8・9、96-1、97-1トレンチ、第39・43次調査地での古墳時代中期の大規模な埴輪の検出、98-2トレンチの古墳時代後期の横穴式石室を有する古墳の検出等が特筆される。

今回の調査地は平成11～12年度に実施した第26次調査地(K H 99-26)の北側に隣接している。この調査では古墳時代後期～近代の遺構・遺物が検出されている他、縄文時代後期～古墳時代中期では水田の可能性がある地層や、3度にわたる地震の痕跡が確認されている。



第1図 調査地位置図

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法

掘削にあたってはまず現地表面(約T.P.+8.7m)から約0.7mを機械により掘削した。そしてT.P.+7.7mまでを人力掘削により調査を実施した(上部調査)。以下、T.P.+5.4mまでの機械掘削を立会調査した後、T.P.+5.0mまでを人力掘削により調査を実施した(下部調査)。さらに以下のT.P.+2.2mまでについては、工事に伴う機械掘削に並行して塙(北壁東部)を残しながら地層を確認した。

なお調査地西部にあたる現況道路下部分については、覆工板設置のため早急な上部調査が必要であった。そして先行させた東側の調査状況からみてこの部分は近世~近代の水田城にあたることが予想されたため、当該地の上部調査については機械掘削の立会調査とした。

地区割については平成9年度に当調査研究会が設定したものを使用した(本巻IのP3参照)。これによると今回の調査地は、中区画のⅧ-2区に包括される。

遺構名は面ごとに北から通し番号を付け、遺構略号+面+二桁番号とした。

### 2) 基本層序

0層：盛土層。

1層：7.5Y4/1灰色細粒砂～中疊泥粘土質シルト。グライ化。旧耕土。

2層：2.5Y5/2暗灰黄色極細粒砂～細疊多泥シルト。グライ化。鉄分。水田101作土。

3層：10YR6/1褐灰色中粒砂～極粗粒砂少泥粘土質シルト。マンガン多。土壤化層。島畠101  
盛土。上面が第1面。

4層：2.5Y6/2灰黄色細粒砂～粗粒砂泥粘土質シルト。鉄分多。マンガン。上面が第2面。

5層：S D 301

6層：10YR6/1褐灰色細粒砂泥シルト質粘土。鉄分。汚れた土壤化層。上面が第3面。

7層：10YR5/1褐灰色極細粒砂泥シルト～シルト質粘土の瓦層。鉄分。マンガン。

8層：10YR5/1褐灰色～10YR5/3にぶい黄褐色シルト泥細粒砂～中疊の瓦層。鉄分。層厚約2.0  
mを測る河川堆積層で、北西部で最も高く検出される。古墳時代前期布留式期までの土  
器が出土している。

9層：S D 401

10層：2.5GY3/1暗オリーブ灰色粘土。細かい植物遺体をラミナ状に多く含む。西部炭酸鉄含  
む。上面が第4面。当層以下から遺物の出土は無かった。

11層：7.5GY3/1暗緑灰色粘土。細かい植物遺体を多く含む。流木。ラミナ不明瞭。下面から管  
状に下位の12～14層に入り込む状況が見られ、地震の痕跡と捉えられている。

12層：N3/0暗灰色粘土。13・14層やシルトを粒状・ブロック状に含み、全体に攪拌される。北  
塙東部・東壁北部で確認された。

13層：5GY2/1オリーブ黒色粘土。暗色帶。14層を粒状・ブロック状に多く含み、全体にブ  
ロック状を呈する。炭酸鉄。南に下がる堆積で、第26次調査ではT.P.+4.7m付近で検出  
されている。

14層：10GY5/1緑灰色粘土。上面では13層が管状に入り込む。下面から管状に下位の15・16層  
に入り込む状況が見られ、地震の痕跡と捉えられている。

15層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土。16層をブロック状に多く含む。

16層：5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト～粘土の互層。自然堆積層であるが、下面は起伏があり暗色帶の可能性もある。細かいラミナ。細かい植物遺体を含む。

17層：5Y4/1灰色粘土質シルト～粘土の互層。下部シルト含む。炭酸鉄多。植物遺体多。上面は起伏が著しく、踏み込みと考えられ、ここに16層が入る（一部ブロック状）。

18層：2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルト～粘土の互層。植物遺体。立根痕。19層を粒状に多く含む。上面にやや起伏がある。

19層：10Y2/1黒色極細粒砂混粘土。暗色帶。植物遺体を含む。

18・19層の暗色帶については、第26次調査のT.P.+3.2～3.8mで確認されている3層の暗色帶のいずれかに該当する。当地では極細粒砂混粘土であるが、この3層は粘土～シルト層であり層相が異なる。

20層：7.5Y2/1黒色極細粒砂～細粒砂多混シルト質粘土。暗色帶。

21層：10Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土混極細粒砂～細粒砂。

22層：5Y6/2灰オリーブ色極細粒砂～中粒砂互層。

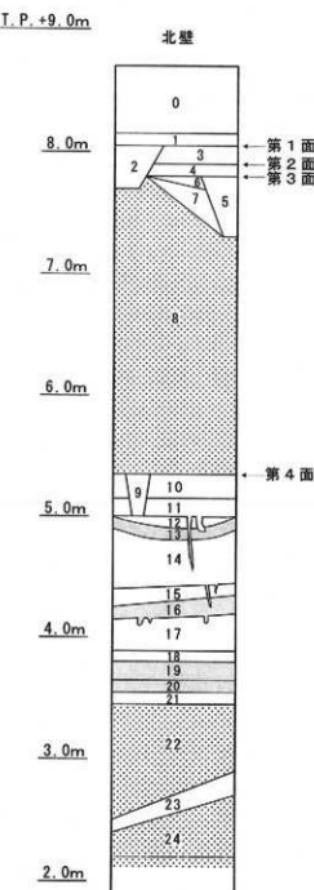
23層：7.5Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土と22層の互層。植物遺体少量。

24層：N6/0灰色極細粒砂～細粒砂の互層。鉄分含む。

22～24層は層厚1.4m以上を測る一連の河川堆積層である。やや西に下がるラミナが認められる。第26次調査のT.P.+2.9m前後で南肩が検出されており、東西方向の河川と考えられている。

### 3) 検出遺構と出土遺物

調査では、盛土部分及び旧耕土・床土を機械掘削により除去し、以下第4面までの調査を実施した。第1面では近世～近代、第2面では中世～近世頃の島畑・水田・溝といった生産関連の遺構を検出した。第3面は古墳時代後期～奈良時代頃の遺構面と考えられ、溝・土坑・ピットを検出した。第4面では弥生時代後期頃の溝を検出した。



第2図 土層模式図

### 〈第1面〉

上面の標高は約T.P.+8.0mを測る。検出遺構は水田1筆（水田101）、島畠1基（島畠101）、溝1条（S D 101）である。

#### 水田101

調査地西半部を占める水田で、東は島畠101で区画される。規模は南北7.2m以上、東西4.7m以上を測る。作土下面では南北方向の溝状を成す耕作痕が見られる。作土は2層から成り、ベースとなる8層の砂粒・礫を多く含んでいる。作土から時期不明の土師器・須恵器片が出土しているが、図化しえるものは無かった。

#### 島畠101

水田101の東に位置する島畠で、規模は南北7.4m以上、東西5.6m以上を測る。盛土は10YR6/1褐色中粒砂～極粗粒砂少混粘土質シルトで非常に固く締まる。盛土には古墳時代中期以降の土師器・須恵器の細片が多く含まれる。

#### S D 101

島畠101上面で検出した東西方向の溝である。規模は検出長6.4m・幅0.25～0.4m・深さ約20cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は10YR6/1褐色中粒砂～細礫混シルトと旧耕土（2層）が攪拌された状況である。水田101作土を切っており、時期的にはごく近代に近いものといえよう。遺物は出土していない。

### 〈第2面〉

島畠101盛土を除去した段階で検出した面で、上面の標高は約T.P.+7.9mを測る。溝15条（S D 201～215）を検出した。

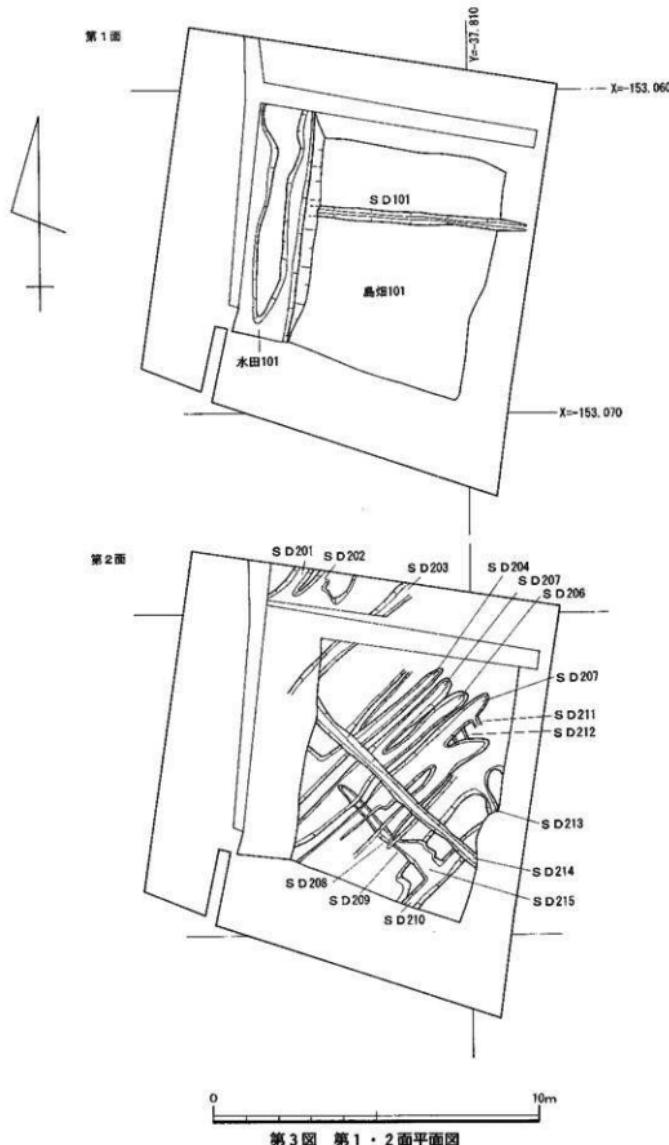
#### S D 201～215

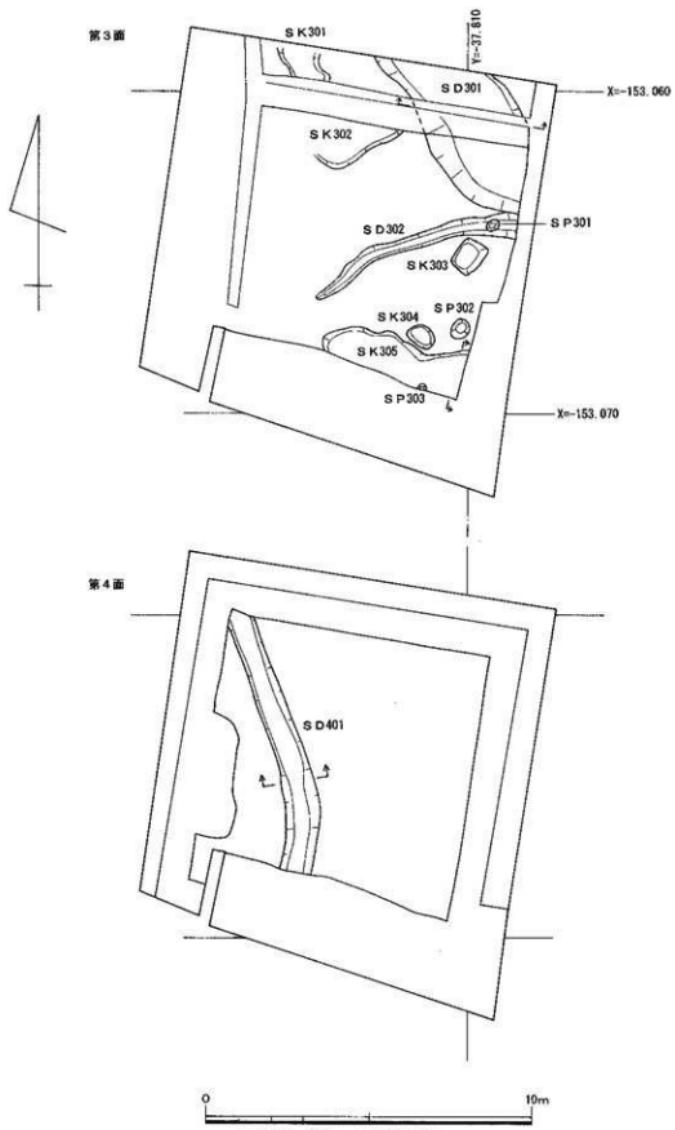
北東～南西方向の溝10条（S D 201～210）と、これに直交する北西～南東方向の溝5条（S D 211～215）がある。耕作に伴う溝群と考えられる。埋土中には土師器・須恵器細片が多く含まれている。S D 210からの須恵器杯蓋2点（1・2）を図化した。1は天井部外面に灰が被る。2は全体に器壁が厚く、口縁端部が短く内傾する特異な形状を呈する。2点は6世紀後半に比定されるものであるが、おそらく下位の第3面SK 305からの混入品と考えられる。

第1表 第2面溝一覧表

遺構名	検出長 (m)	幅 (m)	深さ (cm)	埋土	出土遺物
S D 201	0.9	0.5	5	2.5Y 5 / 1 黄灰色細粒砂～細礫混粘土質シルト。	土師器・須恵器
S D 202	0.6	0.5	5	＊	土師器・須恵器
S D 203	5.0	0.5	10	10YR 6 / 2 黃褐色シルト質粘土混細粒砂	
S D 204	6.1	0.3～0.5	15	2.5Y 6 / 2 黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	土師器・須恵器
S D 205	6.4	0.3～0.4	12	＊	土師器・須恵器
S D 206	7.1	0.3～0.5	20	＊	土師器
S D 207	7.9	0.4～0.7	17	＊	土師器・須恵器
S D 208	5.5	0.4～0.7	12	＊	土師器・須恵器
S D 209	3.4	0.75	18	＊	土師器・須恵器
S D 210	3.5	0.5	10	＊	土師器・須恵器
S D 211	0.3	0.2	3	10YR 5 / 2 黄褐色細粒砂少混シルト質粘土	土師器・須恵器
S D 212	0.4	0.45	5	＊	
S D 213	1.2	0.3	6	＊	
S D 214	7.2	0.25～0.45	15	10YR 6 / 2 黄褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	土師器・須恵器
S D 215	3.9	0.3～0.7	6	2.5Y 6 / 2 黄褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト	

III 久宝寺遺跡第49次調査 (K H 2003-49)





## 〈第3面〉

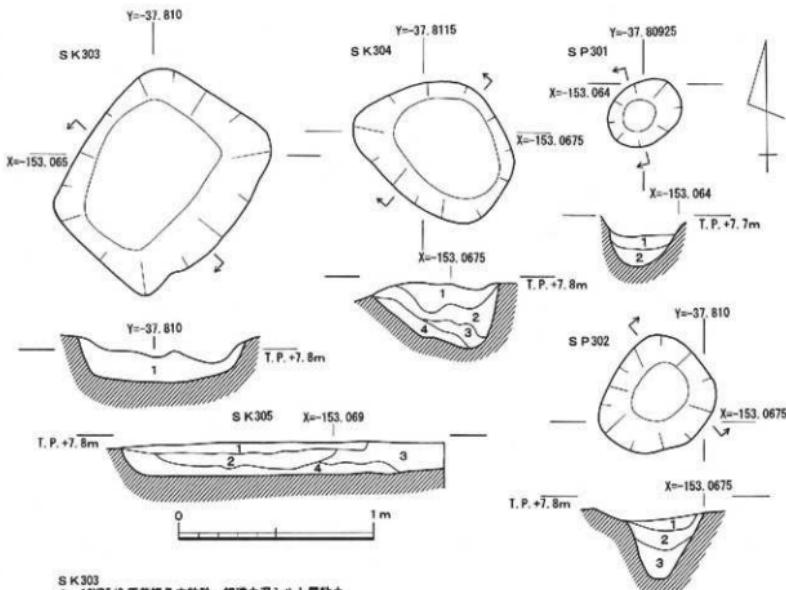
約T.P.+7.8mを測る6層上面で、土坑5基（SK 301～305）、溝2条（SD 301・302）、ピット3個（SP 301～303）を検出した。出土遺物からみて古墳時代後期～奈良時代の遺構面である。

## SK 301

北部で検出した平面不定形を呈する土坑で、検出部分で東西約1.3m・南北約0.8m・深さ32cmを測る。埋土は上から10YR5/1褐色細粒砂混シルト質粘土、2.5Y5/2暗灰黄色シルト混細粒砂～中粒砂、2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂混粘土質シルト、10YR6/1褐色細粒砂多混粘土質シルトである。全体に鉄分を含み、上部は炭を含むブロック状を呈する汚れた層相である。時期不明の土師器片が少量出土している。

## SK 302

SK 301南東部で検出した土坑で、規模は2.5m以上×1.0m以上、深さ13cmを測る。埋土は



## SK 303

1. 10YR5/2 暗黄褐色中粒砂～粗粒少混シルト質粘土  
薄れる マンガン斑 鉄分

SK 304

1. 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土  
炭 マンガン斑

2. 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂～中粒砂多混シルト 黒

3. 10YR5/1 暗灰褐色シルト質粘土混細粒砂～細粒砂 黒

4. 10YR6/1 暗灰褐色シルト混細粒砂～細粒砂

## SK 305

1. 2.5Y5/2 暗灰褐色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト

鉄少 マンガン斑 鉄分少

2. 2.5Y4/1 黄灰色細粒砂混粘土質シルト 黑多 烟少

3. 10YR5/2 暗黄褐色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト

マンガン斑

4. 2.5Y6/2 黄灰色細粒砂少混シルト質粘土

## SP 301

1. 2.5Y5/1 黄灰色粘土質シルト  
ブロック状 鉄分 マンガン斑少

2. 2.5Y6/1 黄灰色粘土質シルト  
ブロック状 鉄分 マンガン斑

## SP 302

1. 2.5Y5/1 黄灰色粗粒砂～細粒砂混シルト質粘土

黒少 鉄分 マンガン斑

2. 2.5Y6/2 暗黄褐色粗粒砂少混シルト質粘土

ブロック状 マンガン斑

3. 2.5Y6/1 黄灰色粗粒砂少混シルト質粘土 ブロック状

第5図 第3面遺構平面・断面図

10YR6/3にぶい黄橙色細粒砂～中粒砂極多混シルトで、鉄分・マンガン斑を含みブロック状を呈する。遺物は出土していない。

#### S K 303

S D 302南側で検出した平面方形の土坑で、規模は1.0m×0.85mを測る。断面逆台形を呈し、深さ24cmを測る。埋土は10YR5/2灰黄褐色中粒砂～細疊少混シルト質粘土で、鉄分・マンガン斑を含みブロック状を呈する汚れた層相である。奈良時代頃の土師器羽釜片が1点出土している。

#### S K 304

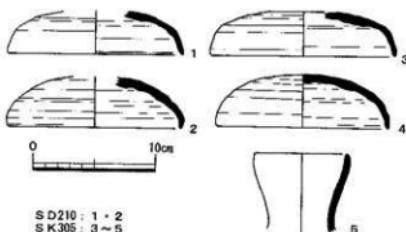
S K 305北側で検出した土坑で、平面形は梢円形氣味で、規模は0.85m×0.65mを測る。断面逆台形を呈し、深さ34cmを測る。埋土は上から2.5Y4/1黄灰色細粒砂～中粒砂混シルト質粘土、2.5Y4/1黄灰色極細粒砂～中粒砂多混シルト、10YR5/1褐灰色シルト質粘土混極細粒砂～細粒砂、10YR6/1褐灰色シルト混極細粒砂～細粒砂で、全体に炭を含み、上部にはマンガン斑が見られる。飛鳥時代頃の土師器杯身片の他、時期不明の土師器片が出土している。

#### S K 305

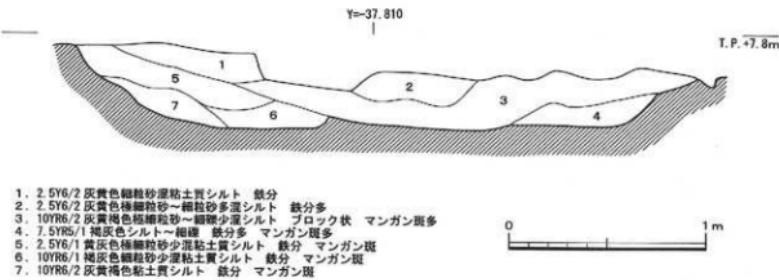
調査区南東部で検出した土坑で、規模は4.4m以上×1.1m、深さ約18cmを測る。埋土は上から2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～粗粒砂混粘土質シルト、2.5Y4/1黄灰色極細粒砂混粘土質シルト、10YR5/2灰黄褐色細粒砂～粗粒砂多混粘土質シルト、2.5Y6/2灰黄色極細粒砂少混シルト質粘土である。全体に炭・焼土を含んでいる。古墳時代後期頃の土師器・須恵器が多く出土している。3～5を図化した。3・4は須恵器杯蓋である。3は天井部に灰が被る。4は完形近くに復元され、口径14.3cm・器高4.4cmを測る。やや焼成不良で灰白色を呈し、胎土中に3mmまでの砂粒を含んでいる。5は提瓶・平瓶といった瓶類の口縁部であろう。外面に灰が被る。

#### S D 301

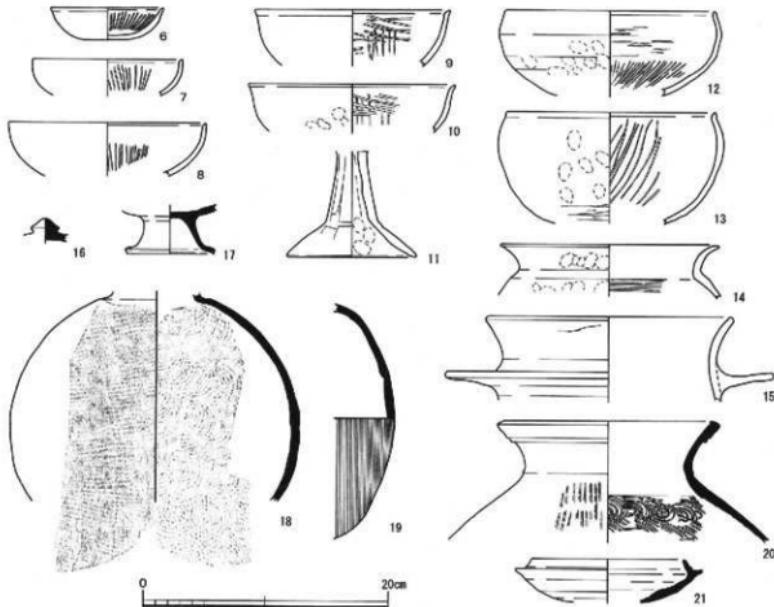
調査区北東部で検出した北西～南東方向の溝で、規模は検出長6.6m・幅約3.0m・深さ約0.5mを測る。断面逆台形を呈し、埋土は11層から成り、おおまかにみて上層が10YR6/2灰黄褐色極細粒砂～中疊混シルト～粘土質シルト、下層が2.5Y6/2灰黄色極細粒砂～細粒砂混シルトである。全体に鉄分・マンガン斑を含み、上層はブロック状を呈し炭を多く含んでいる。奈良時代頃までの土師器・須恵器が多く出土しており、6～21を図化した。6～10は土師器杯で、6が1/3程度残存する他は小片である。いずれも内面に放射状ヘラミガキを施し、9・10は横方向にも施す。法量から6は飛鳥杯CⅢ、7は杯CⅡ、8～10は杯CⅠにあたり、飛鳥Ⅱ期で成立する3種が認められる。11は土師器高杯で、脚柱部外面は幅広に面取りしている。12・13は土師器鉢である。いずれも内面には放射状ヘラミガキを施し、12は上位が横方向のヘラミガキである。13は底部外面ヘラケズリである。14は土師器壺、15は羽釜である。15は鋸下、口縁部内面がやや煤ける。16は須恵器杯蓋の宝珠つまみ部分である。焼成不良で淡灰色を呈し、断面は土師器風である。17は須恵器高杯で、脚底径7.4cm・脚高3.1cmを測る。18は須恵器横瓶である。胴部分の破片で、復元短径



第6図 SD210、SK305出土遺物



第7図 SD 301断面図



第8図 SD 301出土遺物

23.7cmを測る。長辺は30cm程度であろう。外面は横方向平行タタキ後回転カキ目、内面は同心円タタキである。19は須恵器提瓶体部である。外面は回転カキ目、閉塞孔は直径約7cmを測る。20は須恵器壺である。復元口径18.0cmを測り、調整は外面縱方向の平行タタキ、内面同心円タタキである。口縁部一肩部外面に灰が被り、一部自然釉が掛かる。これらの土器の時期は飛鳥時代に位置付けられる。他に6世紀後半の須恵器杯身(21)が出土している。

### S D 302

東西方向のやや弧状を成す溝で、東壁断面の観察では S D 301 を切っている。規模は検出長6.7m・幅0.3~0.7m・深さ27cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂少混粘土質シルトで、鉄分・マンガン斑を含み、ブロック状を呈し炭を含んでいる。遺物は奈良時代頃までの土師器、須恵器が出土している。土師器高杯(22)を図化した。杯部が円盤状を呈するもので、復元口径26.0cmを測る。外面横方向、内面放射状のヘラミガキを施す。

### S P 301

S D 302底部で検出した。平面梢円形を呈し、規模は40×30cm・深さ19cmを測る。断面楕円形を呈し、埋土は上層が2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト、下層が2.5Y6/1黄灰色粘土質シルトで、全体に鉄分・マンガン斑を含み、ブロック状を呈する。遺物は出土していない。

### S P 302

平面梢円形を呈し、規模は60×50cm・深さ34cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上から2.5Y5/1黄灰色極細粒砂～細粒砂少混粘土質シルト、2.5Y6/2灰黄色極細粒砂少混粘土質シルト、2.5Y6/1黄灰色極細粒砂少混粘土質シルトで、ブロック状を呈し、上部に鉄分・マンガン斑を含む。古墳時代後期の須恵器杯身1点(23)の他、時期不明の土師器片が少量出土している。23は約1/2残存で、底部外面に灰が被る。

### S P 303

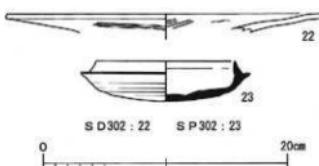
S K 305底部で検出した。平面形は不明で、規模は25×18cm以上・深さ6cmを測る。埋土は10YR5/1褐色極細粒砂～細粒砂多混粘土質シルトで、鉄分を多く含む。遺物は出土していない。

### <第4面>

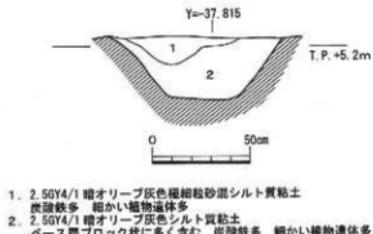
T.P.+5.3~5.4mの10層上面で溝1条(S D 401)を検出した。

### S D 401

北西～南東方向の溝で、南部で南に弧状に屈曲する。規模は検出長約8.5m・幅0.8~1.05m・深さ約34cmを測る。断面逆台形を呈し、埋土は上層が2.5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂少混粘土質シルト、下層が2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト質粘土(下部にベース層のブロック多)で、両層共に炭酸鉄・細かい植物遺体を多く含んでいる。遺物は南部から、一個体と思われる弥生時代後期頃の壺体部片が少量出土している。



第9図 SD302、SP302出土遺物

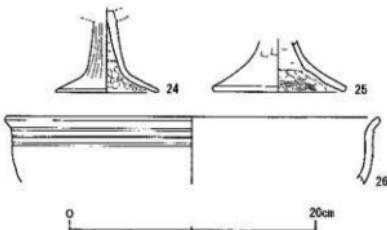


1. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色極細粒砂少混粘土質シルト  
炭酸鉄多 細かい植物遺体多
2. 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト質粘土  
ベース層 ブロック片に多く含む 炭酸鉄多 細かい植物遺体多

第10図 SD401断面図

## &lt;8層出土遺物&gt;

3点(24~26)を図化した。24・25は土師器高杯脚部である。脚柱部外面をかるく面取りし、内面は横方向のヘラケズリである。裾部内面は指頭圧痕が顕著に認められ、25はハケを施す。5世紀代のものであろう。26は弥生時代前期に比定される鉢である。口縁部下位に3条のヘラ描き直線文を施す。胎土中に1mm程度の砂粒を極多量に含む。



第11図 8層出土遺物

## 3.まとめ

今回の調査では弥生時代後期～近代の遺構・遺物を検出し、またそれ以前の地層の確認を実施した。出土遺物はコンテナ3箱を数える。

第4面では弥生時代後期頃の溝が検出された。この上には厚い洪水砂層(8層)が堆積しているが、古墳時代後期には当地は安定した土地となったようで、第3面では古墳時代後期～奈良時代の集落遺構が検出される。そしてその後中世～近世の当地は生産域となっている。これらの様相は南側一帯の調査地と同様の状況である。

下層確認調査では、11層と14層の下面において、第26次調査地で確認された「地震動により下位層上面にひび割れが生じ、そこに上層が入り込む」という現象が断面で観察された。T.P.+3.4m以下で検出された層厚1.4m以上を測る河川堆積層(22～24層)は、第26次調査では東西方向の河川と考えられており、縄文時代後期～晩期の時期が与えられている。

## 参考文献

- 京嶋 覚 1993「第2節 古墳時代後半期の土器の変遷」『長原・瓜破遺跡発掘調査報告V』財團法人大阪市文化財協会  
 古代の土器研究会編 1992「古代の土器I 都城の土器集成」  
 古代の土器研究会編 1993「古代の土器II 都城の土器集成」  
 田辺昭： 1981「須恵器大成」角川書店  
 岡田清一・榎本薰・水谷陸彦 2002「久宝寺遺跡－八尾市神武町93-1の道路状遺構築造工事に伴う久宝寺遺跡第26次発掘調査報告－」(財)八尾市文化財調査研究会報告70』財團法人八尾市文化財調査研究会



# 図 版



第1面（西から）



第2面（西から）



第3面（西から）



SD301（北東から）



SD301北壁（南西から）



調査風景（北から）



SD401（北から）



SD401北壁



北壁8層（T.P.+7.0~6.0m）



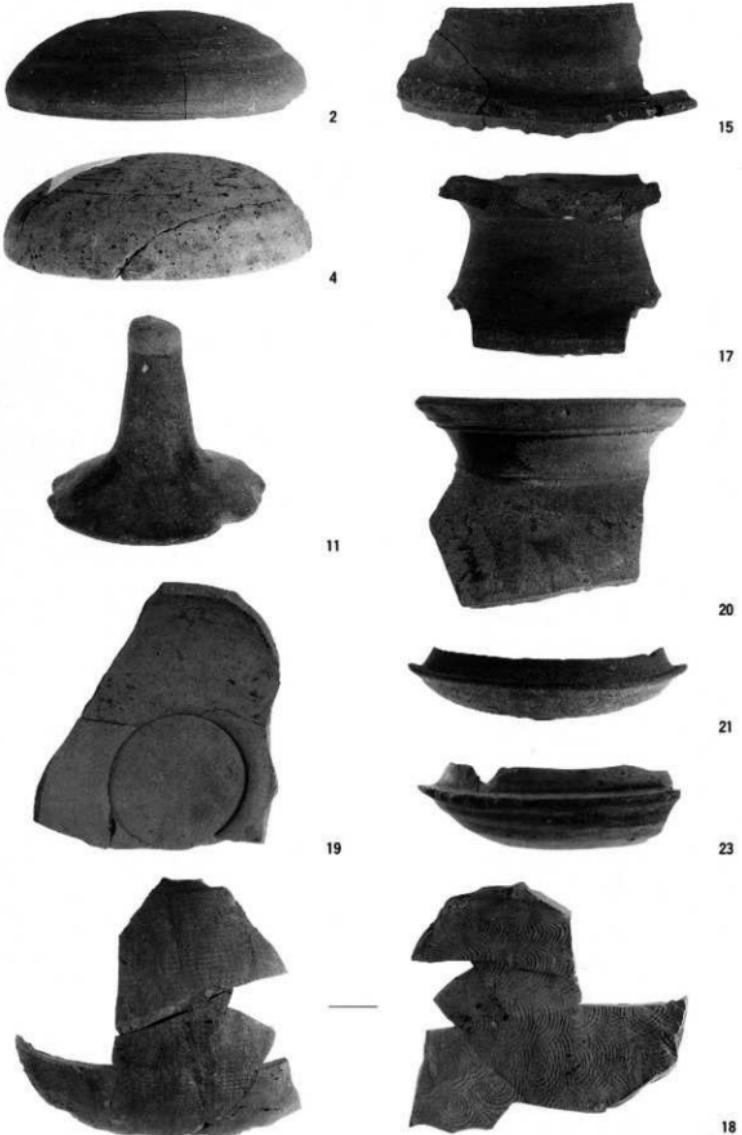
北壁10~14層（T.P.+5.3~4.5m）



北壁10~21層（T.P.+5.4~3.4m）



北壁21~24層（T.P.+3.5~2.2m）



SD210 (2)、SK305 (4)、SD301 (11・15・17~21)、SP302 (23) 出土遺物

IV 久宝寺遺跡第53次調査 (K H 2003-53)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大字亀井、跡部北の町2・3丁目で行った、竜華東西線電線共同溝敷設工事（3工区）に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第53次（K H2003-53）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第197号 平成15年9月16日付）に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成15年10月3日～9日（実働5日間）に成海佳子を担当者として実施した。
1. 調査面積は25m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査に参加した調査補助員は、岩沢玲子・田島宣子・竹田貴子・吉川一榮・若林久美子である。
1. 本書作成にあたっては、トレースー村井俊子、本文執筆・全体の構成は成海がおこなった。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	45
2.調査概要.....	46
1) 調査の方法と経過.....	46
2) 検出遺構と出土遺物.....	46
3.まとめ.....	48

## 挿図目次

第1図 調査地位置図	45
第2図 1～3区設定図	46
第3図 1～3区断面図	46
第4図 4・5区設定図	47
第5図 4・5区壁面図	47

## 図版目次

図版一 1区東・北壁、2区上層、2区完掘、3区完掘、4区完掘、5区上層、5区下層人力掘削状況

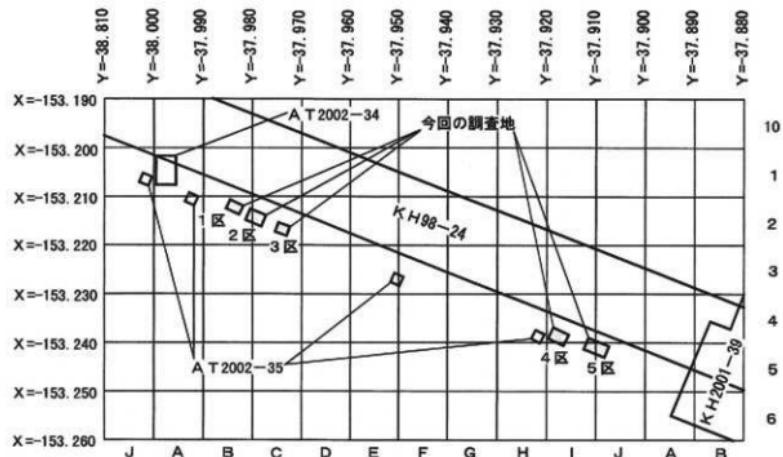
## IV 久宝寺遺跡第53次調査 (K H 2003-53)

### 1. はじめに

久宝寺遺跡は八尾市西部中央に位置し、市域を越え、北は東大阪市、西は大阪市に広がっており、東西・南北1.7km四方の広範囲に及んでいる。八尾市域内の現在の行政区画では、北久宝寺1～3丁目・久宝寺1～6丁目・西久宝寺・南久宝寺1～3丁目・神武町・渋川町1～7丁目・龍華町・北亀井町1～3丁目がその範囲である。南東端に渋川廃寺・北東に久宝寺寺内町を擁しており、南は跡部遺跡・亀井遺跡、西は亀井北(加美南)遺跡・加美遺跡、北東は佐堂遺跡と接し、東には長瀬川の旧流路をはさんで竜華寺跡・成法寺遺跡・八尾寺内町・宮町遺跡が南から北へと連なって位置している。

当遺跡内南部の旧国鉄竜華操車場跡地（以下操車場跡地と呼ぶ）では、昭和61（1986）年の国鉄解散に伴い、再開発が進められることとなり、昭和63（1988）年以降、開発工事に伴う発掘調査が行われるようになっている。

今回の調査は久宝寺遺跡第53次調査（略号K H 2003-53）で、大阪府八尾市大字亀井、跡部北の町2・3丁目で行った竜華東西線電線共同溝敷設工事（3工区）に伴うものである。操車場跡地南部を東西に貫く新設道路「竜華東西線」の南側に沿った5か所について調査を行った。東隣には同工事（2工区）に伴う久宝寺遺跡第45次調査地（⑯）・第39次調査地（⑰）があり、北側の操車場跡地内には当調査研究会の久宝寺第24次調査地（⑥）・（財）大阪府文化財センターの98-1・2調査地（⑦）が位置しており、南側道路には跡部遺跡34次調査地（⑮）・第35次調査地（⑯）が位置している（I-第1図参照）。



第1図 調査地位置図 (S=1/1000)

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

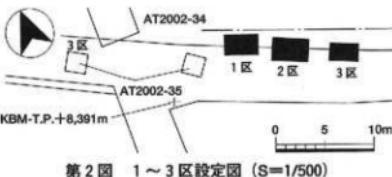
工事範囲は操車場跡地の南に沿った道路の久宝寺駅前から西へ約100m分である。このうち、ケーブルのジョイント部分や点検部分となる「電気樹・管理者樹」埋設部分の6か所が調査対象となったが、東端の工区については久宝寺遺跡第39次調査地-4区に重なることが明らかとなつたため、これを除いた5か所について調査を行つた。

調査区の名称は、西から1～5区と呼んだ。5か所の調査区は、調査対象地の西部に1～3区、東部に4・5区がまとまって位置しており、調査結果も西部と東部では若干の違いがあつたため、西部の1～3区と東部の4・5区を分けて報告する。

### 2) 検出構造と出土遺物

#### ① 1～3区の概要

久宝寺遺跡第24次調査地-2区の南西に位置する。北西側には跡部遺跡第34次調査地-35次調査地-4区がある。各調査区の規模は、1・3区が東西2.6m・南北1.8m・深さ1.7m、2区が東西3.1m・南北1.9m・深さ2.1mである。



第2図 1～3区設定図 (S=1/500)

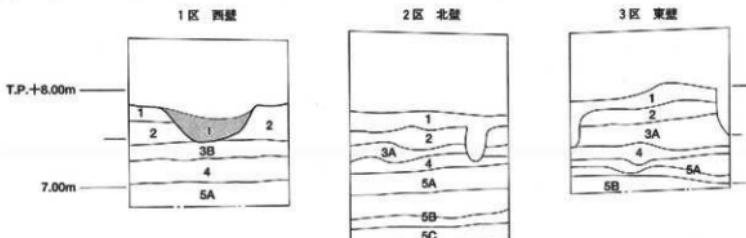
#### ・層序

現地表面の標高はT.P.+8.5～8.6mで、南が高い。現地表以下0.5～0.7mまで攪乱・盛土が及んでいた。

第1層：5BG5/1青灰色礫混砂質シルトは層厚0.1～0.2m、上面はT.P.+7.8～8.0mを測る。水田作土である。

第2層：2.5Y7/6明黄褐色礫混砂質シルト～極細粒砂は層厚0.1～0.3m、作土または鳥糞盛土と考えられる。

第3層：2・3区の作土2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y6/6明黄褐色砂質シルトの細かい



- 1 5BG5/1青灰色礫混砂質シルト
- 2 2.5Y7/6明黄褐色礫混砂質シルト～極細粒砂
- 3 A2.5Y5/4明黄褐色粘土質シルトと2.5Y6/2暗灰黄色極細粒砂の薄い互層  
B2.5Y5/42暗灰黄色粘土質シルトと2.5Y6/6明黄褐色砂質シルトの細かいブロック
- 4 2.5Y5/4明黄褐色礫混粘土質シルトにN7/0灰白色粗粒砂・植物遺体少量含む
- 5A 2.5Y6/6明黄褐色シルト～オリーブ色粘土質シルト～極細粒砂の互層
- B N6/0灰白色粘土質シルト～極細粒砂～織の互層
- C N4/0灰白色粘土質シルトにN7/0灰白色粗粒砂少量含む
- ① 2.5Y4/4オリーブ褐色～2.5Y8/6黄色粘土質シルト～粗粒砂の互層

第3図 1～3区壁面図 (S=1/50)

ブロックが基本層であろうが、1区には水成層であるB層2.5Y5/4黄褐色粘土質シルトと2.5Y6/2灰黄色極細粒砂のラミナが堆積する。

第4層：2.5Y5/4黄褐色疊混粘土質シルトにN7/0灰白色粗粒砂・植物遺体を含む。西の1区ではやや軟弱な土質であるが、2・3区では硬くしまり、床土の可能性がある。

第5層：静水堆積層である。上層からA層2.5Y6/8明黄褐色～5Y5/3灰オリーブ色粘土質シルト～極細粒砂の互層、B層N6/0灰色粘土質シルト～極細粒砂～礫の互層、C層N4/0灰色粘土質シルトが堆積する。上面はT.P.+7.0～7.3mで、東が高い。2区では深さ1.2mまで確認した。

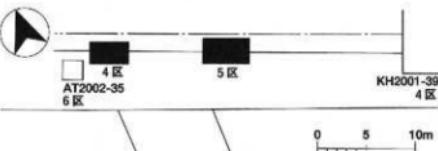
#### ・造構と遺物

1区では、盛土直下で東西に伸びる溝状造構を検出した。これは、久宝寺遺跡45次調査で検出した溝と同一のもので、現道と操車場跡地の境界溝と考えられる。構築面は不明であるが、操車場構築時のものであろう。幅約1m・深さ0.3m以上を測る。内部には、2.5Y4/4オリーブ褐色～2.5Y8/8黄色粘土質シルト～粗粒砂のラミナが堆積している。

遺物は、作土である2・3層から土師器・瓦器等の極小破片が極少量出土した。

#### 〈4・5区の概要〉

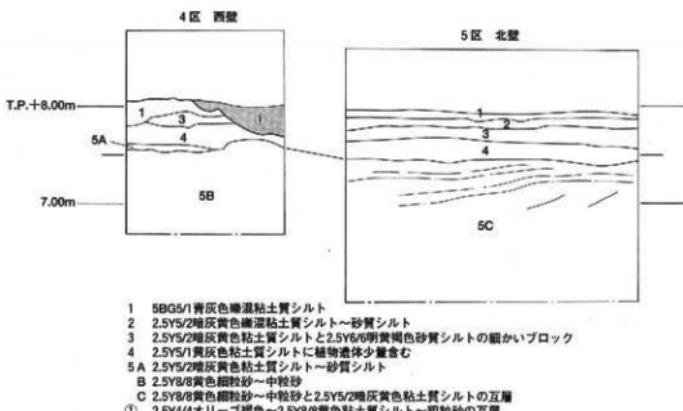
久宝寺遺跡第24次調査地-3・4区の南西に位置する。南東には久宝寺遺跡第39次調査地-4区、北西には跡部第35次調査地-6区がある。4区の規模は東西3.1m・南北1.9m・深さ2.1m、5区は東西4.2m・南北2.1m・深さ2.7mである。



第4図 4・5区設定図 (S=1/500)

#### ・層序

現地表面の標高は4区がT.P.+8.8m前後、5区がT.P.+8.6～8.7mで、南が高い。現地表以下0.5



第34図 4・5区壁面図 (S=1/500)

～0.7mまで擾乱・盛土が及んでいた。

第1層：5BG5/1青灰色漂泥粘土質シルトは層厚0.05～0.3m、上面はT.P.+8.0m前後を測る。

グライ化した作土と考えられる。

第2層：2.5Y5/2暗灰黄色漂泥粘土質シルト～砂質シルト、層厚0.2m前後、作土と考えられる。

第3層：2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト・2.5Y6/6明黄褐色砂質シルトの細かいブロック、層厚0.1～0.3m。作土または島畑盛土の可能性がある。

第4層：2.5Y5/1黄灰色粘土質シルト、植物遺体を少暈含む。西部の2・3区と同様硬く締まるもので、床土の可能性がある。層厚0.1～0.2m。

第5層：流水堆積層で、水量は極めて多い。上層にはA層2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト～砂質シルトが部分的に堆積し、B層2.5Y8/8黄色細粒砂～中粒砂、C層2.5Y8/8黄色細粒砂～中粒砂に2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルトの互層が堆積する。上面はT.P.+7.5m前後で、1～3区より高い。5区では深さ1.5mまで確認した。

#### ・遺構と遺物

4区では西部と同様、東西に伸びる溝を検出した。規模・埋土は同様である。底のレベルは、西部がT.P.+7.5m、東部が7.7mで、東から西の流路が考えられる。

### 3.まとめ

今回の調査では、現地表下1.2～1.5m（T.P.+7.0～7.5m）で、既往調査で確認している古墳時代の遺構ベースとなる水成層を検出した。西部の1～3区は静水域で、最下の5C層は水田作土の可能性があるが、攪拌の有無までは確認できていない。東部の4・5区で検出した5層は流水堆積層で、第24次調査-3・4調査区で検出した河川の南の延長にあたる。第24次調査では、3～7調査区にかけて約200mにわたって、南北流する複数の時期の河川（N R 31001～31003）を検出しておらず、第45次調査でも同様の結果が得られている。これらの河川は埋没後の高まりが微地形として残っていたようで、旧地表面以下のレベルは旧駅舎付近（当調査-5区・久宝寺98-1・第24次調査-4区・第39次調査-3区・第45次調査-1区）が最も高くなっている。古墳時代後期にはこの高まりに七ツ門古墳が造営されていることから、これらの河川は、古墳時代中期には埋没していることがわかる。その後の近世段階には、高まりを利用して島畑が、低地には水田が形成され、操車場が構築される近年まで、変わらぬ景観を呈していたものと考えられる。

### 参考文献

- 赤木克視他 2001「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書」〔(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第60集〕〔(財)大阪府文化財調査研究センター〕
- 原田昌則 2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書」〔財団法人八尾市文化財調査研究会報告69〕〔(財)八尾市文化財調査研究会〕
- 原田昌則他 2003「16. 久宝寺遺跡第39次調査」〔平成14年度〔(財)八尾市文化財調査研究会事業報告〕〔(財)八尾市文化財調査研究会〕
- 成海佳子 2003「V久宝寺遺跡第45次調査〔K H 2002-45〕」〔財団法人八尾市文化財調査研究会報告75〕〔(財)八尾市文化財調査研究会〕

# 図 版



1区東・北壁



2区上層（北東から）



2区完掘（北東から）



3区完掘（南西から）



4区完掘（北東から）



5区上層（南西から）



5区下層人力掘削状況（南から）

V 久宝寺遺跡第54次調査（K H2003-54）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市大字淡川地内（平成16年2月23日実施の町名地番改正に伴い現住所では龍華町2丁目）で行った、多目的広場連絡横断ダッキ築造工事に伴う発掘調査の報告である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第54次（K H 2003-54）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第220号 平成15年10月15日付）に基づいて、財団法人八尾市文化財調査研究会が、八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は、平成15年11月26日～12月16日（実働15日間）に、成海佳子を担当者として実施した。調査面積は、約164m<sup>2</sup>を測る。
1. 現地調査・内業整理に参加した調査補助員は、加藤邦枝・竹田貴子・田島宣子・永井律子・村田友子である。
1. 本書作成にあたっては、トレースー山内千恵子、遺物写真撮影、本文執筆・全体の構成は成海がおこなった。
1. 基準点測量は株式会社ウエスコに委託した。

## 本 文 目 次

1.はじめに.....	49
2. 調査概要 .....	49
1) 調査の方法と経過.....	49
2) 基本層序.....	50
3) 検出遺構と出土遺物.....	50
3.まとめ.....	62

## 挿 図 目 次

第1図 調査地位置図.....	49
第2図 1区断面図.....	51
第3図 1区第1～3面平面図、セクションA・B、S K1301南壁面図 .....	53
第4図 2区北・西壁面図、第1面平面図 .....	55
第5図 2区第2～4面平面図、S O2201・S K2201～2205東壁・南壁面図 .....	57
第6図 N R2401出土遺物実測図.....	59
第7図 3区東壁面図.....	59
第8図 3区第1～3面平面図 .....	60

第9図	S E 3201断面図	.....	61
第10図	3区出土遺物実測図	.....	62

## 図 版 目 次

図版一 1区 第1面、2区 第1面、1区 第2面、2区 第2面、1区 第3面  
2区 第3面、1区 第3面SK1301、2区 第4面

図版二 3区 第1面、3区 第3面S E 3201上層、第2・3面、同上中層、第2面S E 3202東  
壁、同上完掘

## V 久宝寺遺跡第54次調査 (K H 2003-54)

### 1. はじめに

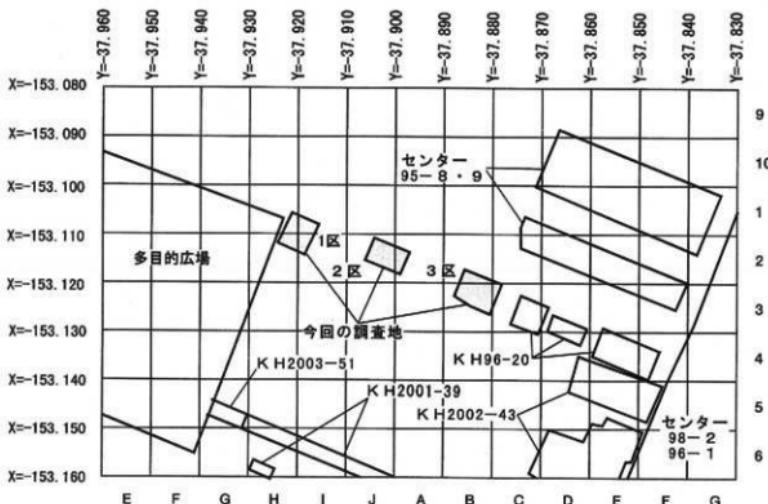
久宝寺遺跡は大阪府八尾市の西部中央に位置し、市域を越えて北は東大阪市、西は大阪市に広がっており、東西・南北1.7km四方の広範囲に及んでいる。遺跡の概要および既往調査成果等については、既刊報告書に詳しいのでここでは割愛する。

今回の調査は久宝寺遺跡第54次調査(略号K H 2003-54)で、大阪府八尾市大字渋川地内で行った、多目的広場連絡横断デッキ築造工事に伴うものである。調査地は、JR久宝寺駅から駅前広場を西へ横断するための歩道橋の基礎部分で、同駅南側を東西に伸びる新設道路「久宝寺南駅前線」をはさんだ南側に位置する。周辺には、東から時計回りに第20次調査地(④)・第43次調査地(本書1)・第39次調査地(⑩)・第51次調査地(⑯)・多目的広場(⑬)・第23次調査地(⑤)が近接して位置している(I-第1図・第1表参照)。

### 2. 調査概要

#### 1) 調査の方法と経過

調査地は東西に連なる3か所で、西から1~3区と呼んだ。既存の埋設物や駅前整備工事との関係から、掘削できない範囲が多く、実際の調査面積は20%程度減じている。掘削については、現地表(T.P.+8.8~9.4m)から1.0~1.4mを重機掘削、以下0.6~2.0mを人力掘削とした。矢板等



第1図 調査地位置図 (S=1/1000)

の土留めは行っていないため、機械掘削では壁面の勾配を充分に取った。機械掘削終了後、周間に幅0.5mの段を残し、人力掘削を行った。

調査区の位置については、すでに周辺で基準としている国土座標第VI系を使用し、他の調査区との位置関係をあきらかにするよう努めた。遺構名は調査区・遺構面ごとに通し番号をつけ、遺構略号以下に調査区番号・遺構面番号・遺構番号（二桁）で表した。「S E2301」は2区第3面の井戸1である。層番号については、1～3区を通じて見られる層を基本層序としてローマ数字で表し、各調査区単位では調査区番号を先頭つけ、以下に二桁の数字を付け、三桁表示とした。

### 2) 基本層序

I層（101・301・302）：操車場開設までの旧耕土である。上面の標高は8.8～9.4mを測り、西が低く東が高い。2区では第1面遺構埋土がこれにあたる。

II層（102・201・303）：第1面ベースを構成する地層で、上面の標高は7.7～7.8m程度である。

III層（103・202・304）：第2面ベースを構成する地層で、上面の標高は7.5～7.7m程度である。

IV層（104・105・203・204・305）：島畑盛土の可能性のある地層で、2区では204層上面を第3面ベースとして捉えた。上面の標高は7.2～7.5m程度である。

V層（106～111・205・306）：古墳時代以降の基盤層となる水成層で、この層上面を最終面とした。上面の標高はT.P.+7.2～7.3m、1区では厚さ0.9mまで確認した。

### 3) 検出構造と出土遺物

#### 〈1区の概要〉

多目的広場の北東端に隣接する調査区である。調査区の規模は、上幅が東西6m・南北7m、下幅が東西5.5m・南北4mを測る。掘削深度は現地表下2.3～2.6m（T.P.+6.25～6.55m）までである。現地表の標高は、道路整備が完了している北東端のみ9.1mを指すが、他は8.8～8.9mと1段下がっている。現地表以下0.5～0.7mまで攪乱・盛土が及んでいた。

#### ・層序

101層：5 BG3/1暗青灰色粘土質シルト、層厚0.1～0.2m。植物遺体を含むブロック層で、近年までの水田作上である。上面の標高は7.7～7.8mで、北東から南西へとやや下がる。土師器の極小片が少量出土している。

102層：5 BG3/1暗青灰色粗砂～中疊混砂質シルト、層厚0.1～0.15m。この層上面が第1面ベースで、上面の標高は7.6～7.7mを測る。

103層：5 BG6/1青灰色粗砂～中疊（多量）混砂質シルト、層厚0.1～0.25m。この層上面が第2面ベースで、上面の標高は7.5～7.6mを測る。土師器片が極少量出土している。

104層：10YR5/6黄褐色疊混砂質シルト、層厚0～0.25m。島畑盛土の可能性があるブロック層で、105層とともにSD1301の西岸を形成する。最も高い部分の標高は、7.55mを測る。

105層：10YR5/4にぶい黄褐色疊混粘土質シルト、層厚0～0.2m。

106層：5 GY7/1明オリーブ灰色極細粒砂、層厚0.1～0.2m。この層上面が第3面ベースで、上面の標高は7.2～7.4mを測り、北東端が高く南西端が低い。この層上面の西部に、104・105層が盛り上げられているようである。グライ化のため5 BG7/1明青灰色を呈する部分がある。これ以下が流水堆積層である。層中から、5～6世紀頃の須恵器壺体部片が出土している。

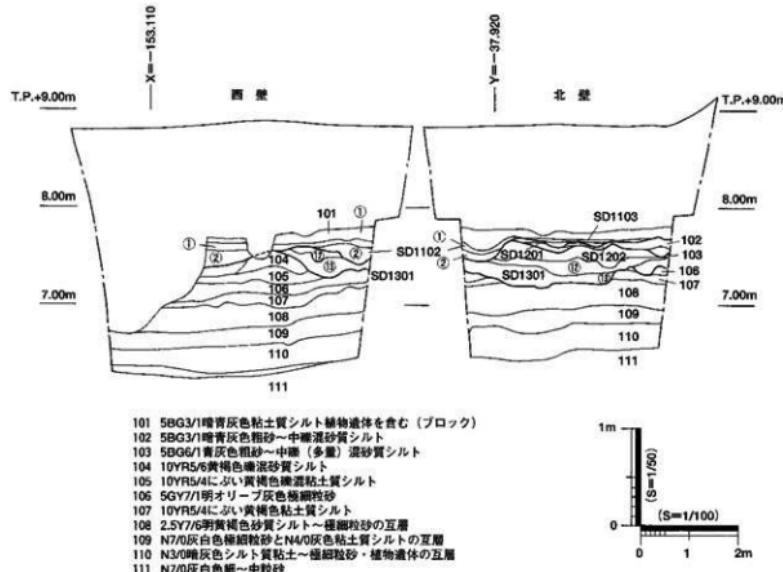
- 107層：10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト、層厚0.1m前後である。  
 108層：2.5Y7/6明黄褐色砂質シルト～極細粒砂の互層、酸化鉄分含む、層厚0.15～0.3m。  
 109層：N7/0灰白色極細粒砂とN4/0灰色粘土質シルトの互層、層厚0.15～0.25m。  
 110層：N3/0暗灰色シルト質粘土～極細粒砂・植物遺体の互層、層厚0.15～0.4m。  
 111層：N7/0灰白色細～中粒砂、層厚0.1m以上。上面の標高は6.3～6.55mで、南西下がりとなつていて。この層上面でも5～6世紀頃の須恵器壺部片が出上している。

#### ・第1面

102層5BG3/1暗青灰色粗砂～中疊混砂質シルト上面で、南北に伸びる溝状造構3条（SD1101～1103）を検出した。いずれも埋土は①5G6/1緑灰色粘土質シルトのブロック層、②植物遺体の薄層を含む5BG2/1青黒色粗砂～大疊混粘土質シルトである。

#### S D 1101

調査区西端に位置する。南部の搅乱のため検出長0.8m・検出幅0.5mにとどまるが、壁面の観察から、幅0.8m・深さ0.25mに復元できる。須恵器片が極少量出上している。



- 第1面通構埋土（SD1101）  
 ① 5G6/1緑灰色粘土質シルト（ブロック）  
 ② 5BG2/1青黒色粗砂～大疊混粘土質シルトに植物遺体の薄層  
 第2面通構埋土（SD1201・1202）  
 ③ 5BG2/1青黒色粘土質シルトと粗砂の互層  
 第3面通構埋土（SD1301）  
 ④ 5BG6/1青灰色粗砂疊混砂質シルト  
 ⑤ 5BG6/1青灰色砂質シルトに5G5/1オリーブ色粘土質シルトのブロック（2～3cm）

第2図 1区壁面図（垂直S=1/50・水平1/100）

### S D 1102

調査区中央西寄り、S D 1101から東約1mに位置する。検出長4.0m・幅0.8m・深さ0.15mを測る。土師器・須恵器片が極少量出土している。

### S D 1103

調査区中央以東、S D 1102から東約0.5mに位置する。検出長4.0m・検出幅2.7mを測るが、壁面の観察から幅3m程度に復元できる。数条の溝が重複しているのか3段掘りを呈している。1段目は幅0.4m・深さ0.1m、2段目は幅0.35m・深さ0.05m、3段目はさらに0.05mほど落ち込んだ後、徐々に浅くなる。土師器・黒色土器・陶器（鍋把手）が少量出土している。

### ・第2面

103層5BG6/1青灰色粗砂～中疊混砂質シルト上面で、南北に伸びる溝状遺構2条（S D 1201・1202）を検出した。いずれも埋土は③5 BG 2/1青黒色粘土質シルトと粗砂の互層である。

### S D 1201

調査区中央東よりに位置する。検出長4.0m・幅0.6～0.7m・深さ0.1mを測る。土師器・瓦器・陶磁器片が極少量出土している。

### S D 1202

S D 1201の東約0.4mに位置する。検出長3.5m・幅0.4m・深さ0.15mを測る。陶磁器片が極少量出土している。

### ・第3面

105層10YR5/4にぶい黄褐色疊混粘土質シルト上面で、土坑1基（S K 1301）、小穴6個（S P 1301～1306）、南北に伸びる溝状遺構1条（S D 1301）を検出した。

### S K 1301

調査区南西隅で検出した。南は調査区外に至り、西・北には擾乱がおよんでおり、東西・南北ともに1m前後の範囲を検出した。詳細は不明であるが、隅丸方形～方形を呈するものと思われ、深さは0.3mを測る。断面の形状は半円形で、底は平坦である。埋土は上部に④5Y5/3灰オリーブ大疊混粘土質シルトに10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルトのブロック（5cm前後）があり、底に⑤10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト・⑥2.5Y5/3黄褐色粘土質シルトが堆積している。④層から須恵器片が1点、⑤層から須恵器・瓦質土器片が少量出土している。

### S P 1301

調査区西端北寄りに位置する。径0.15m・深さ0.2m、埋土は⑦N5/0灰色疊混砂質シルト、⑦5G6/1緑灰色粘土質シルトである。土師器片が極少量出土している。

### S P 1302

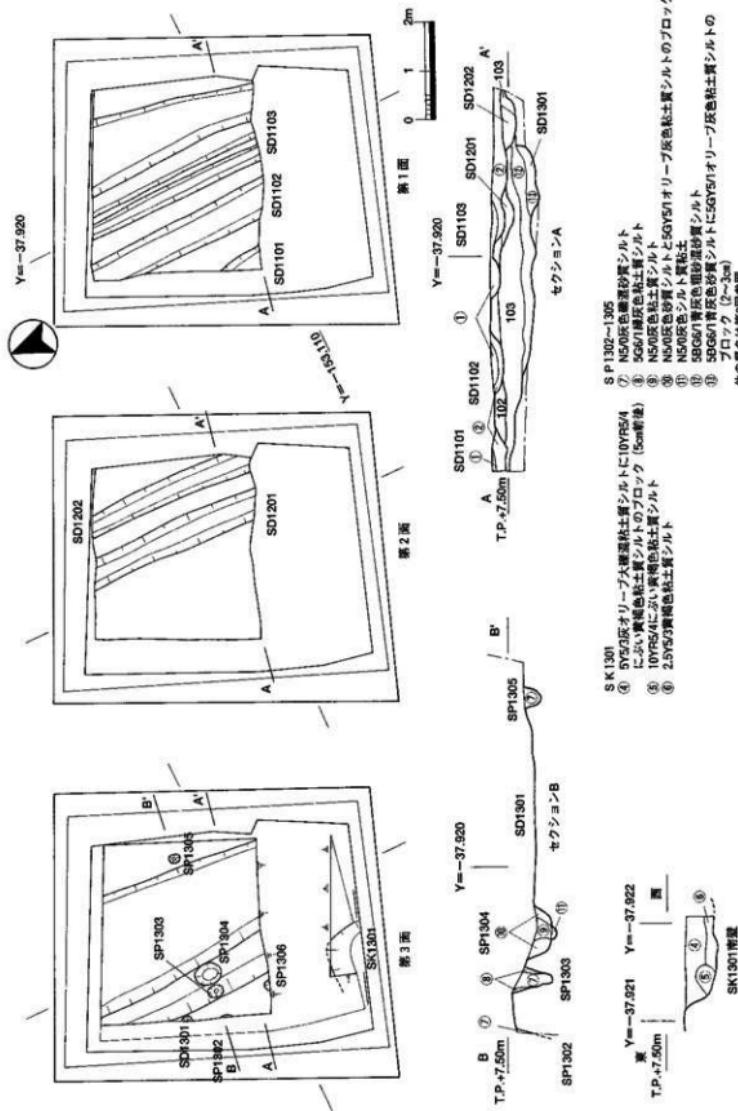
調査区西端中央部、S P 1301の南南西0.8mに位置する。径0.2m以上・深さ0.15m以上、埋土は⑦N5/0灰色疊混砂質シルトである。

### S P 1303

調査区西部、S P 1302の東～東南東0.5mに位置する。径0.25～0.3m・深さ0.2m、埋土はS P 1301と同様、⑦N5/0灰色疊混砂質シルト、⑧5G6/1緑灰色粘土質シルトからなる。

### S P 1304

調査区西部、S P 1302の東隣に位置する。径0.45～0.6m・深さ0.3m、埋土は⑨N5/0灰色粘土質



シルト、⑩N5/0灰色砂質シルトと5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルトのブロック、⑪N5/0灰色シルト質粘土である。⑫層から土師器片が極少量出土している。

#### S P 1305

調査区東部北寄り、S P 1304の東～東南東2.5mに位置する。径0.2m前後・深さ0.2m、埋土は⑦N5/0灰色礫混砂質シルトである。

#### S P 1306

調査区西部南寄り、S P 1302・1303の南1.1mに位置する。径0.2m前後・深さ0.2m、埋土は⑦N5/0灰色礫混砂質シルト、⑧5G6/1緑灰色粘土質シルトである。

これらのうち、S P 1302～1305は、後述する溝S D 1301を横断するように東西に並んでおり、S P 1301・1306はこれに直交してS D 1301の西岸に平行して並んでいる。

#### S D 1301

調査区の大半がこの南北に伸びる溝である。幅2.8m・検出長5.5m・深さ0.3mを測る。西側の岸にはぶい2段掘りとなる。埋土は⑨5BG6/1青灰色粗砂混砂質シルト、⑩5BG6/1青灰色砂質シルトに5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト・5Y5/3灰オリーブ礫混粘土質シルトの細かいブロックである。このうち、層から土師器片（羽釜）・瓦器・瓦質土器・陶磁器片が少量出土している。

#### く2区の概要

1区の東南東20mに位置する。北壁は第23次調査-16調査区と接している。調査区の規模は、上幅が東西8m・南北5m、下幅が東西6m・南北2.5mを測る。現地表の標高は9.1～9.2m、掘削深度は現地表下1.7～3.0m（標高6.2～6.35m）までである。現地表以下1.2～1.3mまで擾乱・盛土が及んでいた。

#### ・層序

201層：5BG6/1青灰色礫混砂質シルト・5BG3/1暗青灰色礫混粘土質シルトのブロック層で、作土と考えられる。層厚は0.1～0.15mを測る。この層上面が第1面で、上面の標高は7.8m前後を測る。土師器・須恵器・陶磁器・瓦片を極少量含む。

202層：5BG3/1暗青灰色中礫混粘土質シルト～砂質シルトのブロック層で、201層同様作土と考えられる。層厚は0.1～0.15mを測る。この層上面が第2面で、上面の標高は7.7mを測る。庄内式壺・土師器（羽釜）・須恵器・瓦質土器・陶磁器の小片を少量含む。

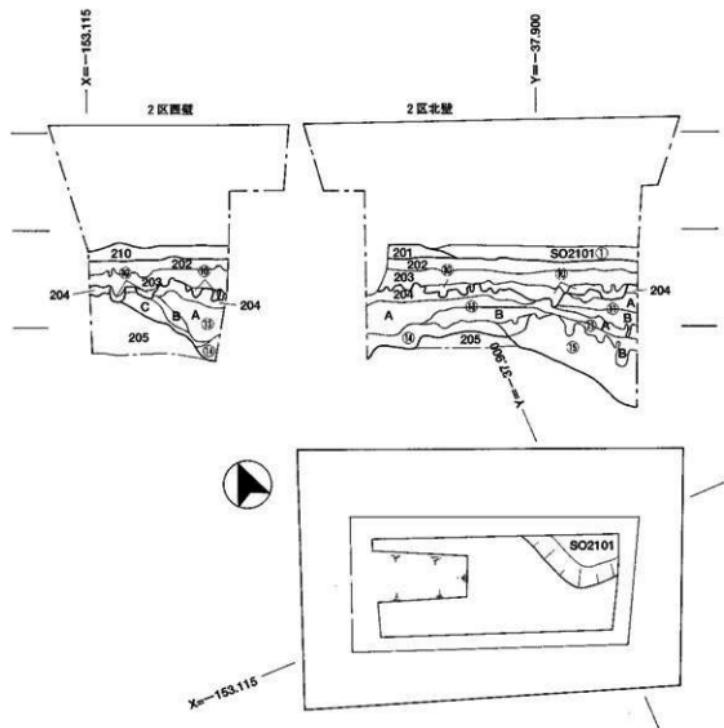
203層：5BG6/1青灰色中礫混粘土質シルト～砂質シルトのブロック層で、この層もまた作土の可能性が高い。層厚0.1～0.2mを測る。

204層：10YR6/2灰黄褐色～10YR6/4にぶい黄橙色極細粒砂混粘土質シルト、層厚0～0.2m、この層上面が第3面で、上面の標高は7.4mを測るが、波状痕跡が顕著に見られる。土師器・須恵器・瓦質土器・瓦等の小片を少量含む。

205層：10YR7/6明黄褐色中粒砂、N7/0灰白色極細粒砂（層厚0.6m以上）。この層上面が第4面ベースで、上面の標高は6.95～7.3m、ピークは南西隅である。河川の最終ベースであるが、この層もまた河川流出土である。

#### ・第1面

201層5BG6/1青灰色礫混砂質シルト・5BG3/1暗青灰色礫混粘土質シルトのブロック層上面で、落ち込み1か所（S O 2101）を検出した。



201 SBG6/1青灰色礁混砂質シルト・5BG3/1青灰色礁混粘土質シルトのブロック

202 5BG3/1青灰色中礁混粘土質シルト・砂質シルトブロック

203 5BG6/1青灰色中礁混粘土質シルト・砂質シルトブロック

204 10YR6/2灰黄褐色・10YR6/4に近い黄褐色礁細粒砂混粘土質シルト

205 10YR7/2明黄褐色中粒砂・N7/0灰白色礁細粒砂

第1面過剰埋土 (SO2101)

① 5BG6/1青灰色粘土質シルト・5G6/1灰白色礁細粒砂質シルトのブロック

第3面過剰埋土 (SD2301~2303)

② 5BG6/1青灰色中礁混粘土質シルト～砂質シルト・N4/0灰白色礁細粒砂ブロック

第4面過剰埋土 (NR2401)

③-A 10YR6/4に近い黄褐色礁細粒砂

10YR6/4に近い黄褐色粘土質シルト・5BG6/1青灰色礁細粒砂～砂質シルト・N7/0灰白色礁細粒砂・10YR8/1灰白色粗粒砂～様の互層

③-B 5BG5/1青灰色礁細粒砂

③-C 5GY5/1オリーブ灰褐色粘土質シルト

④-A 10YR5/1褐灰色粘土質シルト N8/0灰白色礁細粒砂の互層

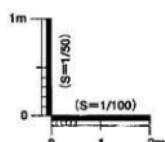
④-B 10YR5/1褐灰色粗粒砂

④-C 10YR5/1褐灰色粘土質シルト～砂質シルト・10YR8/1灰白色礁細粒砂・10YR8/1灰白色粗粒砂～様の互層

⑤-D 10YR5/1褐灰色粘土質シルト・10YR5/1褐灰色粘土質シルト・N7/0灰白色礁細粒砂、10YR8/1灰白色粗粒砂～様の互層

⑥-E 10YR7/2明黄褐色粗粒砂と10YR5/1褐灰色粘土質シルトの互層

⑦-F 10YR5/1褐灰色粘土質シルトにN7/0灰白色礁細粒砂のラミナ



第4図 2区北・西壁面図 (S=垂直 1/50・水平 1/100)、第1面平面図 (S=1/100)

### S O 2101

調査区部で検出した。北・東は調査区外に至り、南西角は隅丸にめぐる。東西幅1.5m・南北幅1.2m・深さ0.15mを測る。明確な堀形は無く、201層がゆるやかに落ちている。北・東は調査区外に至るため詳細は不明であるが、方形～隅丸方形を呈するものと思われる。埋土は①5BG6/1青灰色粘土質シルト・5G6/1緑灰色砂質シルトのブロックである。

### ・第2面

5BG3/1暗青灰色中疊混粘土質シルト～砂質シルトのブロック層上面で、落ち込み＝斜面一か所（S O 2201）と、S O 2201内で土坑5基（S K 2201～2205）を検出した。

### S O 2201

調査区の東西角を結ぶ対角線上にピークを持ち、そこからほぼ真南に落ち込む斜面を検出した。深さは0.5mである。内部には②5GY3/1暗オリーブ灰色粘土質シルト・植物遺体・N7/0灰白色細粒砂の互層、③5BG3/1暗青灰色細粒砂～中疊混砂質シルトに5BG6/1青灰色粘土質シルトのブロック（炭・植物遺体含む）、④N7/0灰白色粗粒砂に5BG2/1青黒色粘土質シルト・5BG6/1青灰色粘土質シルトのブロック、⑤5GY6/1オリーブ灰色粘土質シルト・極細粒砂のブロック、⑥5BG6/1青灰色粘土質シルト・5G6/1緑灰色砂質シルトのブロック、⑦5GY6/1オリーブ灰色～5BG6/1青灰色砂質シルトにN7/0灰白色極細粒砂のラミナが堆積する。②～⑦は自然堆積、③～⑥は人為的に埋め立てられたものと考えられる。このうち、③層から、古式土師器・土師器・磁器器・瓦などが少量出土している。

また、④～⑥まで埋まつた段階で、④・⑤層上面から土坑5基（S K 2201～2205）が切り込んでいる。これらの土坑は等間隔に並んでおり、ほぼ同規模・形状で、埋土はいずれも⑧5BG6/1青灰色粘土質シルト・5G6/1緑灰色砂質シルトのブロック、⑨5BG6/1青灰色中粒砂混砂質シルトからなる。

### S K 2201

北西部の1/2程度を検出した。平面の形状は、南北に長い楕円形で、長径1.5m・短径0.6mを測る。断面の形状は、縦断面はほぼ台形、横断面は半円形を呈し、深さ0.3mを測る。

### S K 2202

S K 2201から西1mで検出した。平面の形状は南北に長い楕円形で、南半分がやや窪む。長径1.3m・短径は0.6m・深さ0.2mを測る。

### S K 2203

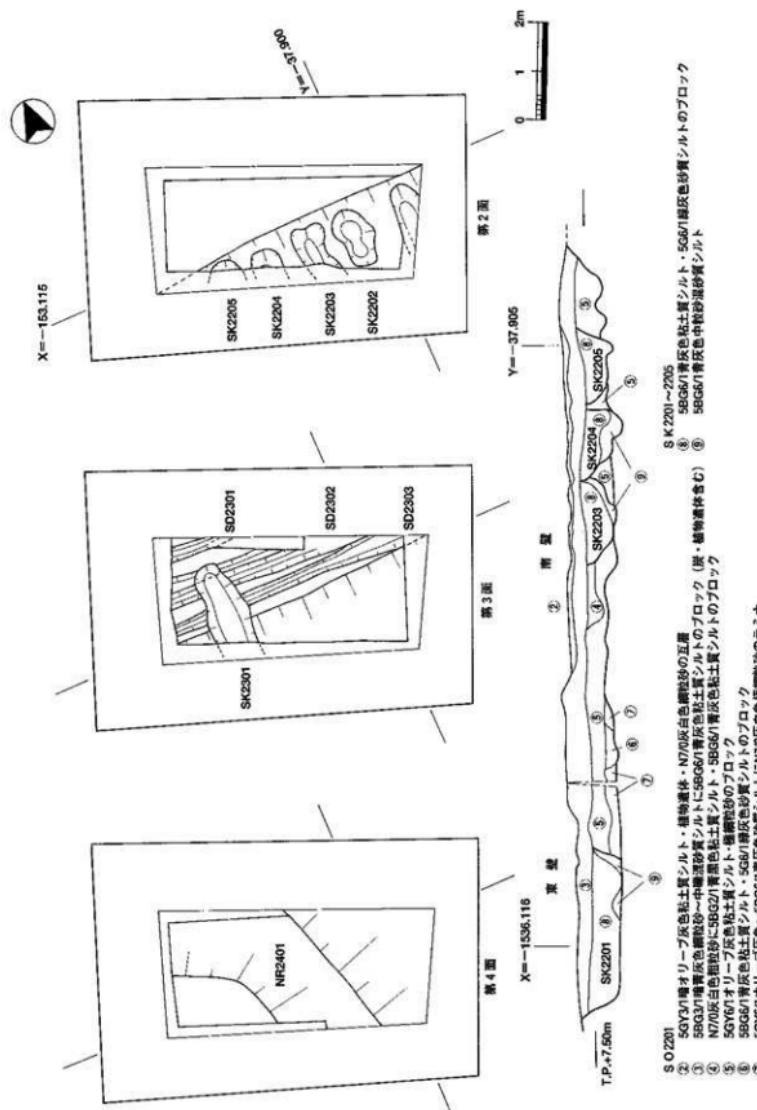
S K 2202から0.8m西で検出した。平面の形状は南北に長い隅丸長方形で、中央がやや窪む。平面では長辺1.2mを検出したが、南壁内の埋土が抜け落ちたことから、S K 2201同様長辺1.5mの規模を持つことがわかった。短辺は0.5m・深さは0.35mを測る。

### S K 2204

S K 2203から1.1m西で、北部の一部を検出した。南北0.3m・最大幅0.6mを測る。壁面の観察からは深さ0.4mが確認でき、底に逆凸字状の窪みが見られる。

### S K 2205

S K 2204から0.8m西で、北端のごく一部を検出した。南北0.1m・最大幅0.5mを測る。断面の形状・深さはS K 2204と同じである。



第5図 2区第2面～第4面平面図 (S=1/100)、SK2201～2205東壁・南壁面図 (S=1/50)

#### ・第3面

204層10YR6/2灰黃褐色～10YR6/4にぶい黄橙色極細粒砂混粘土質シルト上面で、土坑1基（SK 2301）、東西に伸びる溝状遺構3条（SD 2301～2304）を検出した。埋土はいずれも@5BG6/1青灰色中疊混粘土質シルト～砂質シルト・N4/0灰色極細粒砂のブロックからなる。第3面ベースも、調査区の東西を結ぶ対角線上にピークを持ち、南へにぶく下がっている。

#### SK 2301

調査区西部で検出した。平面の形状は南北に長い楕円形を呈し、長径1.8m・短径0.8mを測る。断面の形状は、浅い半円形、深さは0.1mを測る。SD 2302・SD 2303に直交して掘り込まれている。土師器の小片が極少量出土している。

#### SD 2301

北端に位置し、ほぼ東西に伸びる。検出長1.2m・検出幅0.3m・深さ0.1mを測る。断面の形状は半円形である。

#### SD 2302

SD 2301から南0.5mに位置し、ほぼ東西に伸びるが、東端ではSD 2303と合流している。検出長4.2m・幅0.8mを測る。数条の溝が重複しているのか北側は2段掘りで上段の幅0.25m・深さ0.15m、下段の幅0.4m・深さ0.2mを測る。

#### SD 2303

SD 2302の南0.2m前後に位置する。検出長5.1m・幅0.2～0.4mと東へ行くほど幅広となり、深さは0.15mを測る。断面の形状は半円形である。

#### ・第4面

205層10YR7/6明黄褐色中粒砂・N7/0灰白色極細粒砂の互層上面で、河川（NR 2401）を検出した。

#### NR 2401

西隅に高まりを持ち、北東方向へ2段に落ちる肩をもつ。上段の深さ0.6m、下段の深さ0.6mである。内部には⑪～⑯が堆積する。最深部はT.P.+6.12m、現地表下3m前後にあたる。

⑪は、A)10YR6/4にぶい黄橙色極細粒砂（層厚0～0.2m）、B)10YR6/4にぶい黄橙色極細粒砂・10YR6/4にぶい黄橙色粘土質シルト・5BG6/1青灰色極細粒砂～砂質シルト・N7/0灰白色極細粒砂・10YR8/1灰白色粗粒砂～疊の互層（層厚0～0.35m）からなり、北東部のみに見られるもので、南東～北西方向の一時的な河川流路の堆積層と考えられる。

⑫は、A)5GY6/1オリーブ灰色～5BG6/1青灰色砂質シルトにN7/0灰白色極細粒砂のラミナ（層厚0.05～0.1m）、B)5BG5/1青灰色極細粒砂（層厚0.05～0.1m）、C)5GY6/1オリーブ灰色粘土質シルト（層厚0～0.1m）、D)5GY5/1オリーブ灰色粘土質シルト・N8/0灰白色極細粒砂の互層（層厚0.05～0.1m）からなる。東壁北部では⑩層に削られ、一時的な河川流路の肩を形成している。

⑬は、A)10YR5/1褐灰色粘土質シルト・極細粒砂の互層（層厚0.1～0.4m）、上面に鉄分、底に植物遺体が薄く堆積する。B)10YR5/1褐灰色粗粒砂（層厚0.1m前後）、C)10YR5/1褐灰色砂質シルト～粗粒砂の互層、底に中疊と粘土質シルトのブロック（層厚0～0.2m）、D)10YR5/1褐灰色粘土質シルト～砂質シルト～極細粒砂、N7/0灰白色極細粒砂・10YR8/1灰白色粗粒砂～疊の互層（0.05～0.3m）からなり、南東～北西方向の流路の堆積層である。⑭は10YR7/6明黄褐色粗粒砂と10YR5/1褐灰色粘土質シルトの互層（層厚0.10～0.25m）、河川上段底に見られ、⑮とともに南東

- 北西方向の流路の堆積層である。

⑯は10YR5/1褐色粘土質シルト（層厚0~0.6m）で、N7/0灰白色極細粒砂のラミナで3層に分かれる。河川下段の深みに堆積する南-北方向の流路の堆積層である。

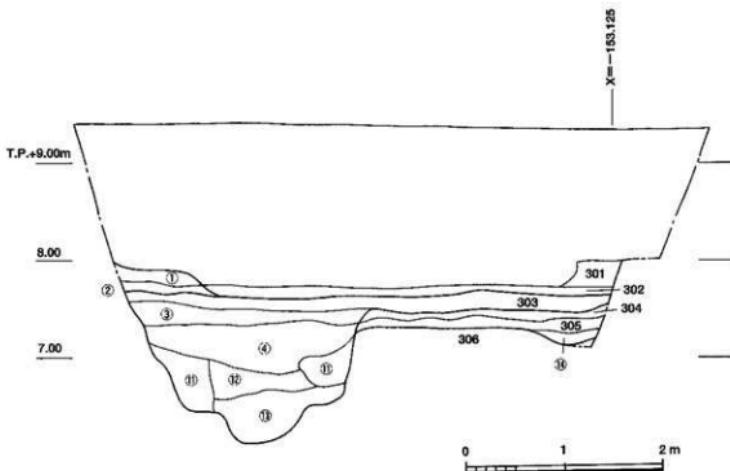
⑰層から、須恵器杯身(1)のほか、須恵器片が極少量出土した。1は水平な受部を持ち、外面の回転ケズリの範囲が広いもので、その特徴から、5世紀後半（TK23型式）に比定できる。

### 〈3区の概要〉

2区の南東20mに位置する。南東4~5mには第20次調査-1調査区が位置する。規模は、上幅が東西8m・南北6~7m、下幅が東西6m・南北3.5~4.5mを測る。現地表の標高は、9.2~9.4m、掘削深度は現地表下2~2.3m（標高7.1~7.3m）までである。現地表以下1.4~1.6mまで搅乱・盛土が及んでいた。



第6図 NR 2401出土遺物  
実測図 (S=1/4)



302 SBG3/1暗青灰色粗粒砂混沙質シルト

303 SBG5/1青灰色粗粒砂混沙質シルト

304 10YR5/6黄褐色中細粒粘土質シルト

305 10YR5/4にぶい黄褐色粘土質シルト

306 10YR7/1灰白色中-粗粒砂

第1図 鮎野3101

① SBG2/1青褐色極細粒砂質シルト・SBG6/1青灰色粘土質シルトのブロック

② SBG6/1青灰色粘土質シルト・N7/0灰白色粗粒砂のブロック（植物遺体含む）

第2図 S E 3202

③ SBG5/1青反色中細粒砂質シルト・粘土質シルトのブロック

④ 10YR5/6黄褐色粗粒砂に中細粒粘土質シルトのブロック

⑤ 10YR7/1灰白色粗粒砂に10YR5/6黄褐色中細粒粘土質シルト・10YR6/1褐灰色粘土質シルトのブロック

⑥ 10YR7/1灰白色粗粒砂に10YR6/1褐灰色粘土質シルトブロック

第3図 S D 3301

⑦ 10YR5/4にぶい黄褐色極細粒砂の互層

第7図 2区東壁面図 (S=1/50)

・層序

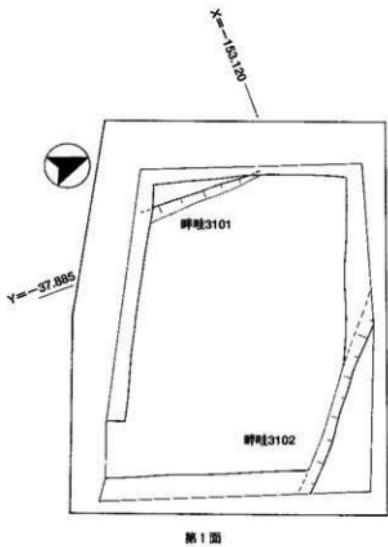
- 301層：5BG2/1青黒色粘土質シルト、植物遺体を含むブロック層、層厚は0.05～0.15mを測る。土師器・須恵器・瓦器・陶磁器片が少量出土している。
- 302層：5BG3/1暗青灰色粗粒砂混砂質シルト、層厚0.1m前後、攪拌を受けており、作土と考えられる。土師器・須恵器・白磁碗(3)・国産陶磁器(2)片が少量出土している。
- 303層：5BG5/1青灰色粗粒砂混砂質シルト、層厚0.1～0.2m、この層上面が第1面である。上面の標高は7.6～7.7mを測る。
- 304層：10YR5/6黄褐色中疊混粘土質シルト、層厚0.1～0.3m、この層上面が第2面で、島畠の盛土である。上面の標高は7.4～7.5mを測る。層中から錢貨(5)・陶磁器の小片が出土している。
- 305層：10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト、層厚0.1～0.2m。
- 306層：10YR7/1灰白色中～粗粒砂、層厚0.5m以上。この層上面が第3面ベースで、上面の標高は7.1～7.3mを測る。河川流出土で、第2面で検出した井戸の湧水層である。層中からは、古墳時代中期の土師器壺(4)が出土している。

・第1面

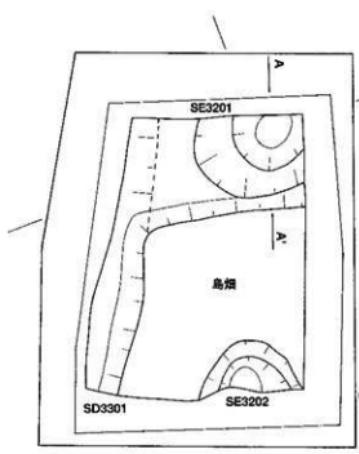
303層5BG5/1青灰色粗粒砂混砂質シルト上面で、畦畔2条(畦畔3101・3102)を検出した。ともに大規模な畦で、盛土によって構築されている。

畦畔3101

調査区南西部で検出した。ほぼ南北に伸びる。検出部での幅0.5m以上、高さ0.2mを測る。  
 ①5BG2/1青黒色疊混粘土質シルト・5BG6/1青灰色粘土質シルトのブロックを盛り上げて構築されている。



第1面



第2・3面



第8図 3区第1～3面平面図 (S=1/100)

## 畦畔3102

調査区北東部で検出した。南東—北西方向に伸びる。検出部での幅1.1m以上・高さ0.3mを測る。①5BG2/1青黒色疊混粘土質シルト・5BG6/1青灰色粘土質シルトのブロック・②5BG6/1青灰色粘土質シルト・N7/0灰白色粗粒砂のブロック（植物遺体含む）を盛り上げて構築されている。

## ・第2面

304層10YR5/6黄褐色中疊混粘土質シルト上面で、井戸2基（S E 3201・3202）を検出した。304層は島畑を構成するもので、井戸は島畑の南西隅に位置している。

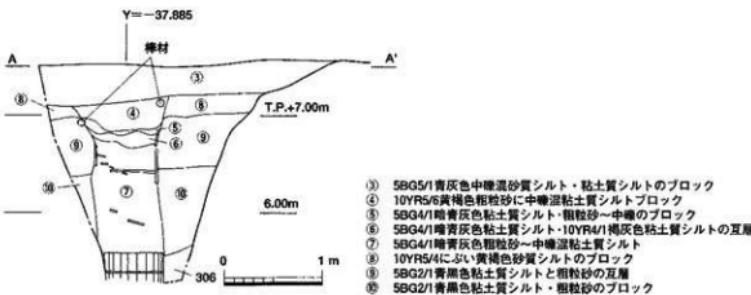
## S E 3201

調査区北西隅で約2/3を検出した。検出部の東西幅1.8m・南北幅2.2m・深さは2.2mまで確認した。平面の形状は直径3m程度の円形に復元できる。断面の形状は2段の掘り形を持ち、上段の深さ0.4m・下段の深さ1.8mを測る。井戸側内部も上下2段に分かれており、上段の平面形状は東西に長い長方形、断面は半球形を呈し、規模は長辺0.75m以上・短辺0.5m・深さ0.5mを測る。下段は径0.7mの凹筒形で、部分的に井戸側桶の板材が残存している。井戸底には最下段の井戸側桶が遺存しており、湧水層である306層に達している。

上面には、③5BG5/1青灰色中疊混砂質シルトが堆積している。井戸側内部上段の埋土は、④10YR5/6黄褐色粗粒砂に中疊混粘土質シルトのブロック・⑤5BG4/1暗青灰色粘土質シルト・粗粒砂～中疊のブロック・⑥5BG4/1暗青灰色粘土質シルト・10YR4/1褐灰色粘土質シルトの互層で、⑦層上面には植物遺体が約0.5cmの厚さで堆積していた。下段の埋土は⑧10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルトのブロック、⑨5BG2/1青黒色粘土質シルトと粗粒砂の互層、⑩5BG2/1青黒色粘土質シルト・粗粒砂のブロックからなる。

③～⑦・⑩層から、陶磁器や井戸棒瓦などが少量ずつ出土しており、③層からはスサを含む粘土塊、④層からは丸瓦・軽石や井筒の可能性のある板・棒が出土している。また、⑦層上部には井戸側桶の板材・蓋などが散乱していたほか、⑦層下部には須恵器・備前焼甕・丸瓦・平瓦の小片が少量出土している。

この井戸は、下部が埋まって放棄されてから（⑦層）、ある程度の期間畠みが遺存していたものと考えられ（④～⑥層）、その後最終的に③層によって埋め立てられたものであろう。



第9図 SE3201断面図 (S=1/50)

### S E 3202 (断面は第9図参照)

調査区北東隅で西半分を検出した。直徑1.5m・深さ1.3mを測る。抜き取られたものか、井戸側等の施設は残っていなかった。

内部には、上から③～⑤、⑪10YR7/1灰白色粗粒砂に10YR5/6黄褐色中疊混粘土質シルト・10YR6/1褐灰色粘土質シルトブロック、⑫10YR7/1灰白色粗粒砂に10YR6/1褐灰色粘土質シルトブロック、⑬5BG5/1青灰色粘土質シルト・粗粒砂のブロックが堆積しており、底は湧水層に達している。堆積状況からは、⑪が掘り形埋土、⑫・⑬が井戸側内埋土の可能性が高い。

#### ・第3面

306層10YR7/1灰白色中～粗粒砂上層で、溝状造構1条(S D 3301)を検出した。

### S D 3301 (断面は第9図参照)

調査区の南辺に沿って、南東・北西方向に伸びるもので、検出長約6m・復元幅約1m・深さ0.15m程度を測る。埋土は⑯10YR5/4にぶい黄褐色砂質シルト～極細～粗粒砂の互層である。

#### ・出土遺物

301層から肥前系磁器碗(2)・白磁碗(3)、304層から銭貨(5)、306層から土師器壺(4)が出土した。

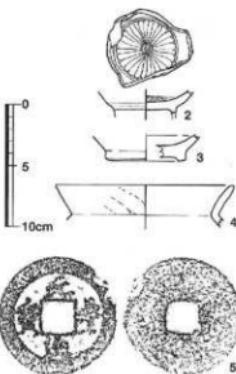
肥前系磁器碗2は見込みに菊花文を素描き技法で施すもので、呉須の発色は悪い。17世紀後半以降のものであろう。白磁碗3は小片のため不明瞭であるが、高台裏面の削り込みは浅く、11世紀末～12世紀初頭(平安時代後期)のものと考えられる。土師器壺4は磨耗を受けているが、古墳時代中期の壺と思われる。306層は第2面で検出した井戸の湧水層にあたり、1区106層以下および2区N R 2401に対応するものと考えられ、いずれも5世紀代以降の須恵器が出土している。5は元豊通寶(初鑄1078年)であるが、粗雑なつくりで模鋳銭の可能性が高い。模鋳銭は中世末期～近世初期以降に流通したものとされているが、鑄造時期・鑄造地は明確ではない。

### 3.まとめ

今回の調査では、現地表下1.2～1.5m(標高6.95～7.3m)で、既往調査で確認している古墳時代の造構ベースとなる水成層を検出した。

### 参考文献

- ・須恵器：田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- ・肥前系磁器：2000『九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念』九州近世陶磁学会
- ・白磁碗：山本信夫 1995「11. 貿易陶磁器〔1〕中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編 真陽社
- ・銭貨：永井久美男 1996『日本出土銭総覧1996年版』兵庫県埋蔵銭調査会



第10図 第3区出土遺物実測図  
(S=1/4)、拓影(S=1/1)

# 図 版



1区 第1面（東から）



2区 第1面（西から）



1区 第2面（東から）



2区 第2面（西から）



1区 第3面（東から）



2区 第3面（西から）



1区 第3面SK1301（南から）



2区 第4面（西から）



3区 第1面（西から）



3区 第3面SE3201上層（南から）



3区 第2・3面（西から）



同上中層（同上）



3区 第2面SE3202東壁



同上先掘（同上）

VI 久宝寺遺跡第56次調査（K H2004-56）

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市神武町93-1 及び93-4 の各一部で実施したJR久宝寺駅前周辺道路整備工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第56次調査（KH2004-56）の発掘調査の業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第89号 平成16年6月22日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成16年7月1日～平成16年9月3日（実働13日間）にかけて原田昌則を担当者として実施した。面積約267m<sup>2</sup>を測る。  
現地調査においては、岩沢玲子・加藤邦枝・川村一吉・田島宣子・竹田貴子・中村百合・若林久美子が参加した。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し平成16年10月29日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、図面トレースー山内千恵子が行った。
1. 本書の執筆・編集は原田が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめに.....	63
2.調査概要.....	64
1) 調査方法と経過.....	64
2) 基本層序 .....	65
3) 検出構造と出土遺物.....	66
3.まとめ.....	70

## 挿図目次

第1図	地区割り図	65
第2図	1区南壁柱状図	66
第3図	1区 第1・2面平面図	67
第4図	2区 堤-101、SD-101平面略図	70
第5図	2区 堤-101、SD-101西壁断面図	71

## 写真目次

写真1	1区調査風景	63
-----	--------	----

## 図版目次

図版一	1区 第1面全景、1区 第1面遺構検出状況、1区 第2面全景、 1区 第2面遺構検出状況、1区 下部調査<T.P.+5.0m付近>、 1区 下部調査<T.P.+4.0~2.0m付近>、
図版二	2区 堤-101検出状況、2区 堤-101検出状況、 2区 堤-101および杭列検出状況、2区 SD-101検出状況 2区 調査風景、2区 南部調査風景

## VI 久宝寺遺跡第56次調査 (K H 2004-56)

### 1. はじめに

久宝寺遺跡は、旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の平野川に挟まれた三角州上の微高地に位置する縄文時代晚期～近世に至る複合遺跡である。現在の行政区画では八尾市西部の久宝寺1～6丁目・西久宝寺・南久宝寺1～3丁目・北久宝寺1～3丁目・神武町・竜華町1・2丁目・北龜井町1～3丁目・渋川町1～7丁目および東大阪市大蓮5丁目・大蓮南2丁目一帯の東西約1.6km、南北約1.7kmがその範囲とされている。

久宝寺遺跡の発見の契機は、1935年(昭和10年)に八尾市久宝寺5丁目で行われた道路工事中に船の残片とともに、弥生時代中期～古墳時代に至る遺物が発見されたことによるが、断片的な資料であり、長らく遺跡の実体は不明であった。昭和40年代後半には、遺跡の西部を南北に縱断する近畿自動車道の計画に伴い、1973～1974年(昭和48～49年)に試掘調査が実施された結果、弥生時代～中世に至る遺構・遺物が重層的に広範囲にわたって検出され、当遺跡が複合遺跡であることが確認された。これらの試掘結果をもとに、昭和57年以降は(財)大阪文化財センター(現(財)大阪府文化財センター)により近畿自動車道建設予定地での発掘調査(久宝寺北〔その1～3〕・久宝寺南〔その1～3〕・龜井北〔その1〕)が実施された結果、弥生時代～中世に至る遺構・遺物が多量に検出されている。なかでも、古墳時代初頭後半(庄内式新相)の準備造船の発見は、内海の河内湖南岸に近接した久宝寺遺跡が「湊津」的な役割を果たした集落であったことを示す資料として注目された。1991年(平成3年)に八尾市北龜井3丁目で当調査研究会が実施した第9次調査(K H 91-9)では、古墳時代前期前半(布留式古相)の2棟の住居内から重圓文鏡と素文鏡が出土したほか、近接する地点からは方墳2基と墳丘長35mを測る前方後方墳1基が検出されている。前方後方墳からは、複合口縁壺形と直口壺形の2種類の壺形埴輪が検出されており、中河内地域における古墳文化受容期の葬送儀礼の一端知る上で貴重である。また1994年(平成6年)に八尾市神武町で当調査研究会が行った第18次調査(K H 94-18)では、古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される朝鮮半島の南部に淵原を持つ炉形土器・軟質両耳甕が出土しており、西接する大阪市の加美遺跡第1次調査(K M 84-1)で検出された加美1号方形周溝墓出土の陶質土器(朝鮮三国時代初頭)の存在とともに、遺跡範囲の西部から加美遺跡にかけて、渡来系集団の集落が存在した可能性が強くなってきた。

一方、旧国鉄竜華操車場跡地(約24.6ha)内の発掘調査は、昭和63年の市教育委員会の試掘調査を嚆矢として、平成2年度には当調査研究会が第4次調査(K H 90-4)、平成7年度には(財)大阪府文化財調査研究センターによる試掘調査(95-1～7トレンチ)とJR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う発掘調査(95-8・9トレンチ)、平成8年度には市教育委員会の試掘調査と当調査研究会による第20次調査(K H 96-20)が実施されてい



写真1 1区調査風景(東から)

る。さらに1997年(平成9年)度以降は「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」の一環として、公共施設建設および新設道路部分を中心とした発掘調査の計画が策定され、(財)大阪府文化財調査研究センター(現(財)大阪府文化財センター)及び当調査研究会による発掘調査が継続的に実施されている。これら一連の調査では、縄文時代晚期～近世に至る遺構・遺物が広範囲にわたって検出されている。中でも新たに検出された約70基におよぶ古墳時代初頭前半～前期前半(庄内式古相～布留式古相)の墳墓群の存在は、古墳文化受容期における中河内地域の墓制の在り方を推定するうえで示唆に富む資料を提供する結果となった。

この様に、久宝寺遺跡では、特に古墳時代初頭前半～前期後半(庄内式古相～布留式新相)を中心として、広範囲にわたって数多くの集落が形成されたことが知られている。久宝寺遺跡周辺の遺跡としては、東に阿刀氏の氏寺で飛鳥時代前半の創建とされる渋川廃寺、南に跡部銅鐸で知られている跡部遺跡と弥生時代中期に大規模な環濠集落を形成する亀井遺跡、西に弥生時代中期の大形墳丘墓および古墳時代初頭前半～前期後半(庄内式古相～布留式新相)の大規模な墓域が検出された大阪市の加美遺跡、北に佐堂遺跡が位置している。

今回、久宝寺遺跡56次調査(K H2004-56)を実施したJR久宝寺駅の北部では、平成11年に第26次調査(K H99-26)、平成15年に第49次調査(K H2003-49)を実施しており、古墳時代初頭～近世に至る遺構が検出されている。

今回の調査地は第26次調査(K H99-26)を挟んで南側に1区、北に2区が位置しているほか、2区の南西部分が第49次調査(K H2003-49)と接続している。

## 2. 調査概要

### 1) 調査方法と経過

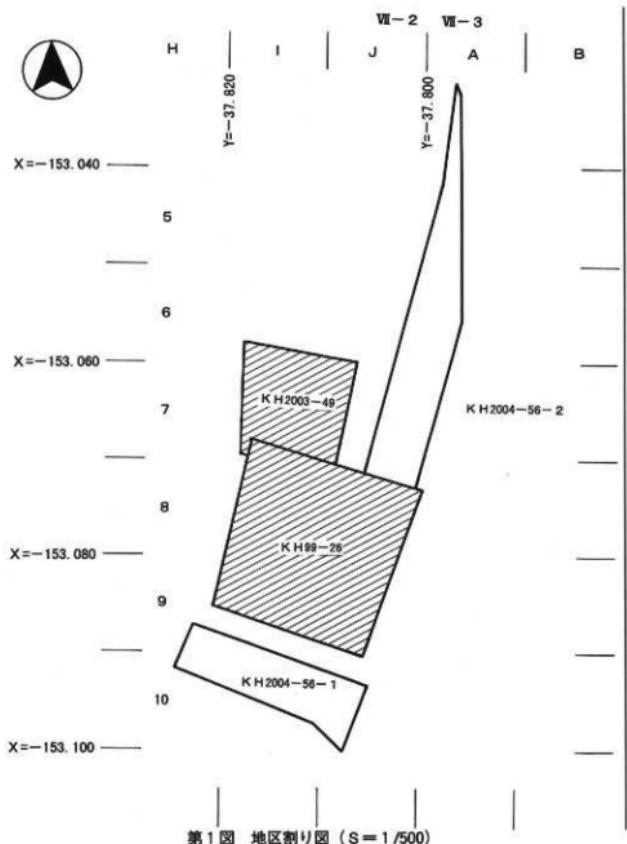
今回の発掘調査は、JR久宝寺駅前周辺道路整備工事に伴うもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第56次調査(K H2004-56)にあたる。調査対象地は南側の地下道構築部分と北側の暫定道路部分の2箇所で、前者を1区、後者を2区とした。1区が第26次調査(K H99-26)の南、2区が北東部に隣接している。調査面積は1・2区を含めて約267m<sup>2</sup>を測る。

1区については、鋼矢板で囲繞された長さ19.6m、幅5.0～6.5m、面積101m<sup>2</sup>を対象とした。上部調査として現地表下約1.0m(T.P.+7.6m)迄の調査を実施した。以下については、下部調査としてT.P.+1.5m迄の地層を対象とした立会調査を実施した。

2区は暫定道路部分の法面掘削工事に伴って実施した。掘削深度である現地表下2.6～5.4m(T.P.+5.4～2.6m)迄の地層堆積状況を主目的とした立会調査を実施し、適宜、地層柱状図の作成を行った。調査区全体の地区割については、平成9年度以降継続して実施している「八尾都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業」に関連した発掘調査に対応するため、当調査研究会が独自に設定した地区割りに従った(本書IのP 3参照)。

調査の結果、1区では、現地表下0.9m(T.P.+7.7m)付近に存在する第2層上面で、鎌倉時代、第3層上面(T.P.+7.6m)で平安時代前期に比定される遺構・遺物を検出した。

2区ではⅢ-3-4・5A地区の西壁を中心とした地点で、既往調査で明らかにされている古墳時代中期前半に埋没する河川に関連した堤1基(堤-101)と堤-101の北側に付随する溝(S D-101)1条を検出した。遺物が出土したのは、1区のみで遺構内および包含層を構成する第2層



から出土している。出土遺物は古墳時代後期～鎌倉時代に比定される土器類が大半であるが、全て細分化しており図化し得たものは無い。量的にはコンテナ 1/2 箱程度である。

## 2) 基本層序

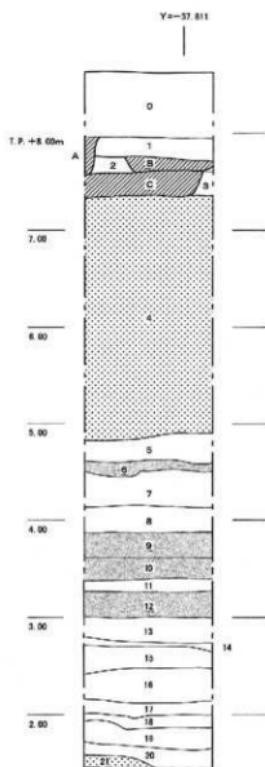
ここでは、22層(第0層～第21層)を抽出して基本層序とした。なお、第4層以下は下層調査で確認した地層である。

第0層：客土。層厚65cm。上面の標高はT.P.+8.6m。

第1層：10YR6/3にぶい黄橙色砂質シルト。層厚20cm。管状斑鉄およびマンガンが斑点状に付着。

第2層：10YR6/2灰黄褐色砂質シルト。層厚15～20cm。耕盤に特有なマンガン・酸化鉄が斑点状に付着。古墳時代中期～鎌倉時代の遺物を少量含む。上面が第1面。

- 第3層：10YR6/1褐色砂質シルト。層厚20cm。マンガンが斑点状に付着。上面が第2面。
- 第4層：2.5Y8/4淡黄色細粒砂～粗粒砂。層厚245～270cm。細礫～中礫を含む。河川堆積層。
- 第5層：10GY4/1暗緑灰色粘土。層厚5～28cm。植物遺体および炭酸鉄の顆粒が認められる。
- 第6層：N3/0暗灰色粘土。層厚10～15cm。黒色帶を構成している。上部を中心に生物擾乱が認められる。
- 第7層：10GY6/1緑灰色粘土。層厚50cm。一部にシルト質粘土を含む。上部に生物擾乱および乾痕が認められる。
- 第8層：N3/0暗灰色粘土。層厚25cm。生物擾乱が認められる。
- 第9層：10YR3/1黒褐色粘土。層厚25cm。酸化鉄の顆粒が散見される。
- 第10層：2.5Y3/1黒褐色粘土。層厚20cm。シルト質粘土を含む。
- 第11層：5BG6/1青灰色粘土。層厚10cm。
- 第12層：N3/0暗灰色粘土。層厚25cm。黒色帶を構成している。
- 第13層：10GY6/1緑灰色シルト質粘土。層厚20～25cm。
- 第14層：10GY5/1緑灰色粘土。層厚5cm前後。
- 第15層：N4/0灰色粘土質シルト。10GY8/1明緑灰色シルトを含む。層厚20～30cm。
- 第16層：2.5GY7/1明オリーブ灰色粘土に第15層のブロック。層厚35cm。
- 第17層：N5/0灰色粘土質シルトに2.5GY7/1明オリーブ灰色シルトの互層。層厚15cm前後。
- 第18層：N4/0灰色粘土質シルト。層厚13cm。炭化物の細粒を含む。
- 第19層：5Y5/1灰色粘土。層厚20cm。
- 第20層：5Y4/1灰色粘土。層厚20cm。
- 第21層：N8/0灰白色極細粒砂。層厚10cm以上。



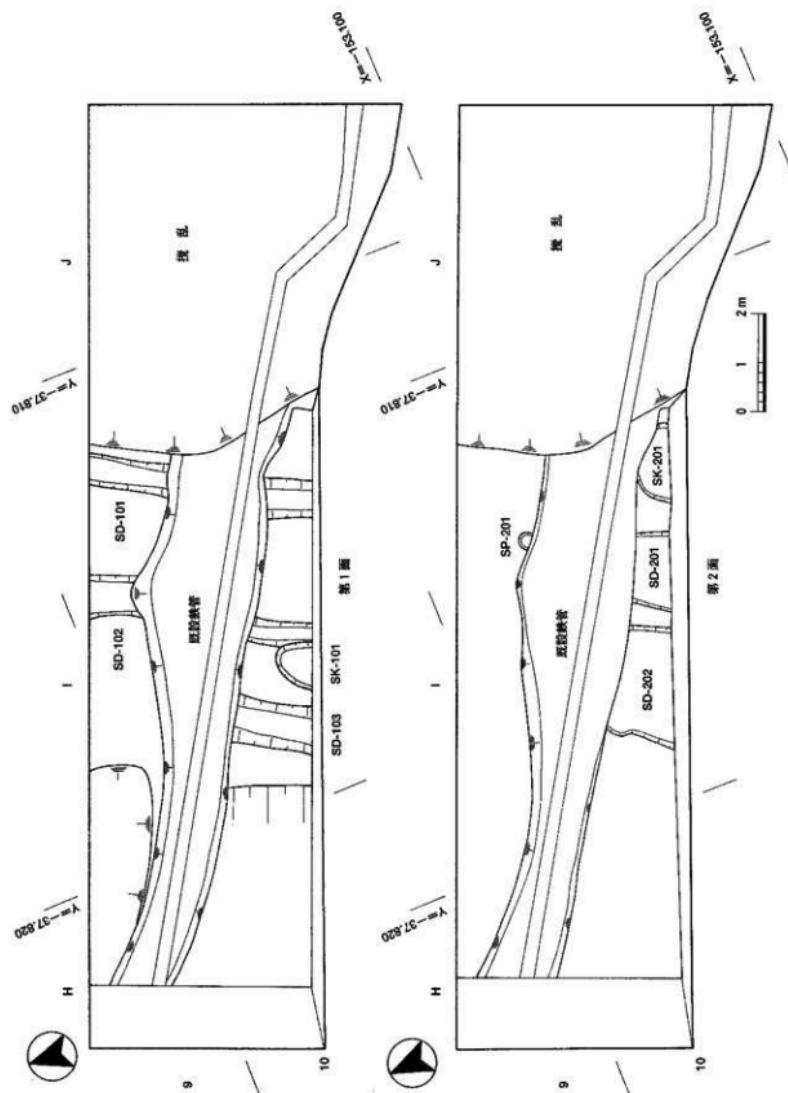
第2図 1区 南壁柱状図 (S = 1/50)

### 3) 検出遺構と出土遺物

#### ・上部調査

#### 第1面

現地表下0.9m(T.P.+7.7m)に存在する第2層上面を調査対象面とした。検出した遺構には、鎌倉時代に比定される土坑1基(SK-101)、溝3条(SD-101～SD-103)がある。出土遺物については、SK-101を除く各遺構から、古墳時代後期～鎌倉時代に比定される土師器、須恵器片が少量出土したが、細片化したもののが大半で図化し得たものはない。



第3図 1区 第1・2面平面図 ( $S = 1/100$ )

### 土坑（SK）

#### SK-101

Ⅶ-2-10 I 地区で検出した。南部が調査区外に至るほか東部で SD-102を切っている。検出部分で、東西幅1.0m、南北幅0.7mを測る。深さについては、検出部分で0.18mを測るが、本来の構築面が第1層上面であるため0.4m程度の深度が想定される。埋土は10YR 7/3にぶい黄橙色砂質シルトである。遺物は出土していない。

### 溝（SD）

#### SD-101

Ⅶ-2-10 I 地区で検出した。北東-南西方向に伸びるもので、一部、管路付設時の掘削により削平を受けている。検出部分で、検出長4.6m、幅0.65~0.85m、深さ0.2mを測る。埋土は2.5Y 7/3浅黄色砂質シルトである。遺物は古墳時代後期～鎌倉時代に比定される土師器、須恵器、瓦器の細片が少量出土している。

#### SD-102

SD-101に西接し並行して伸びる。SD-101と同様、管路付設時の掘削により、一部削平を受けている他、南端部分で西肩の一部がSK-101に切られている。検出部分で、検出長4.6m、幅0.5~0.9m、深さ0.1~0.2mを測る。埋土は2.5Y 7/3浅黄色砂質シルトである。遺物は古墳時代後期～鎌倉時代に比定される土師器、須恵器の細片が極少量出土している。

#### SD-103

SD-102に西接し並行して伸びる。北端は管路付設時に削平を受けている。検出部分で、検出長1.6m、幅0.95m、深さ0.16mを測る。埋土は2.5Y 7/3浅黄色砂質シルトである。遺物は古墳時代後期～鎌倉時代に比定される土師器、須恵器の細片が極少量出土している。

### 第2面

現地表下1.1m(T.P.+7.7m)に存在する第3層上面を調査対象面とした。検出した遺構には、平安時代前期に比定される土坑1基（SK-201）、溝2条（SD-201・SD-202）、小穴1個（SP-201）がある。出土遺物については、SP-201を除く各遺構から、古墳時代後期～平安時代前期に比定される土師器、須恵器、灰釉陶器等が少量出土したが、細片化したものが大半で岡化し得たものはない。

### 土坑（SK）

#### SK-201

Ⅶ-2-10 I 地区で検出した。南部が調査区外に至る他、北部が管路付設時に削平を受けている。検出部分で東西幅1.6m、南北幅0.7m、深さ0.2mを測る。埋土は10YR 5/1褐色砂質シルトである。遺物は古墳時代後期～平安時代前期に比定される土師器、須恵器、黒色上器の細片が少量出土している。

### 溝（SD）

#### SD-201

Ⅶ-2-10 I 地区で検出した。北東-南西に伸びるもので、北端は管路付設時に削平を受けている。検出部分で検出長0.75m、幅1.4~1.7m、深さ0.2mを測る。埋土は10YR 5/1褐色砂質シルトである。遺物は古墳時代後期～平安時代前期に比定される土師器、須恵器、灰釉陶器の細片が

少量出土している。

#### S D - 202

S D - 201の西側に隣接して並行して伸びる。S D - 201同様、北端は管路付設時に削平を受けている。検出部分で検出長1.2m、幅2.2~2.5m、深さ0.25mを測る。埋土は10YR5/1褐色砂質シルトである。遺物は古墳時代後期~平安時代前期に比定される土師器、須恵器の細片が少量出土している。

#### 小穴 (S P)

#### S P - 201

VII - 2 - 10 I 地区で検出した。南部は管路付設時に削平を受けている。検出部分で東西幅0.35m、南北幅0.2m、深さ0.1mを測る。埋土は5Y5/1灰色砂質シルトである。遺物は出土していない。

#### ・下部調査

現地表下1.25~7.1m (T.P.+7.4~14.5m) 近に堆積する地層（第4層~第22層）を調査対象とした。第4層は河川堆積層である。層厚が245~270cmを測るもので、大規模な自然河川であったことが推定される。本調査地の南に隣接する旧竜華操車場内および北側に隣接する地点で実施された調査成果を総合すれば、同河川が東西方向に流下した自然河川であったことが推定される。なお、1区の南約20mで（財）大阪府文化財センターにより実施された96-1・97-1トレーンでは、同自然河川に設けられた古墳時代中期中葉（5世紀中葉）の合掌型堆が2箇所で検出されている。第5層~第22層はシルト質粘土~粘土が優勢な層準で、第6・9・10・12が黒色帯を形成している。この間に形成された地層は、閉塞された湿地帯ないしは滯水状況を呈する環境下で形成された層相と理解される。遺物が出土した地層は無く時期は明確でない。

### 2区

#### 1) 検出構造・出土遺物

平面道路と地下道を繋ぐ暫定道路部分の法面掘削工事に伴って実施した調査で、掘削部分は北側から南側に向かって深くなっている。調査範囲は、調査地の北部に存在する既存の地下道擁壁部分から南端までの約36mである。この間において工事で掘削される現地表下2.6~5.4m (T.P.+5.4~2.6m) 近の地層を南壁および西壁において立会調査を行った。その結果、調査区北西部で堤1基（堤-101）と堤-101の北側に付随する溝1条（S D - 101）を検出した。

#### 堤（堤）

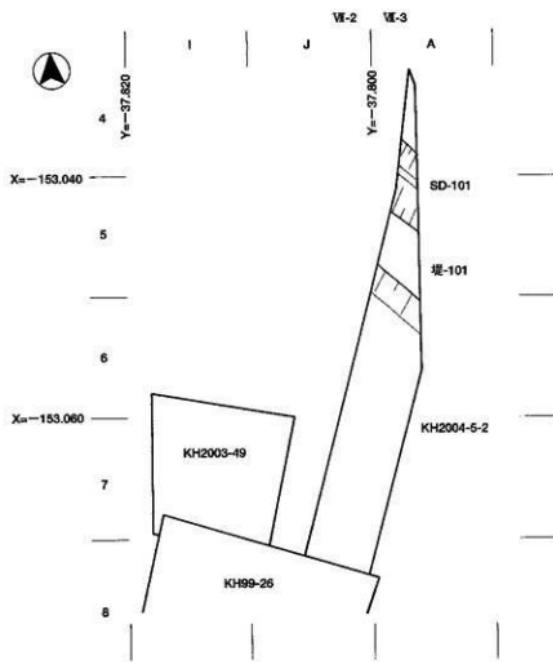
#### 堤-101

VII - 3 - 4 - 5 A 地区の西壁で検出した。断面調査での検出のため不明な点があるが、堤内部に打設された無数の杭の分布範囲からみて東西方向に伸びるものと推定される。断面形状は台形状で、北側にS D - 101が付隨している。規模については、5層上面を最上部と推定すれば、上面幅3.9m、基底部幅5.8mを測る。高さについては、北側に付隨するS D - 101の底部との比高差が約2.4mを測る。堤構築に際しては、洪水砂層である7層上面から杭が打設されており、一部、打設方向が確認できたものについては、上部を南にして斜めに打たれたものが多い。杭は一部を除けば径5~10cm程度の自然木で、先を尖らせる以外の加工は行われていない。樹種はクヌギ等を中心とする広葉樹が中心である。堤の南側については、堤の最上部に当たる地点付近まで自然河

川に起因する砂層（4層2.5Y8/4淡黄色細粒砂～粗粒砂）が厚く堆積しており、近接する第49次、第26次、本調査の第1区や南側の旧龍華操車場内で行われた95-8・9トレンチ、96-1・97-2トレンチ、98-1・2トレンチ、第20次、第24次、第39次で検出されている自然河川の右岸を構成する堤であった可能性が高い。出土遺物が皆無であるため構築時期等の詳細は明確でないが、既往調査の結果では、自然河川の埋没時期が古墳時代中期中葉（5世紀中葉）とされることから、それ以前であったことが推定される。

溝（SD）

SD-101



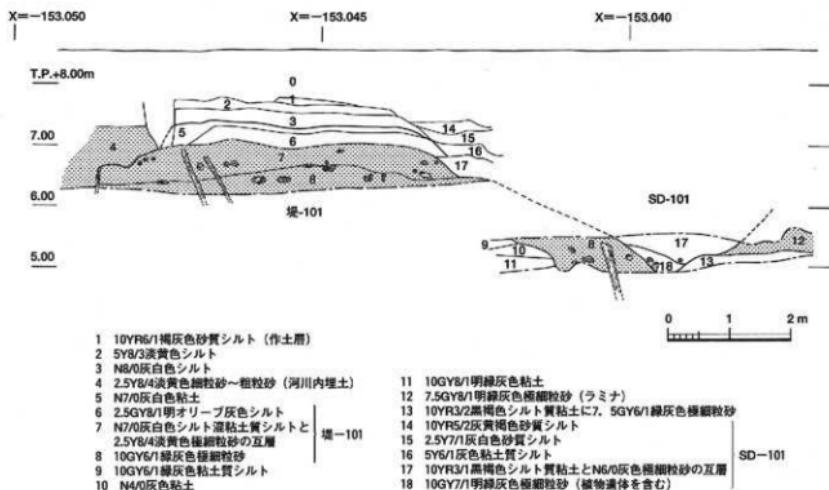
第4図 2区 堤-101、SD-101平面略図 (S=1/400)

堤-101の北側に付随して東西方向に伸びる。規模については、断片的な資料のため不明瞭であるが、検出部分からみて幅7m程度が想定される。深さは2.5mを測る。埋土は上層では粘土質シルト～砂質シルトが優勢な14～16層、下層では最下部の18層を除けば不均質なシルト質粘土と極細粒砂の互層である17層が厚く堆積しており、流勢が弱い環境下の溝であったことが窺われる。出土遺物は皆無であるが堤-101に付随するため、構築時期は古墳時代中期中葉（5世紀中葉）以前が想定される。ただ、堤-101より南で確認された河川堆積層が本遺構に及ばないため、河川の埋没時期とされる古墳時代中期中葉（5世紀中葉）以降も存続していた可能性が高い。

### 3. まとめ

今回の調査では1区で鎌倉時代および平安時代前期に比定される遺構を検出した他、2区では古墳時代中期中葉（5世紀中葉）以前に構築された自然河川に伴う堤1基（堤-101）と堤に付随した溝1条（SD-101）を検出した。1区で検出した遺構群については、北側に隣接する第26次調査の第2面（奈良時代～近世）との関連が推定される。

2区で検出した堤-101については、近接する地点で行われた第26次、第49次、本調査の第1区



第5図 2区 堤-101、SD-101西壁断面図 (1/80)

や南側の旧龍華操車場内で行われた95-8・9トレンチ、96-1・97-2トレンチ、98-1・2トレンチ、第20次、第24次、第39次の各調査で検出されている自然河川に関連したものと推定される。既往調査の成果を総合すれば、JR久宝寺駅の駅舎付近を南から北に流下した自然河川であったことが想定され、平成8～9年にJR久宝寺駅の南側で(財)大阪府文化財調査研究センターにより実施された96-1・97-1トレンチでは、この自然河川に設けられた水制工作物である堰2基が検出されている。この2基の堰からは、古墳時代中期中葉(5世紀中葉)迄の遺物が出土していることから、この時期に自然河川が完全に埋没し、河川としての機能が停止したものと考えられている。今回検出された堤-101は、この自然河川の右岸を構成していた堤である可能性が高く、当該期における久宝寺遺跡の集落域の広がりと土地利用の一環を考えるうえで本成果が一助となろう。

## 参考文献

- 後藤信義・本間奈都子 1996「八尾市亀井所在 久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書—JR久宝寺駅舎・自由通路設置に伴う—」(財)大阪府文化財調査研究センター報告書 第6集(財)大阪府文化財調査研究センター
- 後藤信義他 1998「八尾市渋川所在 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書II—一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査—」(財)大阪府文化財調査研究センター報告書 第26集(財)大阪府文化財調査研究センター
- 坪田真一他 2000「III久宝寺遺跡第20次調査(KH 96-20)」(財)八尾市文化財調査研究会報告66(財)八尾市文化財調査研究会
- 赤木克視他 2001「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書」(財)大阪府文化財調査研究センター報告書 第60集(財)大阪府文化財調査研究センター
- 原田昌則他 2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書—大阪竜華都市拠点地区竜華東西線3工区の掘削工事に

- 伴う-」『(財)八尾市文化財調査研究会報告68』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・岡田清一・樋口 紫 2002「久宝寺遺跡-八尾市神武町93-1の道路築造工事に伴う久宝寺第26次発掘調査報告-」『(財)八尾市文化財調査研究会報告70』(財)八尾市文化財調査研究会
- ・原田昌則・成海佳子・森本めぐみ・金糸満夫 2003「16. 久宝寺遺跡第39次調査(KH2001-39)」「平成14年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一・高萩千秋 2004「10. 久宝寺遺跡第49次調査(KH2003-49)」「平成15年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告」(財)八尾市文化財調査研究会

# 図 版



1区 第1面全景（東から）



1区 第1面遺構検出状況（南から）



1区 第2面全景（東から）



1区 第2面遺構検出状況（北から）



1区下部調査〈T.P.+5.0m付近〉（西から）



1区下部調査〈T.P.+4.0～2.0m付近〉（東から）



2区 堤ー101検出状況（南から）



2区 堤ー101検出状況（北から）



2区 堤ー101および坑列検出状況（南から）



2区 SD-101検出状況（東から）



2区 調査風景（北から）



2区 南部調査風景（北から）

VII 久宝寺遺跡第57次調査 (K H 2004-57)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市龍華町2丁目地内で実施した久宝寺線横断デッキ下部工事に伴う発掘調査の報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第57次（K H 2004-57）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の指示書（八教生文第80号 平成16年6月15日）に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成16年7月5日～7月7日（実働3日間）にかけて、樋口　薰を調査担当者として実施した。調査面積は約18m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査にあたっては、川村一吉、鈴木裕治、永井律子、村井俊子、吉川一栄の参加を得た。
1. 内業整理は、現地調査終了後、隨時実施し、平成16年10月29日に完了した。
1. 本書に関する業務は、図面トレースー市森千恵子、樋口、本書の執筆・写真撮影及び編集ー樋口が担当した。

## 本　文　目　次

1.はじめ	73
2.調査概要	73
1) 調査方法と経過	73
2) 基本層序	75
3) 検出遺構	75
3.まとめ	75

## 挿　図　目　次

第1図 調査区位置図	74
第2図 西壁断面模式図	76
第3図 杭列検出状況平面図	77

## 表　目　次

第1表 地層名一覧表	76
------------	----

## 図 版 目 次

図版一 調査地周辺状況

西壁地層断面

杭列検出状況

## VII 久宝寺遺跡第57次調査 (K H 2004-57)

### 1. はじめに

大阪府の東部、現在の大和川と石川の合流する付近から北西方向に広がる河内平野は、東を生駒山地、西を上町台地、北を淀川、南を羽曳野丘陵に区画されている。今回報告する久宝寺遺跡は、この大平野の東部の一画を占める八尾市の中西部に位置する。地形的には、北～北西方向に分流する旧大和川の主流であった長瀬川と平野川に挟まれた沖積地上に立地している。現在の行政区画では、八尾市久宝寺1～6丁目、西久宝寺、南久宝寺1～3丁目、北久宝寺1～3丁目、龍華町、渋川町1～7丁目、神武町、北龜井町1～3丁目、東大阪市大蓮東5丁目、大蓮南2丁目の東西約1.6km、南北1.7kmがその範囲と推測されている。

久宝寺遺跡では、これまでに大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター(現(財)大阪府文化財センター:以下センター)、八尾市教育委員会、当調査研究会による調査が数多く実施されており、その結果、縄文時代後期～近世にかけての複合遺跡であることが判明している。特に弥生時代後期～古墳時代前期にかけては、竪穴住居をはじめとする居住関連遺構群、弥生時代の方形周溝墓や、弥生時代の墓石とは性格を異にすると考えられる古墳などの墓域関連遺構群、水田などの生産関連遺構群が、整然とエリアをわけて存在する様子が解明されつつあり、当該期の「ムラ」の構造を知る上で貴重な情報を得ている。また、飛鳥～平安時代初頭にかけても、掘立柱建物や井戸をはじめとする居住関連遺構を検出しているほか、奈良三彩や綠釉陶器、墨書き土器、硯などの、一般的な集落では出土が稀な遺物が多く出土している点が注目される。これらの成果は、本遺跡内に寺院や官衙などの施設の存在を肯定するものとして貴重な成果である。なお、本遺跡の南東には、飛鳥～平安時代の瓦が多数認められ、渋川廃寺の存在が推測される。当該期における本遺跡の遺構群が、渋川廃寺に関連する可能性も考えておきたい。

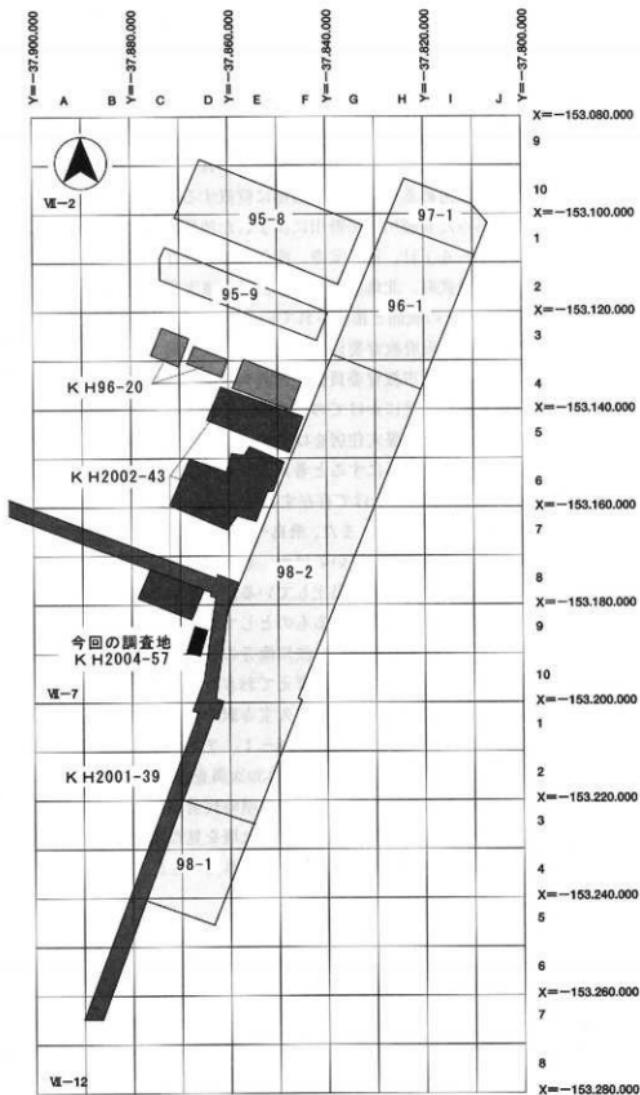
一方、旧国鉄竜華操車場跡地のほぼ中央、現JR久宝寺駅の南に位置する今回の調査地周辺では、センターによる95-8、9、96-1、97-1、98-1、2トレンチや多目的広場調査地をはじめ、当調査研究会による第20次調査(K H 96-20)、第39次調査(K H 2001-39)、第43次調査(K H 2002-43)が行われてきた。この付近の調査では、古墳時代前期の久宝寺1号墳や、古墳時代中期に機能していたとされる流路と、流路内に建設された堰を見たほか、その流路が埋没した後には、古墳時代後期の七ツ門古墳が構築されたことで知られている。

### 2. 調査概要

#### 1) 調査方法と経過

今回の発掘調査は、久宝寺線横断デッキ下部工事に伴うもので、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施した第57次調査にあたる。本調査地は、旧国鉄竜華操車場跡地内のほぼ中央に位置し、JR久宝寺駅の南約80mに位置する。調査地の平面形状は、東西約3m、南北約6mの長方形を呈する。調査面積は約18m<sup>2</sup>である。

調査は、八尾市教育委員会作成の調査指示書に基づき、現地表(T.P.+8.7～8.8m)下1.0mまでを機械掘削とし、以下現地表下1.6m(T.P.+7.1～7.2m)前後までの0.6mを機械と人力を併用して



第1図 調査区位置図 ( $S = 1/1000$ )

掘削、平面的な調査を実施し、遺構・遺物の検出に努めた。

調査では、遺構平面図の作成や遺物の取り上げの際、遺構・遺物の絶対的位置を示す必要が求められる。そこで本調査では、平成9年度から旧国鉄竜華操車場跡地内で断続的に行われている「八尾市都市計画事業大阪竜華都市拠点土地区画整理事業に伴う調査」で設定した地区割り方法を採用し、これに備えた。

調査の結果、T.P.+7.1m付近において杭列を検出した。出土遺物はコンテナ（縦0.6m×横0.4m×深さ0.2m）1箱のほか、上記の杭材などが加えられる。

### 2) 基本層序

概ね9層の地層を確認した。0層は、旧国鉄竜華操車場造成に伴う盛土層である。1層は硬くしまった粘土質シルト～極細粒砂から成る地層で、人為的に構成されたものである。第43次調査(K II 2002-43)では、旧国鉄竜華操車場造成以前に機能していた、久宝寺村と竜華村を結び、また亀井村と渋川村の村界を成す道路を検出しているが、本層もその道路を構成する地層と推測される。2層はラミナ構造が見える水成層である。3層は細粒砂～中粒砂からなる硬くしまった地層である。4層は搅拌が著しいグライ化層で、水田耕作土に相当する。5～8層は褐灰色を帯びた粘土質シルト～シルト優勢層である。後述する9層水成層の土壤化部分に相当する。9層はラミナ構造が顕著に残る水成層である。本層内より杭列が検出された。なお、各地層の詳細については、一覧表を作成したのでそちらを参照されたい。

### 3) 検出遺構

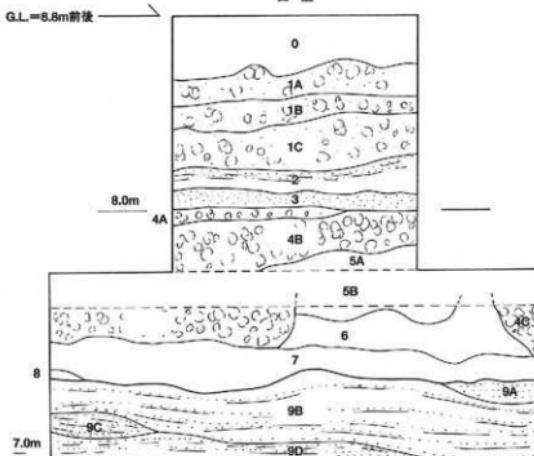
今回の調査では、9層砂礫層内において杭列を検出した。杭列は、工事掘削深度の制約上、杭列上面を見るに留まったため、構造については不明な点が多い。観察の限りでは、南東から北西方向に30～35度の傾斜をつけて打設した縦杭と、それに対し横方向に直角に組み合わせた横木から構成される。縦杭が径10cm前後の太さをもつて対し、横木は径20cmを測るものも存在し、概して横木の方が太い点が特徴的である。また、縦杭列の上面（北西面）には、木の皮を貼り付けたような様相が見られた。水を受け止めるための構造と推測される。

### 3.まとめ

今回の調査では、9層砂礫層内より検出された杭列の検出が第1の成果である。この杭列は、当調査地の北側で実施された、第39次調査(K H 2001-39)や第43次調査(K H 2002-43)で検出した堰の一部と推測される。両調査では、堰の設営時期を古墳時代中期頃に比定したほか、この堰が、流向を転じるための施設ではなく、護岸のための設備であった可能性を指摘している。今回の調査では、堰の構造を解明することはできなかったが、少なくとも、両調査地で検出した堰の南部への広がりが確実視された点は評価に値すると思われる。

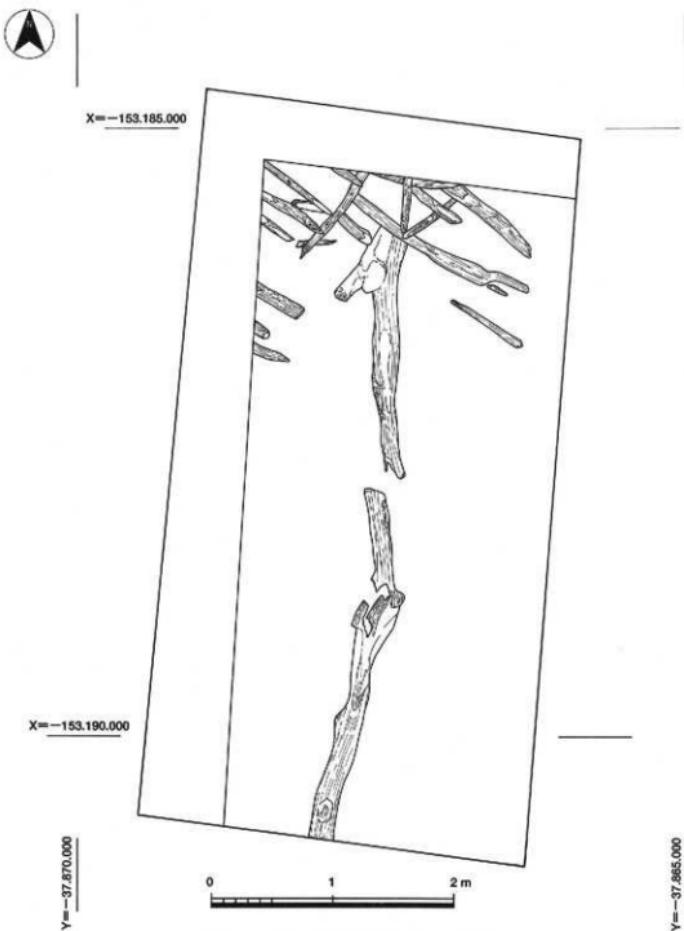
T.P.+9.0m

西壁



地層名	色調	粒度組成	堆積構造	検出遺構 出土遺物	備考
0層	0 A 5Y8 1/灰白色	2~3cm大のバラス	ブロック	客土・盛土	
	0 B 5Y3 1/オリーブ黒色	シルト~極粗粒砂	ブロック	客土・盛土	
1層	1 A 10G 6 1緑灰色	シルト~極細粒砂	ブロック	道路状構造	
	1 B 10YR 5 2/灰黄褐色	粘土質シルト~シルト(2~3cm大のブロック)	ブロック	道路状構造	
	1 C 2.5Y 6 1黄灰色	粘土質シルト~シルト(2~3cm大のブロック)	ブロック	道路状構造	
2層	2.5Y 7 / 3灰黄色~10YR 5 / 2灰黄褐色	2.5Y 7 / 3灰黄色細粒砂~10YR 5 / 2灰黄褐色粘土質シルト	ラミナ		上方にラミナ構造あり
3層	N 5 / 灰色	細粒砂~中粒砂			かたい地層
4層	4 A 7.5GY 5 / 1緑灰色	粘土質シルト	ブロック	水田耕作土	
	4 B 5G 4 / 1暗緑灰色	粘土質シルト	ブロック	水田耕作土	
	4 C 5G 5 / 1緑灰色	粘土質シルト~シルト(3~5cm大)	ブロック	水田耕作土	
5層	5 A 2.5GY 5 / 1オリーブ灰色	細粒砂~中粒砂	土壤化		
	5 B 10YR 5 / 1褐灰色	粘土質シルト~シルト(雲状酸化Mnを含む)	土壤化		砂礫層上面の土壤化層
6層	10YR 5 / 2灰黄褐色	粘土質シルト~シルト(雲状酸化Mnを含む)	土壤化		砂礫層上面の土壤化層
7層	10YR 6 / 1褐灰色	粘土質シルト~シルト(雲状酸化Mnを極めて多く含む)	土壤化		砂礫層上面の土壤化層
8層	10YR 5 / 1褐灰色	シルト	土壤化		砂礫層上面の土壤化層 土器細片が混在
9層	9 A 2.5GY 6 / 1オリーブ灰色	シルト~極細粒砂	水成層	流路	流路内埋土
	9 B 5Y 4 / 1灰色	粘土質シルト~極細粒砂	ラミナ	流路	流路内埋土
	9 C 2.5Y 7 / 3灰黄色	粗粒砂~極粗粒砂	ラミナ	流路	流路内埋土
	9 D 2.5Y 4 / 1黄灰色	シルト~極細粒砂	ラミナ	流路	流路内埋土

第2図 西壁断面模式図 (S=1/20)・第1表 地層名一覧表



第3図 坑列検出状況平面図 (S=1/40)

## 参考文献

- 坪田真一・森本めぐみ・古川晴久 2000「III 久宝寺遺跡（第20次調査）」『財團法人八尾市文化財調査研究会報告66』（財）八尾市文化財調査研究会
- 原田昌則・成海佳子・森本めぐみ・金親満夫 2002「16. 久宝寺遺跡第39次調査（K H2001-39）」『平成14年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会
- 坪田真一・金親満夫 2002「20. 久宝寺遺跡第43次調査（K H2002-43）」『平成14年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告』（財）八尾市文化財調査研究会



# 図 版



調査地周辺状況（南から）



西壁地層断面（南東から）



杭列検出状況（西から）

VIII 久宝寺遺跡第62次 (K H 2004-62)

## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市龍華町1丁目地内で実施した久宝寺線横断アッキ下部工事（その2）に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第62次調査（KH2004-62）の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書（八教生文第275号 平成16年12月22日）に基づき、財團法人八尾市文化財調査研究会が八尾市から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成17年1月20日から1月25日（実働4日）にかけて、荒川和哉を調査担当者として実施した。調査面積は14.85m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査においては、伊藤静江・岩沢玲子・垣内洋平・加藤邦枝・鈴木裕治・竹田貴子の参加を得た。
1. 内業整理においては、伊藤・垣内・村田知子の協力を得た。
1. 整理業務は、現地調査終了後、随時実施し、平成17年3月18日に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、図面トレース－荒川が行った。
1. 本書の執筆および構成は、荒川が行った。

## 本　文　目　次

1.はじめ	79
2.調査概要	81
1) 調査の方法と経過	81
2) 層序	81
3) 検出遺構と出土遺物	84
3.まとめ	85

## 挿図目次

第1図 調査地周辺図	79
第2図 調査区位置図および地区割図	80
第3図 東壁・南壁土層断面図	83
第4図 第1面・第2面検出遺構平面図	84

## 図版目次

図版一 調査地全景

第1面

第2面

## VIII 久宝寺遺跡第62次調査 (K H 2004-62)

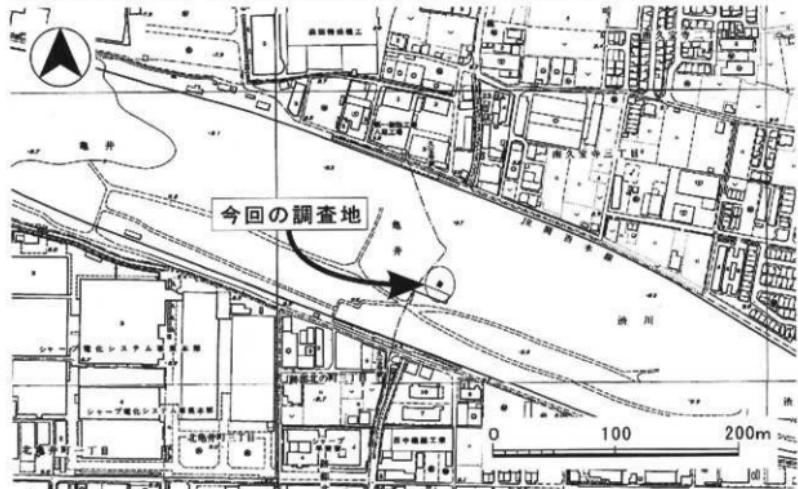
### 1. はじめに

久宝寺遺跡は、久宝寺遺跡は、八尾市北西部、現在の行政区画では北久宝寺1～3丁目・久宝寺1～6丁目・西久宝寺・南久宝寺1～3丁目・神武町・渋川町1～7丁目・龍華町1～2丁目・北龟井町1～3丁目、および東大阪市大蓮東5丁目・大蓮南2丁目に当たり、東西約1.7km、南北約1.7kmの範囲に展開する縄文時代晚期～近現代にかけての複合遺跡である。

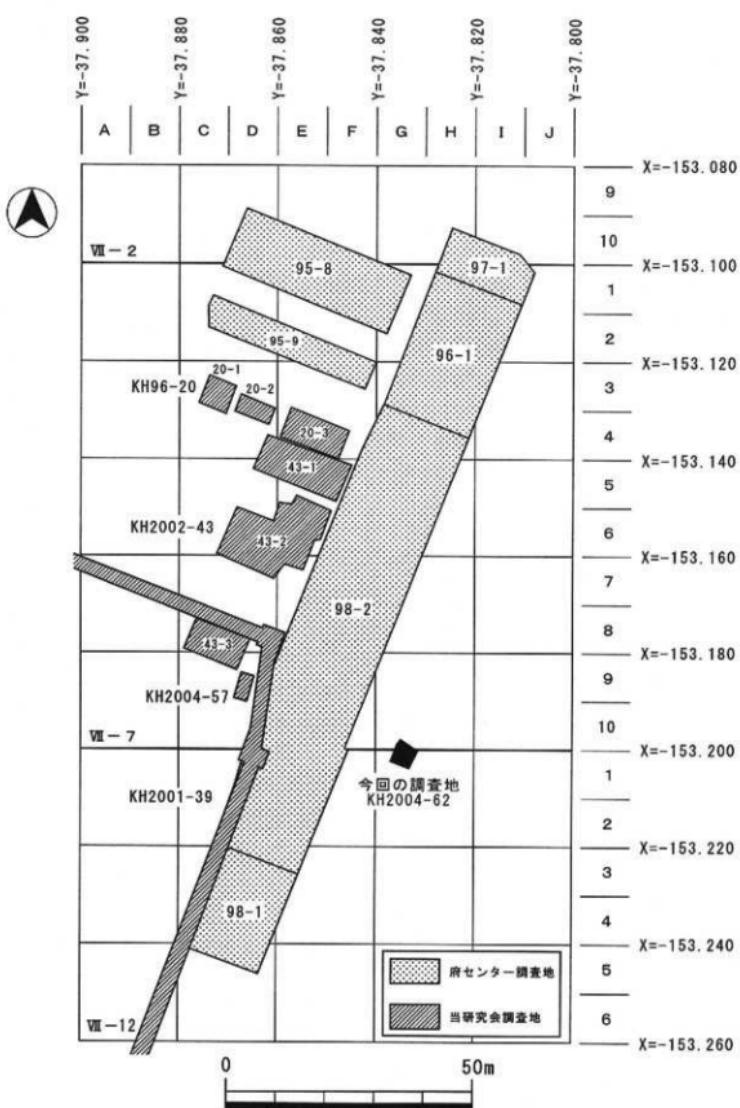
久宝寺遺跡を含む中河内地域は、東を生駒山地、南を羽曳野丘陵・河内台地、西を上町台地、北を淀川に面されている河内平野の南部に当たる。河内平野の南部は、旧大和川水系の平野川・長瀬川・楠根川・玉串川・恩智川が北西方向に放射状に流下しており、久宝寺遺跡は、旧大和川水系のうち旧大和川の主流であった長瀬川とその支流の平野川に挟まれた扇状地性低地上に展開した遺跡で、遺跡範囲内の現地表の標高は、T.P.+6.6～12.0mを測る。

久宝寺遺跡第62次調査を実施した久宝寺遺跡の南部では、竜華操車場跡地の再開発に伴う各種工事によって破壊される遺跡を対象とした発掘調査が、八尾市教育委員会、(財)大阪府文化財調査研究センター(平成14年4月以降、(財)大阪府文化財センター)、(財)八尾市文化財調査研究会により、継続的に実施されている。遺跡の概要や既往調査の成果については、前章までの「1. はじめに」に詳しく述べられているので、ここでは割愛する。

今回の調査地周辺における既往調査の成果についてのみ概観すると、北側に位置する府センターの95-8・9トレンチ、96-1・97-1トレンチ、当調査研究会の第20次調査(KH96-20)、第39次調査(KH2001-39)、第43次調査(KH2002-43)、第57次調査(KH2004-57)において



第1図 調査地周辺図 (S=1/4000)



第2図 調査区位置図および地区割図 (S=1/1000)

て、古墳時代前期から中期にかけて埋没した自然河川、および、その河川に設置された堰と堰部材が検出されている。この河川が埋没した後、安定した微高地となるが、96-1トレンチでは掘立柱建物が検出され、南西側に位置する98-1トレンチでは横穴式石室を主体とする七ツ門古墳が検出されている。中世以降は耕作地として利用されるようになり、条里制の区画に則った水田と鳥畠が各調査地から検出されている。95-8・9トレンチ、97-1トレンチから検出された道路状構造は、その初現が鎌倉時代まで遡り、1938(昭和13)年に操業した竜華操車場が造成されるまで、久宝寺村と竜華村を繋ぐ道路として機能していた。

## 2. 調査概要

### 1) 調査の方法と経過

本書で報告する久宝寺遺跡第62次調査 (K H2004-62) は、久宝寺線横断テッキ下部工事 (その2) に伴い実施したものである。

調査地は、八尾市龍華町1丁目のJR久宝寺駅の約90m南方に位置する。南北に長い亜な方形を呈し、調査面積は14.85m<sup>2</sup>を測る。調査に際しては八尾市教育委員会による埋蔵文化財調査指示書に基づき、現地表 (T.P.+9.0m前後) 下1.0mを機械掘削の対象範囲とし、以下0.6mについては人力掘削を行った。

調査区の地区割については、竜華操車場跡地とその周辺において継続する調査に対応するために平成9年度に当調査研究会が設定したものを使用した (本書IのP 3参照)。今回の調査地は、この地区割によれば、Ⅷ-7-10G地区とⅧ-12-1G地区に跨る部分に位置する (第2図)。

遺構検出面の呼称については、機械掘削が終了し、人力による調査で遺構が検出された面を「第1面」と呼称し、以下、上位の遺構検出面から順に番号を付した。遺構名については、遺構略号+遺構検出面番号+遺構番号 (2桁) で表現した (例、SD201=第2面検出の溝1)。

調査の結果、古墳時代後期以降の溝 (落ち込み) と近世に比定できる土坑を検出した。出土遺物は、整理用コンテナ (縦60cm×横40cm×深さ15cm) 1箱を数える。

### 2) 層序 (第3図)

今回の調査地は竜華操車場を南北に継続していた地下道の脇に当たり、調査前には地下道の建設工事に伴う搅乱を受けていると予測されたが、地下道の建設に伴う搅乱は、調査区の西壁にのみ見られるだけで、それ以前の地層が良好に残っていた。

8層は、粗粒の砂と細粒の砂が互層をなし、単層中には葉理は見られず分級は悪い。この砂層は調査地周辺の既往の調査においても検出されており、自然河川の河道に古墳時代前期から中期にかけて堆積したものである。7層は、砂層上面の凹地に堆積したシルト層で、自然河川の埋没した後の古墳時代後期以降、奈良・平安時代までの間に堆積したと考えられる。6層は、砂疊が混じるシルト～粘土質シルト層であるが、砂疊はマーブル状に混ざっている部分が見られ、搅拌を受けていたことが窺える。土師器・須恵器・瓦質土器の破片が、他の層に比べて多く出土しており、中世の水田耕作土と考えられる。5-2層から4層は、砂が混じる粘土質シルトを主体とし、5-2層・5-1層は、調査区の南端にのみ見られる。5-2層・5-1層は、一連のものであるが、5-1層には砂質土がブロック状に混ざるので分けられる。柿軸皿の破片が出土して

いることから、近世の耕作土と考えられる。4層は、調査区全体に見られ、層相は6層と同じである。肥前系磁器の破片が出土していることから、後述する初期段階の盛土が構築される直前までの近世の水田耕作土と考えられる。

3層から1層は、調査区の北側に見られ、砂質土と粘質土がブロック状に混ざる層相で、人為的に盛られたものである。1層の盛土は、府センター98-2-II区の第1面において検出された「坪境」に続くもので、3層・2層の盛土は、府センター98-2-II区の第2面において検出された「坪境」に続くものと考えられる。東壁の土層断面から、3層・2層によって構築された初期段階の盛土の上に、1層を盛土することによって構築されたことが看取できる。1層の盛土の上面には明治22年に開通した大阪鉄道（明治33年関西鉄道に合併された後、明治40年国有化により国鉄関西本線となる。以下、旧関西本線とする）の線路敷である礫を主体とする層が見られる。1層の盛土の南辺には、府センター98-2-II区の第1面において検出された「久宝寺駅施設」と考えられている「布掘状の溝」と「杭列」の上部構造物である硬く締まった礫混じり砂質シルトを主体とする盛土が見られる。この盛土の北辺は「布拋状の溝」に対応する部分に当たり、南辺は2本一対の「杭列」と位置的に重なる。これらのことから、この施設は旧関西本線線敷の南辺に設けられた全長25m以上・幅2m余りの規模を持つものであったと考えられる。

なお、調査区の北半部は、1層以下が殆どグライ化しており、主に暗緑灰色を呈している。北壁ではすべてグライ化していた。一方、南半部は全体的に酸化鉄が雲状に見られた。以下に記載した各層の土色は、グライ化していない部分・雲状の酸化鉄が見られない部分のものである。

0層 旧関西本線敷設時以降の客土・盛土および攪乱埋土。

1層 10YR5/3にぶい黄褐色極細粒砂混粘土質シルト + 10YR4/2灰黄褐色砂質シルト（<sup>註1</sup>極粗粒）  
がブロック状+中粒の中疊～細疊。酸化鉄（斑状）・酸化マンガン（斑状）。

2層 2.5Y4.5/1黄灰色細粒の中疊～細疊多混砂質シルト（極粗粒～極細粒）+ 5 Y4.5/1灰色  
粘土質シルトがブロック状。

3層 10Y4/2黄灰色砂質シルト（極粗粒）+ 5 Y4.5/1灰色粘土質シルトがブロック状+細粒の  
中疊～細疊。酸化鉄（管状）。

4層 2.5Y4/1黄灰色中粒の中疊～極細粒砂混粘土質シルト。酸化鉄（管状）。

5層

5-1層 2.5Y4/2暗灰黄色粗粒砂～極細粒砂混粘土質シルト+シルト質粗粒砂～極細粒砂  
がブロック状。

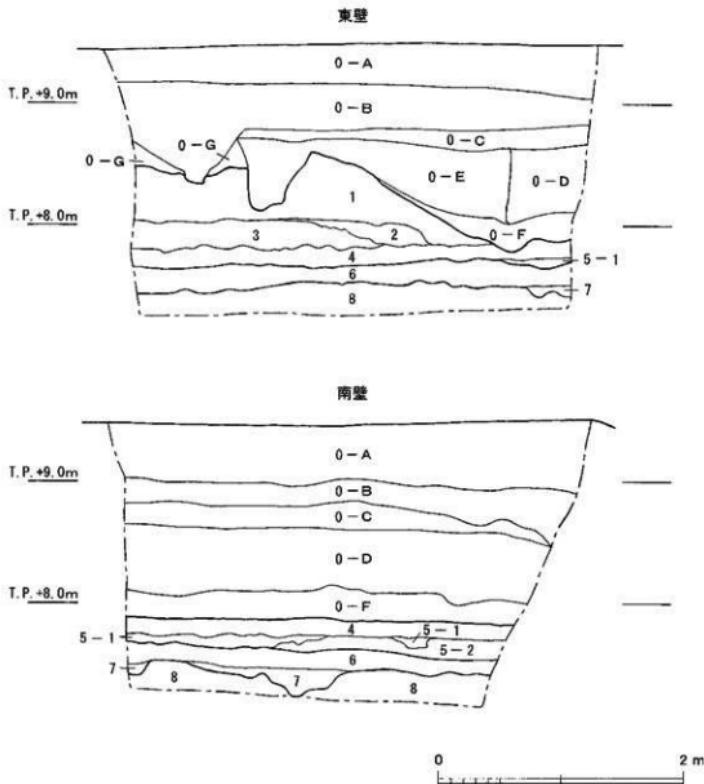
5-2層 2.5Y5/2暗灰黄色細疊～極細粒砂混粘土質シルト。酸化マンガン（斑状）。

6層 2.5Y5/2暗灰黄色（5-2層より明るい）細疊～極細粒砂混シルト～粘土質シルト。酸化  
鉄（斑状）・主に下部に酸化マンガン（斑状）。上面は第1面。

7層 2.5Y5/2暗灰黄色極粗粒砂～極細粒砂少量混シルト。主に上部に酸化マンガン（斑状）。  
S D 201・202埋土。

8層 2.5Y5/2暗灰黄色細疊混極粗粒砂～中粒砂と細粒砂～極細粒砂（わずかに泥質を帯びる）  
の互層。単層中に葉理は見られない。単層の層厚は10cm前後。上面は第2面。

### 3) 検出遺構と出土遺物



0 - A ~ 0 - G層 旧開西本郷敷設時以降の客土・盛土および埋立土（註1参照）

- 1 層 10YR5/3に近い黄褐色極粗粒砂混粘土質シルト+10YR4/2灰黃色細粒砂質シルト（ブロック状）+中粒の中礫～細礫
- 2 層 2.5Y4.5/1黄灰色細粒の中粒～細粒多孔砂質シルト+5Y4.5/1灰色粘土質シルト（ブロック状）
- 3 層 10Y4.2黄灰色砂質シルト+5Y4.5/1灰色粘土質シルト（ブロック状）+細粒の中粒～細礫
- 4 層 2.5Y4/1黄灰色中粒の中粒～極粗粒砂混粘土質シルト
- 5 - 1層 2.5Y4/2暗灰黄色粗粒砂～極粗粒砂混粘土質シルト+ナシルト質粗粒砂～極細粒砂（ブロック状）
- 5 - 2層 2.5Y5/2暗灰黄色粗礫～極粗粒砂混粘土質シルト
- 6 層 2.5Y5/2暗灰黄色（5 - 2層より明るい）粗礫～極細粒砂混粘土質シルト～粘土質シルト
- 7 層 2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂～極細粒砂混粘土質シルト S D201・202埋土
- 8 層 2.5Y5/2暗灰黄色粗礫混粘土質砂～中粒砂と2.5Y5/2暗灰黄色細粒砂～極細粒砂の互層

第3図 東壁・南壁土層断面図 (S=1/40)

〈第1面〉

6層上面 (T.P.+7.6m前後) で、土坑1基 (SK101) を検出した。

SK101 (第4図左)

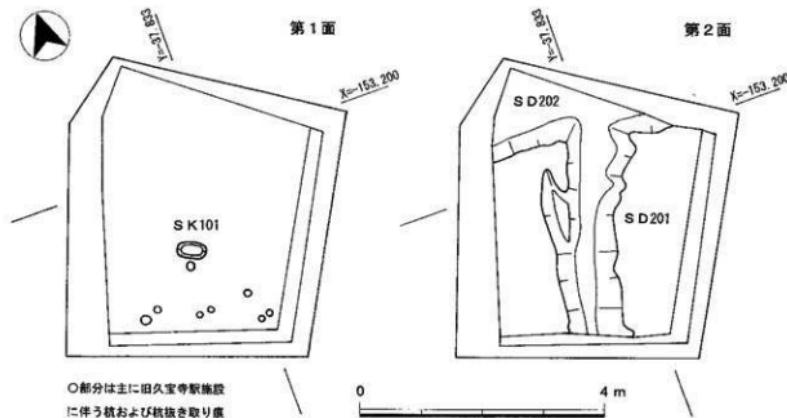
調査区中央の南寄りで検出した穴である。平面の形状は楕円形で、長径0.53m・短径0.25m・深さ0.1mを測る。埋土は底に2.5Y5/1黄灰色極粗粒砂～極細粒砂混じりシルト質粘土(5Y4/1灰色シルト質粘土の薄層を挟む)が堆積し、その上に2.5Y5/2暗灰黄色粘土質シルト(6層)のブロックが載る不均質で繋ぎが弱いものである。出土遺物は無く、造構の帰属時期は層位から考えて、近世(初期段階の盛土の構築時より以前)に比定できる。造構の性格は明確にできないが、埋土の堆積状況から、掘られてから埋め戻されるまでの一定期間、開削された状態にあったことが窺える。

〈第2面〉

8層の砂層上面 (T.P.+7.4～7.5m) で、溝2条 (SD201・202) を検出した。

SD201・202 (第4図右)

SD201は、調査区の中央を南南西～北北東方向に伸び、検出長3.4m・幅0.9～1.2m・深さ0.25mを測る。南南西側は調査区外に至り、北北西側はSD202に交わる。SD202は、調査区の北端をほぼ東西方向に伸び、検出長3.0m・最大幅1.4m・深さ0.2mを測る。南肩以外は調査区外に至るために全体の形状は不明であり、溝ではなく北側に低くなつてゆく落ち込みである可能性がある。埋土は、SD201・202ともに2.5Y5/2暗灰黄色粗粒砂～極細粒砂少景混シルト(7層)である。出土遺物は、奈良・平安時代に比定できる須恵器壺の破片を含む土器片が数点である。造構の帰属時期は出土遺物や層位から、奈良・平安時代までに収まるものと考えられる。造構の性格については、この造構が人為的に開削されたものであるかということも含めて不明である。



第4図 第1面・第2面検出造構平面図 (S=1/80)

### 3.まとめ

今回の調査の結果、周辺の調査地で確認されている自然河川の河道に古墳時代中期までに堆積した砂層を確認した。自然河川が埋没した後、当調査地の周辺は安定した微高地となり、周辺の調査地では古墳時代後期以降の遺構が検出されている。当調査地においては、8層上面で溝2条を検出したが、その性格については不明である。中世以降は耕作地として利用されていたと考えられ、6層上面で近世に比定できる穴を検出した。平面的には検出していないが、横断面において、近世から旧関西本線敷設時までの坪境とされる盛土の南辺や、旧関西本線敷設時以降の鉄道に関連する土地造成の一端を知ることができる土層を確認した。

#### 註記 註1

- 註1 旧関西本線敷設時以降の0層については、次の7つに大別することができる。
- 0-A 新地下道工事以降の盛土。砂質シルト主体。
  - 0-B 竜華操車場操業時以降の盛土・搅乱埋土。上位から、コンクリート・礫多混砂質シルト・砂礫主体・砂礫主体（コンクリート製U字溝・塩化ビニール管を含む）。
  - 0-C 竜華操車場操業時の路線敷。砾主体。
  - 0-D 竜華操車場造成時の客土・盛土。上位から、礫混砂質シルト・極粗粒砂～粗粒砂混シルト・砂礫+粘土質シルト（ブロック状）。
  - 0-E 竜華操車場造成以前の旧久宝寺駅（明治43年開設）施設に伴う客土・盛土・搅乱埋土。硬く締まる礫混砂質シルト主体。
  - 0-F 竜華操車場造成以前の客土・盛土・搅乱埋土。上位から、礫少量混砂質シルト・砂礫主体。
  - 0-G 竜華操車場造成以前の旧関西本線路線敷。砾主体。

#### 参考文献

- ・後藤信義・本田奈子編 1996「久宝寺遺跡・竜華地区（その1）発掘調査報告書—J R久宝寺駅舎・白山通路設置に伴う—」（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第6集
- ・後藤信義・島崎久恵・長田芳子編 1998「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書II 一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査一」（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第26集
- ・坪田真一 2000「III 久宝寺遺跡第20次調査（K H 96-20）」「財団法人八尾市文化財調査研究会報告66」（財）八尾市文化財調査研究会
- ・赤木克祝・西村歩・酒井泰子・秋山浩三・瀬川貴文・渡辺智恵美・青井裕子・大澤正巳・鈴木瑞穂編 2001「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書III—一般府道住吉八尾線付け替え事業に伴う発掘調査—」（財）大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第60集
- ・原田昌則・成海佳子 2001「13. 久宝寺遺跡第39次調査（K H 2001-39）」「平成13年度（財）八尾市文化財調査研究会事業報告」（財）八尾市文化財調査研究会
- ・坪田真一 2005「I 久宝寺遺跡第43次調査（K H 2001-43）」本書掲載
- ・樋口薰 2005「VII 久宝寺遺跡第57次調査（K H 2004-57）」本書掲載

# 図 版



調査地全景（南から）



第1面（南西から）



第2面（北から）

## 報告書抄録

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく
書名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告83
副書名	I 久宝寺遺跡（第43次調査）II 久宝寺遺跡（第48次調査）III 久宝寺遺跡（第49次調査） IV 久宝寺遺跡（第53次調査）V 久宝寺遺跡（第54次調査）VI 久宝寺遺跡（第56次調査） VII 久宝寺遺跡（第57次調査）VIII 久宝寺遺跡（第62次調査）
卷次	
シリーズ名	財団法人八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	83
編著者名	I～III坪田真一 IV・V成海佳子 VI原田昌則 VII施口 薫 雷荒川和哉
編集機関	財団法人八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2 TEL0729-94-4700
発行年月日	西暦2005年3月31日

所取遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積(m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
久宝寺遺跡 (第43次調査)	大阪府八尾市龍華町1丁目地内	27212	23	135度35分14秒	34度37分07秒	20021007～20021125	約477	JR久宝寺駅南側駅前広場南北横断アッキ下部工事
久宝寺遺跡 (第48次調査)	大阪府八尾市龍華町1丁目	27212	23	135度35分20秒	34度37分02秒	20030310～20030506	約55.3	久宝寺南駅前横断アッキ下部工事
久宝寺遺跡 (第49次調査)	大阪府八尾市神武町	27212	23	135度35分15秒	34度37分10秒	20030611～20030912	約120	久宝寺線整備工事
久宝寺遺跡 (第53次調査)	大阪府八尾市跡部北の町2-3丁目、大字龜井地内	27212	23	135度58分6秒	34度61分8秒	20031003～20031009	25m <sup>2</sup>	竜谷東西線共同溝設工事
久宝寺遺跡 (第54次調査)	大阪府八尾市鹿野町2丁目	27212	23	135度58分7秒	34度61分9秒	20031126～20031216	164m <sup>2</sup>	多目的広場連絡横断アッキ築造工事
久宝寺遺跡 (第56次調査)	大阪府八尾市神武町	27212	23	135度58分8秒	34度62分0秒	20040701～20040903	約267m <sup>2</sup>	T R久宝寺駅前周辺道路整備工事
久宝寺遺跡 (第57次調査)	大阪府八尾市龍華町2丁目地内	27212	23	135度58分7秒	34度61分8秒	20040705～20040707	約18m <sup>2</sup>	久宝寺線横断アッキ下部工事
久宝寺遺跡 (第62次調査)	大阪府八尾市龍華町1丁目	27212	23	135度58分7秒	34度61分8秒	20050120～20050125	約14.85	久宝寺線横断アッキ下部工事

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久宝寺遺跡 (第43次調査)	集落遺構	古墳時代中期～飛鳥時代	溝・塙	土師器・須恵器	
		中世～近世	土坑・溝・ピット・道路状遺構	土師器・須恵器・瓦器・瓦	
	生産遺構	中世～近世	水田・島畑・溝	土師器・陶磁器	
久宝寺遺跡 (第48次調査)	集落遺構	古墳時代後期～飛鳥時代	井戸・土坑・溝	土師器・須恵器	
		平安時代	井戸・土坑・溝	土師器・須恵器・黒色土器・瓦器	
	生産遺構	中世～近世	水田・島畑・井戸・溝・畦畔状遺構	土師器・陶磁器	
久宝寺遺跡 (第49次調査)	集落遺構	弥生時代後期	溝	弥生土器	
		古墳時代後期～奈良時代	土坑・溝・ピット	土師器・須恵器	
	生産遺構	中世～近世	水田・島畑・溝	土師器・須恵器	
久宝寺遺跡 (第53次調査)	生産遺構	古墳時代中期	自然河川		
	生産遺構	鎌倉～近世	水田・島畑	土師器・瓦器	
久宝寺遺跡 (第54次調査)	生産遺構	古墳時代中期	自然河川	土師器・須恵器	
	生産遺構	中世～近世	井戸・土坑・溝・小穴	土師器・須恵器・白磁・国産陶磁器・錢貨	
久宝寺遺跡 (第56次調査)	生産遺構	古墳時代中期	自然河川・堤・溝		自然河川の右岸堤を検出。
	集落遺構	平安～鎌倉	土坑・溝	土師器・須恵器・灰釉陶器	
久宝寺遺跡 (第57次調査)	生産遺構	古墳時代中期	杭列		杭列は北接する地点で検出された溝の一部と考えらえる。
久宝寺遺跡 (第62次調査)	生産遺構	古墳時代後期～近世	溝・土坑		

財團法人 八尾市文化財研究会報告書83

久宝寺遺跡

- I 久宝寺遺跡第43次調査
- II 久宝寺遺跡第48次調査
- III 久宝寺遺跡第49次調査
- IV 久宝寺遺跡第53次調査
- V 久宝寺遺跡第54次調査
- VI 久宝寺遺跡第56次調査
- VII 久宝寺遺跡第57次調査
- VIII 久宝寺遺跡第62次調査

発行 平成17年3月

編集 財團法人 八尾市文化財調査研究会

〒581-0821 大阪市八尾市幸町4丁目58番地の2

TEL・FAX 0729(94)-4700

印刷 株式会社 明新社

〒630-8141 奈良市南京終町3丁目464番地

TEL 0742(63)-0661/FAX 0742(63)-0660

表紙 レザック66 <260kg>

本文 書籍用紙 <70kg>

図版 マットコート<135kg>

